14.5
563
14. 5-563
1200501217770

始

14.5
563

露文飜譯 ソ聯極東及外蒙調査資料 第四十六編

北部新疆地誌

滿鐵調査部

14.5-56

露文翻譯　ソ聯極東及外蒙調査資料發刊の辭

ソ聯極東地方及外蒙の地は日滿兩國の隣接地として、之れが眞相を究明するの必要なのは言を俟たない。嘗て當會の前身たる調査課が十餘年の日子を費し、露西亞諸官廳の各方面に對する調査研究の結果たる權威ある文献を網羅し、之を翻譯して露亞經濟調査叢書全九十卷、約三萬頁の浩瀚なる資料を江湖に發表した所以も玆にある。

同叢書は其後益々我國の關心を要するに至つたソ聯極東、西比利亞、滿蒙に關して精密な知識を與ふる唯一の資料として、現に尙ほ我國各方面に多大の便宜を提供しつゝあるは周知の事實である。而も世界各地の狀勢は日に月に變化して底止する所を知らず、前著露亞經濟調査叢書の提供する知識が如何に詳細且豐富なるものにせよ、發刊以來十餘年其自然地理的部分を除き現狀と多大の懸隔を見るに至つたこと亦た已むを得ないところである。抑々露亞經濟調査叢書の原本となつた資料は主として露西亞革命前、卽ち帝政露西亞時代に刊行せられたものであつたから、其純然たる自然地理的部分に於てこそ今日に於ても變化する所はないが、其文化的方面、政治經濟に關する分野に於ては根本的な改革變遷を見、最早舊日の俤を留めない狀態に在る。又自然資源の方面に於てすら近年ソ聯政府の積極的な探査事業の成果として幾多の新發見があり、從來未調査の爲めに無きものと推定せられたものにして今日全然認識を改むるを要するに至つたもの一にして足らぬ。

何れの意味に於てもソ聯極東、西比利亞、蒙古は新たに見直さねばならぬことゝなつた。此必要に應ずるため當會は曩に『ソ聯極東及び西比利亞總攬』發刊の計畫を立て自然、社會各方面に亙る資料を周到に網羅し且檢討を加へて之が整備に努めつゝあるのであるが、時局は益々此地方の實情を一日も速かに一般に知らしめることを要求し

發行所寄贈本

てやまぬので飽迄巧遲主義に膠着するを容されない。乃ち時勢の要求に順應し、ソ聯極東、蒙古、新疆各方面に亙る最新の資料の略揃つたことを機會とし之を翻譯し單純な素材の儘急速之を刊行することゝした。本資料が江湖の急需に應じ國家國民の進運に貢献せむことを庶幾ふ。

昭和九年八月

滿鐵經濟調査會委員長 河本大作

145
563

例言

一、本編は

Сборник Топографических и Статистических Материалов По Азии

Выпуск xxyIII

"Джунгария Военно-Статистический Очерк Генерального штаба

Полковника Л. Ф. Костенко. С 6-ю Приложениями и Картою.

Издание Военно-Учебного Комитета Главного штаба.

С. петербург. 1887 Г.

の全六章中今日全くその價値を消失した第五章「ジュンガリアに於ける軍隊」の一章と附錄及附圖を除く全譯である。

一、本書は一七五八年清朝に亡された舊ジュンガリア國領土から舊露國時代既にその領土に歸した東部を除いた部分、すなはち天山と蒙古阿爾泰に圍まれた地域、換言すれば、現代の北部新疆に關する自然及人文地誌である。

一、一八八七年舊露西亞帝國參謀本部の編纂にかゝる、この資料の主要用途は、もとより、説明を要しないところであり且つ時代的にみるとき人文方面特に「都市」に關する記述の如き全く史料に入れるものであり、自然方面に關するものも幾多の訂正を要する箇所があるものと推察される。

とはいへ、「新疆」が近き將來に於て新なる姿を以て世界史上に登場せむとする機運に在る今日、しかも、實のある新疆資料に乏しい今日、この資料の價値はその當初の編纂目的及時代を越えるものがあると信ずる。

一、本編は社外に飜譯を委囑し、佐藤秀德これを校閲した。

昭和十三年八月

滿鐵調査部

北方調査役

度量衡換算表

區分	ソ聯單位	日本尺貫法	「メートル」法
距離	一露里	○・二七一六里	一・○六六八粁
	一「サージェン」	七・○四○九尺	二・一三三六米
面積	一「ヘクタール」	一・○○八三町	一○、○○○平方米
	一「デシヤチン」	一・一○一六町	一○、九二五平方米
重量	一「ツェントネル」	二六・六○○貫	一○○瓩
	一布度	四・三六八一貫	一六・三八一瓩
	一「フント」	○・一○九二貫	○・四○九五瓩
容積	一「ウェドロ」	○・○六八二石	一二・二九九立
	一「ブッセル」	○・一九五三石	三五・二五二立
材積（木材）	一立方米	三・五九三七石 二・九九四八尺締	一立方米

北部新疆地誌

目次

第一篇　地理學的及地形學的事情

第一章　中央アジヤ總覽……一

アジア大陸を分ちて內部（中央、曠野）地方と外部（邊境）地方とす。內部アジア地方を分ちてゴビ（干海）地方とトルケスタン地方とす。兩地方の特徵。ゴビ地方の小區分。ヂユンガリヤ地方

第二章　ヂユンガリヤ地方細部境界……八

ヂユンガリヤ新舊境界。ヂユンガリヤ總面積。北部、中部、南部の各特質區畫。砂地ゴルブン・ツングウト砂漠。南北兩（帝國）郵便道路

第三章　ヂユンガリヤ山岳誌……一三

（一）蒙古アルタイ……一四

（二）タルバガタイ山脈と其支脈（モンラク、サウル、ハトイン・ウラ、ウルカシヤル等）……一九

（三）バルルイク連山と其支脈（マイリ山脈とヂヤイル山脈）……二五

（四）ヂユンガリヤ・アラタウ山脈……三〇

（五）ボロホロ山脈（タルキ、イレニ●ハビルガン）……三三
（六）ウズン●タウ……三四
（七）天山山脈……三七

第四章　地表の水路學的研究……四四

（甲）湖　沼……四四
一、ウリユングル……四四
二、バガ●ノル……四五
三、サイラム●ノル……四六
四、エビ●ノル……四六
五、アヤル●ノル（又はテリ●ノル）……四七
六、オルフ……四七
七、バルクリ……四八
八、トウルクリ……四八

（乙）河　川……四九
一、チヨルヌイ●イルトウイシ（カラ●イルチシ）……四九
チヨルヌイ●イルトウイシ河下流……五〇
チヨルヌイ●イルトウイシ河の支流……五二
二、ウルングウ……六一
三、エミリ……六五
四、コブク……六七
五、ナムイン●ゴル……六九
六、ボロドラ……六九
七、キイ●トウイン……七一
八、イリ……七一
（イ）クンゲス……七二
（ロ）テケス……七二
イリ河右側支流……七八
イリ河左側支流……八一

第五章　ヂユンガリヤの氣候……八二
上部イリ河々谷の氣候。テケス河々谷。ヂユンガリヤ曠野に於ける氣候

第二篇　住　民

第一章　ヂユンガリヤ住民の種族別……八七

チュンガリヤ史概要。前世紀に於ける支那人のチュンガリヤ征服。東干族の蜂起。タランチン國。離反省に於ける支那主權回復に對する露國の支援。一八八一年ペテルブルグ條約。上部イリ地方住民。タランチ族。ドンガン族。カルムイク族。シボ族。トルゴウト族。キルギス族。ボロホロ天山兩山脈以北の住民。タルバガタイ地方住民。キルギス(タルバガタイ地方の)の區合ト其居住地。トルゴウト族。カラ●カルムイク族、チヤハル族、オリシヤ●モンゴル等の蒙古種族。土著民。タルバガタイ地方人口總數。蒙古アルタイ南斜面の蒙古族。北路(帝國道)沿線の土著民。全チュンガリヤ住民總數。

第二章　主要都市 …… 一〇九

(イ)　伊犂地方 …… 一〇九

綏定 …… 一〇九

伊寧 …… 一一〇

チン●チヤ●ホ●チ市 …… 一一二

ルツツグン市 …… 一一二

(ロ)　タルバガタイ地方 …… 一一二

トルブルチン市 …… 一一二

塔城 …… 一一四

(ハ)　北方(帝國)郵便路上の都市 …… 一一七

タキヤンザ市 …… 一一七

ゲン●ホ市 …… 一一七

烏蘇 …… 一一八

綏來 …… 一一八

廸化 …… 一一九

奇台 …… 一一九

鎭西 …… 一二〇

(ニ)　科布多領に於ける都市 …… 一二三

ブルン●トホイ市 …… 一二三

第三篇　チュンガリヤの產業

第一章　植　物 …… 一二五

チュンガリヤ砂漠の特殊植物。「サクサウル」。「ドイリスン」(チイ)。山岳植物。農作物の種類。園藝。チュンガリヤの農村土地區分表。穀類播種及收穫量。支那人に對する伊寧地方の農業價値。北部チュンガリヤ地方の生產力

第二章　動物界 …… 一三二

チュンガリヤ動物は其種類少し。チュンガリヤ獨特の代表動物。野生馬(ケルタグ)。野生駱駝。野生驢馬。其他チュンガリヤに棲息する野獸類。チュンガリヤに於て飼養せらるゝ家畜。グリツデヤ地方の牧畜狀況。チュンガリヤに於ける牧畜發達の障害。羊の飼養。有角畜類。馬。駱駝

第三章　有用鑛物と鑛物鑛床……一四六

上部イリ地方及エビ●ノル湖畔の地質狀況研究。有用鑛物所在地と鑛物鑛床。石炭。黑鉛。沈澱鹽。石膏。天然硫黃。硇砂。硫酸鐵。鐵鑛。軟滿俺鑛。方鉛鑛及銅鑛。金鑛床

第四篇　交通

第一章　チュンガリヤ交通路の一般的特徵と輸送機關……一五三

郵便路と隊商路との區分。曠野の通路。曠野通路の通行簡易法。山間通路と其通行簡易法。輸送機關。各種輜重。タランチン族の荷馬車。支那人荷馬車。常備隊に對する輸送機關送達法

第二章　旅行徑路……一六〇

タキアンザ市より綏定に至る徑路……一六〇

綏定市より伊寧に至る徑路……一六二

綏定より國境露國郵便驛霍爾果斯に至る徑路……一六三

アチャル天然境に於ける元露國陣地より烏蘇に至る徑路……一六四

タキアンザ市より精河市に至る徑路……一六七

烏蘇より廸化に至る徑路……一六七

哈密よりビ●チマン及ツウルファンを經て廸化に至る徑路……一六九

廸化より奇台に至る徑路……一七二

鎭西より奇台に至る徑路……一七三

哈密より鎭西に至る徑路……一七四

アニ●シニ●ジエウ市より哈密に至る徑路……一七五

綏定よりタルキ峽谷を經て、サイラムノル湖西岸に沿ひ、チエバツイ、トスカウルの各峠を越えてレプシンスク市に至る徑路……一七九

綏定より、カプタガイ峽谷に通ずるタルキ峠を經て、元支那哨所チンダル跡に至る徑路……一八一

チンダル哨所跡より、エビノル湖北岸に沿ひ、塔城—烏蘇間道路上のヤッザ哨所に至る徑路……一八二

チンダル哨所跡よりバルルイク南麓に沿ひ、ヤッザ哨所に至る徑路……一八三

バルルイク山中の通路……一八四

伊寧よりクンゲス河上流のシャルコデ(キタイピケト)天然境に至る徑路……一八五

キタイピケトよりウングウト、ナラト兩峠を經て、カラシャラ市に至る徑路……一八六

伊寧よりウングウト、ナラト、ウラスタイの諸峠を經て、廸化に至る徑路……一八八

キタイピケトよりダグイト通路を經てカラシャル市に至る徑路……一八九

カシャ河谷の通路……一九一

レブシンスカヤ村よりヂャンアス峡谷を經て、支那哨所ヤマツイに至る徑路……一九二
伊寧よりチャブチャル峠を經て、ムザルト哨所に至る徑路……一九二
伊寧よりナラト、ハプチヤガイゴルの兩峠を經てクルリ市に至る徑路……一九三
アドンクウル(クンゲス河上流)峠より、小ユルドザ及ウラスタイ峠を經てトルファン市に至る徑路……一九六
國境の露國部落オホトニチイ(ナルインコル河畔の)よりムザルト峠を經て阿克斯に至る徑路……一九七
ムザルト峠の頂上より阿克斯に至る徑路……一九九
テケス河渡船場(ヤマツ渡河點)よりムザルト峡谷入口附近の陣地に至る徑路……二〇〇
烏蘇より塔城に至る徑路……二〇〇
ザイサン哨所よりブルン●トホイを經て奇台に至る徑路……二〇二
ザイサン哨所より、チョガン●オボ天然境マテニヤ廟祠を經て、ブルン●トホイ市に至る徑路……二〇三
ザイサン哨所より、ケンデルルイク部落及マイガブチヤガイ、ムクルタイなどの天然境を經て、
ブルン●トホイ市に至る徑路……二〇四
ブルン●トホイ市より奇台に至る徑路……二〇五
奇台よりハラマリ、ウランホシユ、フルスツ●ブラク、ハムタステを經てザイサンに至る徑路……二〇八
ザイサンよりバイムルヂン街道を經て、オロン●ブラクに至る徑路……二一〇
ザイサン哨所より、ブルガスタイ通路を經てオロン●ブラクに至る徑路……二一三
レブルガスタイ峡谷に於けるグゼウン天然境より、ドルブルヂン、塔城、ハフツイ堡壘、カブタガイ峡谷を經て、綏定、廸化間(ボグドハン)道路上の支那城街タキアンザに至る徑路……二一三
ブルン●トホイ市よりウルモガイツイ、テレクツイ各峠を經て科布多市に至る徑路……二一九
科布多よりアルタイ南側の前山に沿ひてブルン●トホイに至る徑路……二二三
ブルントホイ—奇台間道路の曲り角附近の、チユクルタイ天然境(ウルング河畔の)より、鎭西に至る徑路……二二四
科布多よりウラン●ダバ(西方)を經て奇台に至る徑路……二二六
科布多よりバアバガイ天然境を經て、奇台に至る徑路……二三〇
科布多より鎭西に至る徑路……二三四
科布多より鎭西に至る徑路……二四〇
グニ●タムガ天然境より、タムチン●ダバンを經て、ウリヤスタイに至る徑路……二四一
鎭西より、チョンヅイミン●ボグドとアツデ●ボグドとの間の鞍部を經て●科布多市に至る徑路……二四二
鎭西よりクク●ホト市に至る徑路……二四二

第五篇　軍事戰略的概況

第一章　チユンガリヤ及カシガリヤ方面の露國々境防備……二四五

我が露國オムスク軍管區領內侵入のため支那軍隊の越境能否。ベヂン・タウーウズン・タウ間に於ける最も侵入容易の地區。國境に於ける我が露國の堡壘は、（イ）イリ河流谷、（ロ）テケス河流谷、（ハ）エミリ河流谷、（ニ）カシガリヤ方面、（ホ）チヨルヌイ・イルトウイシ河方面にある

第二章　支那西部各省に對する攻擊作戰計畫……二五六
支那と開戰の場合の作戰地區、カウフマン將軍作製の攻擊作戰計畫、主力と枝隊。行動目標。對支戰に對してオムスク軍管區より派遣し得べき部隊數。新編成部隊の作戰地區到著

結　論……二六三
支那西部各省に於ける悲觀狀勢。民族相互の反目。支那官憲の罪過。支那主權忌避。生產及工業の衰頽。住民の支那人逃避傾向。露西亞の勢力と意義

北部新疆地誌

第一篇　地理學的及地形學的事情

第一章　中央アジア總覽

アジヤ大陸を分ちて內部（中央、曠野）地方と外部（邊境）地方とす。內部アジヤ地方を分ちてゴビ（干海）地方とトルケスタン地方とす。兩地方の特徵。ゴビ地方の小區分。ヂュンガリヤ地方。

一八八四年支那政府はカシガリヤ（東部トルケスタン）の大部分とヂュンガリヤとを以て新疆（ガニ・スシン・テヤニ）と稱する一省を新設し、之が統治は、他の全國各省一般統治制度に則り、元カシガリヤ省長として東干族暴動の鎭定とカシガリヤ占領とに功績を上げたリユツントン氏に委せられた。新省政治の中心は廸化に置かれた。本省に所屬する地方は邊境伊犂地方（ボロホロ、ムスタグ兩山脈の中間地區、イリ河上流々域及ボロトラ河流域を占む）、タルバガタイ地方（エビ・ノル、オルフ、ウリユングウルの三湖、チヨルヌイ・イルトウイシ河、セミレチエンスカヤ國境を以て境界とする地域）である。此のイリ、タルバガタイ兩地方統治者（前者にあつてはツヤニ・ツユニ、後者にありてはヘベイ・アンバニと云ふ稱號を夫々有してゐる）は新疆省總督に隷屬すると雖問題によりては北京中央政府と直接交渉を行ふ權限を賦與されてゐる。（註）

註　新疆省統治組織に關する詳細は第五篇に述べる。

支那の新設省に屬する領土と我が露國との國境線は一八八一年のペテルブルグ條約によりて確定され、其結果一八八二、一八八三兩年に亘りて邊境法制定と共に境界を區畫したのである。

西部支那新設省の總域は、大中央アジャ又はゴビ砂漠（別名干海）の一部で、此地域は往昔より支那地理學者により二部に分たれ、其分界線はテャン・シャン（天山の意）山脈である。此山脈の南側にはオアジスの連續がある此オアジスの全域が所謂東部トルケスタン又は支那トルケスタンと呼はれるものである。山脈北側にも幾多のオアジスが連續して、チユンガリヤ地方を形成してゐる。一七七八年本地方を踏査した支那地理學者の所説によれば、天山南側の全土にはホイ族（回教徒）移住し、此地方をナン・ル（南路）と稱へてゐる。併天山々脈の北側に展開して、古きチユン・ホ・エル國を形成する地域はペ・ル（北路）と稱へられる。（註）

註　リツテル氏著、一八六九年ペテルブルグ出版、地理「東部又は支那トルケスタン」二八〇頁。

支那地理學者に續いて歐洲地理學者も亦アジャ大陸踏査に乘出して、遂に支那トルケスタンとチユンガリヤとを區別するに至つた。天山々脈の南北兩側の地域に對して支那人の命名したナン・ル（南路）、ペ・ル（北路）と云ふ名稱は誠に申分のない適切なものと謂はねばならない。往昔アジャより歐洲への民族移動は實に此二通路によりて行はれたのは勿論、征服軍隊も亦之によりて移動したことは明かである。南方通路はパミル高原に通じてゐるので、其れより以西への民族移動は、所謂チユンガリヤ門に通じてゐる北路よりも遙かに困難である。北方通路によりて移住民團はイリ谿谷か、イルトウイシ溪谷へ出るのが普通であつた。

チユンガリヤ及東部トルケスタンの國土は既に述べた通り、アジャ大砂漠を占めて西より東に擴がり、パミルよりヒンガンに到る延長徑度五〇度、實に四〇〇〇露里に及んでゐる。此尨大地域は往時はアジャ内海の底部であつたものであるが、現在では高山を以て截然區畫されてゐる大高原である。之が北方の境界をなすものはアルタイ、抗愛、肯定の諸山脈と、ヤブロノイ山脈の南支脈とで、東部は大興安嶺の南部、南東部は不規則に並行し且つ高原を形成してゐる山脈が、北京の北方山地の西及南西に遠く延び、南部は南山、アルトイン・ターグ、トグウズ・ダバン、西クエン・ルン等の高峰が連續し、西部はパミル高原の高峰、西部天山、チユンガリヤ・アラタウ、タルバガタイ、之とアルタイとを繋ぐ連山が聳えてゐる。本地方平均標高は三、五〇〇乃至五、〇〇〇呎で、チユンガリヤ及タリム流域に接近するに從つて全體に低下してゐる。ゴビ全體の特徵は水流を缺くことで、當地最大と云はるゝのが、カシガリヤを西より東に流れるタリム河である。砂漠中には水源頗る稀である上に、其水は屢々鹽分を含み、苦味を帶びるか然らざれば臭氣があつて飲料に適しない。遊牧民が畜類用水を得んとして井戸を掘ることがあるが、其水は必ずしも淡水ではない、只何時も深さの少いのが取柄である。（註）

註　ブルジエワリスキイ氏の「第三回中央アジャ旅行」一八八三年ペテルブルグ出版四二三―五頁。

前記砂漠の地表は之を左の四種に分つことが出來る。（一）黄土曠野、（二）砂漠、（三）硅石曠野、（四）大石塊の散在する地帶。黄土は何ものも混入してゐない純粹のものも、時には砂や砂利の混じてゐるものもある。黄土曠野はゴビ砂漠の南、中央、西部に多く存してゐる、砂漠の砂は大古の内海の淺瀨及砂洲の遺物であると見られてゐるが、多くはタリム流域よりアラシヤンを經てオルドスに至る南部ゴビ地方並に、チユンガリヤにも分布し、小區域の砂地は其他の地方にも點々散在してゐる。硅石曠野は當地方の岩石崩壞及風化の結果生じたもので、地盤は石英、玉髓、瑪瑙、碧玉等の碎片から成り、ゴビ砂漠中央、チユンガリヤにまで及んでゐる最も甚しい不毛地帶をなしてゐる。大石塊の集積する地區は餘り多くはなく、何れも山に接近して存在し、岩塊は何れも流水に押流されて附近の山腹や山麓に運び出された大石岩塊が崩壞して生じたものである。以上各部には雜草に掩はれてゐる所も少なくない。

ゴビの氣候は著しく大陸的で、一日の中にも季節により氣溫に激しい相異のあることが特徵である。夏は暑氣酷烈で、砂漠南方の土地は空氣の乾燥により夏季六〇度に昇るのに反して、冬季は二六・五度に低下する。

ゴビの南方部及中央部に於ては空氣が異常に乾燥するに反して、北方部及東方部に於ては相當量の雨雪が北方遠く北氷洋から運ばれる、これが卽ち北方部に草原帶の出現する原因であり、又各山嶺北斜面に植物が豐かに繁殖する所以なのである

ゴビ東部及東南部へは東南の季節風「ムッソン」によりて支那海より夏雨が送られる。其他の地方に於ては雨雪共に殆ど稀である。ゴビ氣候の中特に著名なのは冬季と春季とに多い强烈な暴風である。タリム河流域は例外として暴風の方向が殆ど必ず北西である。此暴風により大氣は常に細かい砂塵に滿され、砂塵はやがて西方盆地に落下堆積して幾世紀の後には黄土層が形成するのである。

ゴビは降水量少く空氣が乾燥し、土壤も自ら獨特の性質を帶びる所から、恐ろしく植物の貧弱な地方で、樹木は殆ど絶無と云つて差支なく、見當るものは僅かに灌木のみである。併しこれとて黄味を帶び褐赤色を呈してゐる土地を掩蔽する程では決してない。寧ろ砂漠の大部分は不毛の土地で、何十粁にも亘りて全然丸裸であることさへある。灌木、半灌木、雜草など何れも各所に分散してゐる狀態である。植物に惠まれてゐないゴビは自然の結果として動物も甚だ貧弱で、僅かに山間地方及山麓の水の灌漑ある地方、竝に河流沿岸や湖畔等に限り多少棲息する。眞のゴビ砂漠地帶には蜥蜴、蜘蛛類のみは相當多い只ゴビ砂漠には鳥類も獸類も其食餌の關係から、常に水草を求めて移動生活を營みつゝあることは興味深い現象である。

全ゴビ砂漠中に於てブルヂエワリスキイ氏は野生哺乳類六十八種、家畜十一種を發見してゐる。後者は特にゴビ砂漠の特產と見るべきもので、砂漠にはこれ等に取つて有利な事情が備はつてゐる、卽ち地中鹽が豐富で、夏期畜類が惱む蚊が居らず、冬期降雪を見ないために畜類の播殖は頗る良好である。夏期大旱魃、冬期大嚴寒の結果發生する一種の風土病があるが罹災後損失補顚が早いので畜類數量には殆ど影響はない。ゴビ家畜類の主なるものは羊(太い尾の)、有角獸、駱駝、馬等でアラシャン山脈ウルガ地方には犛(ヤク)と稱する特殊牛が棲息してゐる。(註)

註　ブルジエワリスキイ氏、第三旅行、四二六―四三一頁。

以上記述した地方は自然界共ものが遊牧生活向きに出來てゐる。從つて定住民は僅かに東部トルケスタン、チュンガリヤ、東南兩蒙古、水利の便ある山麓地帶などに分散してゐるに過ぎない。領域の大部分は、畜類食餌の關係上畜類と共に甲地方より乙地方へ點々移動する遊牧民以外には生活し得ない土地なのである。

本地方の總面積は三、六二〇、九四〇平方露里卽ち七四、一〇一平方哩。

註　ゴビ地方面積(チュンガリヤ及カシガリヤを含む)はア・ル・スカシイ氏の調査による。

である。之に對して住民の數は四〇〇萬を越えてゐない。從つて一平方哩平均住民は五五人となる。故に此地方を世界中の最も人口の稀薄な地方とすることに決して不思議はない。

以上述べたブルジエワリスキイ氏のゴビと稱する地方を、リフトホヘン氏は其著「支那」中に支那音を以て「ハン・ハイ」(于海の意)とも云ひ、又別に中央アジャとも稱してゐる。リフトホヘン氏と同樣であり、地況評價も我がブルジエワリスキイ氏と同一である。リフトホヘン氏の本地方概論も我がブルジエワリスキイ氏と同一である。リフトホヘン氏はハン・ハイ別名中央アジャ(太洋への捌け口を持たない沼湖、河川地方)を、大洋に流出する大河の貫流してゐるアジャ邊境地方と比較對照してゐる。(註)

註　リフトホヘン著、「支那」伯林一八七七年第一卷、二四―四三頁。

斯の如くリフトホヘン氏はアジャ大陸を斷然二部に分けて、地質學的資料を根據としてハン・ハイ地方とアラロ・カスピイスキイ地方―別名トルケスタンスキイ―とを區別し、トルケスタン地方もハン・ハイ地方と同一の自然界の特質を有してゐるに拘らず斷然これを同一視しない。リフトホヘン氏の所說によればトルケスタン低地が中央アジャに編入されない理由は、トルケスタン低地の水の涸渇したのが極めて最近(最近とは勿論地質學的意味に於いて)のことで、勿論ハン・ハイ地方が全く乾燥して獨立地方をなして後であると云ふ點にある。(註)

註　イビド氏一一頁、三章八五頁

ムシケートフ教授も本問題の研究に當つてゐるが、其のアラロ・カスピイスキイ(トルケスタン)地方研究の結果到達した結論は次の通りである、ハン・ハイ(ゴビ)とトルケスタンとは其生成全く同一である。第三紀時代兩地方は同じ時期海に被は

れてゐた。此海の消失と兩地方の分離とは同時に起つたものである。兩地方の自然界には或る種の類似が認められるが、これは兩地方發生の時期が同一であると云ふよりは、寧ろ山勢學的條件と地理的狀態との差異に關係するものである。（註）

註　ムシケトフ氏一八八六年サンクト・ペテルブルグ出版、「トルケスタン」第一卷九―一〇頁。

ムシケートフ氏のトルケスタン地方と云ふのはアジヤ大陸の廣大地區を指すもので、西はムゴヂヤルスキエ連山及ウスチユルタ、東はヂユンガリヤ、アラタウ、天山、パミル。南はキユレンタグ別名コペト・タグ、ホロサンスキエ連山、北はタルバガタイ、ヂンギスタウ、アラロ・イルツイシ分水嶺を夫々連ねた線を以て區畫される地域で、出入の多い不正多角形を呈し南西より北東に伸び、コペト・タグよりアラ・クリ湖及バルルイク山に至る最大延長は約二三〇地理哩を有し、ブアム狹谷よりアイリユク山（ムゴヂアルスキエ連山中）に至る幅は一四〇地理哩に及び、總面積三二、〇〇〇平方哩に及び、絶對高度の最低はアラル海水面に於て一六二呎である。故にトルケスタン地方は、ハン・ハイ（ゴビ）地方に比して、遙かに矮小且低下してゐる。（註）

註　イビト一三頁。

何れにしても自然界の特徴と云ひ又地質學的狀態と云ひ兩地方全く酷似してゐる。

トルケスタン地方はゴビ地方と同樣、其土地は鹽澤、黃土、飛砂卽ち風成作用の產物より成り、水の流出狀態から云へば全く孤立で周圍との連絡はない。多くもない河川は何れも湖水に流込むか、然らざれば砂中に消失し、地表には無數の涸渇した河流や沼湖の跡が認められる。起伏變化は少く平坦で、盆地には森林が繁茂し、降水量は極めて少量に過ぎないが、それも北東風により忽ち乾燥する。植物は單調且貧弱である。野生の獸類も僅かに山間、山麓の狹谷、河流や沼湖に沿ふ萃の間に棲息するに過ぎない。住民は各所に散在してゐて、水の灌漑ある少數の沃地か、然らざれは砂漠中井水のある所を求めて遊牧してゐる。

トルケスタンと干海（ゴビ）との連絡は今尙ほ明瞭に次の二地點に見出される。卽ち北方にはアラクウリ、エビノル兩湖間の所謂ヂユンガリヤ街道、南方にはタリム、スウルフアハ兩河上流間にあるトルケスタン街道である。此アジヤ大通用門たる兩街道の出現はムシケトフ氏の言によれば、最近、第三紀時代には未だ海に覆はれ、干海及トルケスタンの內海と合して大海原を形成してゐたものである。各區分の生じたのは廣範圍の力學的作用の結果で、此作用は舊第三紀海水を兩地方に分離せしめたばかりか、更に內アジヤ各高峰山脈をも隆起せしめたものである（イビド一五頁）。力學的作用は地球內部の漸進的冷却の結果、地殼收縮によつて起るものである。（註）

註　イビド一六頁。

兩地方區分の際、元の底地の稍々高い部分は低く深い部分よりも先きに表面に現はれたもので、此低く深い部分から、大さや形の夫々異つた無數の沼湖が出現し、此沼湖は更に同樣の干水作用の結果、漸次其數と大さとを減じつゝあるのであるが此干水作用は今尙ほ終息してはゐない。現在兩地方に次の如き湖跡の存在することが其證左である。卽ち、ゴビ地方にありてはロブ・ノル、ウリユングウル・エビ・ノル等で、トルケスタン地方に於てはアラリ、バルカシ、アラクリ等がそれである。只ゴビ地方に於ける沼湖干水作用はトルケスタン地方に於けるよりも過去現在共に迅速である。この事實は兩地方湖面を比較すれば直ちに看取される。トルケスタン地方の湖水はゴビ地方のものよりも遙かに大きいが、此相異はムシケトフ氏の說によればゴビ地方が古さに於て勝つてゐる（リフトホヘン氏の說くが如く）爲では決してなく、降水量が極端に少く空氣が乾燥してゐる結果であると見なければならない。ゴビは全體に其位置が比較的南方なので高等溫線上にある部分が多い。他の一面干水の迅速に對しては降水量も關係がある。降水量は緯度の外、周圍の山岳狀態にも支配される。ゴビの北部及南部を圍繞してゐる山脈が、風に運ばれて來る降水量を殆ど全部抑留するので、之れは遂に盆地中央部までは到らない、ために盆地中央部は彌々濕度に惠まれないことになる。これに反してトルケスタン地方は南部及南東部のみが高峰に繞まれてゐる

る關係上、これ等高峰の西及北西斜面がツウランに面し、北西風によりて運ばれる降水量を十分に吸收する、此降水量は前記山脈北斜面を永遠の氷雪を以て掩ひ、やがて各河流の本源となり、更にトルケスタン低地の沼湖に流入して、一面には蒸發し盡さんとする水量を補ふと共に、他面沼湖の涸渇を防いでゐるのである。（註）

註　イビド、一一九、一二〇頁。

以上記述した所を綜合すると次の如き結論に到達する。尨大なアジヤ大陸は自然界の組織其ものが既に截然次の二地方に區分されてゐる。即ち一は外海に通じた河流のない砂漠地帶―内部地方で、他の一は大海に注ぐ大河流によりて十分に灌漑される周邊地帶―外部地方である。內部地方即ち中央アジヤは更に、（一）ゴビ地方（干海）、（二）トルケスタン地方（ツランスキイ）の二地方に再分され、ゴビ地方は更に（イ）東方部―シヤモ、（ロ）西方部―支那トルケスタン（タリム河流域）及ヂユンガリヤとに區畫される。支那トルケスタンとヂユンガリヤとは恰もゴビ大砂漠の二灣とも見られるもので、吾人が研究の對象はゴビ大砂漠の一小部分ヂユンガリヤ地方である。吾人の稱してヂユンガリヤ地方と云ふものゝ中には、幹線山脈たる天山山脈（ムスタグ）とボルホロ山脈（タルキ、イレニ、ハビルガン）との間に介在するクリヂンスキイ地方（イリ上流地方）も含まれてゐる。この地方は實はバルカシヤ地方（從つてトルケスタン地方）に屬するものであるが、甞てはヂユンガリヤ國の中心をなした時代もあり、其住民は現在に於てもヂユンガリヤ人と關聯することが多いので、本地方は政治的にヂユンガリヤに加へて扱ふことが寧ろ當然である。

第二章　ヂユンガリヤ地方細部境界

ヂユンガリヤ新舊境界―ヂユンガリヤ總面積―北部、中部、南部の各特質區畫―砂地グルブニ●ツングウト砂漠―南北兩（帝國）郵便道路。

支那地理學者がヂユンガリヤと稱してゐるのは、天山山脈の北方に展開してゐる昔時のヂユンガリヤ國領土のことで、十八世紀前半に於けるヂユンガリヤ領の境堺は次の通りである。バルガシ湖、アヤグズ河々口より北方イルトウイシ河に至り、これを遡りて其水源に達する線、其より南に向ひ天山々脈東端に出で、同山脈に沿ひてアラヤ水源に至り、更にフエルガン山脈に沿ひ、同山脈北西端よりタラス河上流、現在のアウリエ●アト市所在地點方向に伸び、夫よりチウ河中流を橫斷、これを遡りて其上流に出で、バルカシ湖南端に達するのである。（註）

註　本境界線は、ヂユンガリヤ人の間に十七年間（一七一六―一七三三年）俘虜生活を續けた一瑞典將校レナト氏の作製した地圖に示されてゐる。レナト氏はポルタワ附近にて捕へられ西伯利に追はれた將校の一人である。同氏は最初ブフゴリツのヤムイシエフ湖遠征隊に加り一七一六年一小枝隊（七百名）中にありて勤務中捕へられたものである、其後レナト氏は歸國し、彼の作製した地圖は其後久しく文庫に秘藏されてゐた。一八七九年此地圖はリンキエピングの王室圖書館に現はれ、後我が露國帝室地學協會の手に移り、同協會依囑の下にア●イ●マクシエフ氏が專心右地圖の研究に當り、遂に其詳解を作製して之に添へた。「一八一六年―一七三三年までカルムイク人の間に生活した一瑞典將校レナト氏の作製に係るヂユンガリヤ地圖」。原文は露西亞文にもある。

ヂユンガリヤは支那と戰ふこと數次、其結果遂に潰滅するに至つたものである。一七五八年百萬にも達する國民を失ふ大虐殺を受けて後遂に支那帝國領域に編入された。十九世紀の初め、我が露西亞人のアジヤ大陸奧地移動を開始してより以後は舊ジユンガリヤ領土の一部は漸次我が露西亞に歸屬するに至つた。現時ヂユンガリヤと稱するものは舊ヂユンガリヤ國の一部にして、我がセミパラチンスク、セミレチエンスク兩洲境界點以東の支那領域、即ちアク●カバ河（アルタイより發する）水源よりナルイン●コル河（ムス●タグより發してビヤン●コルやテケサ支流に注ぐ）に至る地域である、此境界線は一八八一年支那との間に成立したペテルブルグ條約に基き、一八八二、一八八三の兩年に亙り兩國政府代表により境界を確定し、各要所に夫々國境標識を建設して之を定めたものである。セミパラチンスク洲側から見た國境は大體蒙古アルタイより

アク・カバ河に沿ひ、同河のカラ・カバに合する地點に至り、同地よりは直線的にベレゼクトイン・ブイル、アイルイクバサ河水源に出で、同河に沿ひ其ベレゼク河に合する地點に達し、西折してキズイル・アシチ・ケゼニの高峰を越え、アルカ・ベク河と其左岸支流アク・タスとの合流點に向ひ、其よりはアルカベク河に沿ひ同河のチヨルヌイ・イルトウイシ河に注ぐ地點に進み、更に同河を遡ること五露里チヨルノ・イルトウイシ標識のある地點に出でる。これより國境は殆ど直線的に南方に向ひ、天然の境界マイ・カプチエガイのウリクン・ウラスツイ河により之を遡りて、其水源ムス・タウの雪峰に出て、再び西方に向ひサウル山脈に合し、これより同山脈に沿ひて西走、次いでタルバガタイ山脈によりてセミレチエンスク洲國境發起點ハバル・アス峠に達し、同峠よりは塔城條約（一八六四年）の協定に則つて南進してゐる。カラダバン峠（チュンガリヤ・アラタウ山中）に至るまでの間に二十一ケ所の標識がある。カラダバン峠よりはヂユンガリヤ・アラタウに沿ひて南西に走りてホルゴス河水源に出で、夫より同河に沿ひて同河のイリ河に注ぐ地點に達してゐる。次いで國境は砂漠を南方の小山テケリ・ゲニ（コリヂヤト部落の東方）に進み、更に南してカラ・タウ連山に出で、此山頂をカサン河に進み、サラタウ連山西端に達し、南西に折れてスムベ河水源に出で、同河を下りて其のテケス河に合する地點に至る。スムベ河口よりはテケス左岸を西に第六國境標識に至り、これより南に折れ、ナルイン・コル河流を其水源にまで達してゐる。カラダバンよりナルイン・コルに至る間に建てられてある標識は實に三三個である。（註）

註　セミパラチンスタ、セミレチエンスク兩洲の支那領土との國境詳細は露支兩國境界確定全權委員作製の「プロトコル」に據つたものである。

以上はヂユンガリヤ西部を劃する境界線であるが、或は山頂を走り或は多少とも名の知れた河川に沿ふてゐるので可なり明瞭である。併し北部境界、一層正確に云へば北東境界及南部境界は更に明瞭である。ヂユンガリヤの北東には高く聳えて通過不可能な蒙古アルタイ山脈が連綿として連なり、南方には更に高く更に嶮しい天山々脈がある。ヂユンガリヤの東部境界と認むべきものは天山々脈東極端（ツエガン・トプスイク、ウムイル・ウンドクの各山岳）と、これより眞北に延長した線の蒙古アルタイに交叉する點とを結ぶ線である。蒙古アルタイ山脈に添ふ地帶と天山々脈に沿ふ地帶との間には、ヂユンガリヤ干海と廣大なゴビ地方とを結ぶ海峽でもあるやうな幅約一二〇露里の出入口がある。ヂユンガリヤ西部國境アクカバ河水源よりナルイン・コル河水源までの全延長は一・二〇〇露里、アルタイに沿ふ北東國境（アクカバ上流より六五子午線まで）は七二五露里、而してナルイン・コル水源より天山々脈に沿ひ、其端に至るまでは西部國境と同樣一二〇〇露里に達してゐる。以上の境界線を以て圍む地域の總面積は四一〇、七六八平方露里、卽ち八、三八三方哩である。（註）

註　面積はア・エル・スカシ氏の計算による。

ヂユンガリヤ領土は其性質により之を次の三地區に區分する、卽ち山岳多く石地にして不毛地帶である北方地區、低い砂地にして沼湖の多い中部地區、山岳多きも豐沃な谿谷のある南部地區である。南部地區は支那のイリ地方でボロホロ山脈と天山主脈との間の地區を占め、中央アジヤに於ける最も肥沃な地方の一をなし、イリ河上流の兩岸に横はるオアジスである。イリ上流の溪谷は都邑連續し、土地は頗る肥沃である。故に此溪谷領有は支那政府に取り特に重要意義がある。卽ち地味肥沃にして人民定住すれば必ず五穀の豐富な收穫が豫想され、從つて支那軍隊への糧食供給が潤澤となるからである。而して支那政府が西部邊境各地を其權下に收むる所以のものは一にこの軍隊の御蔭である。勿論支那軍隊糧食の大部分は支那内地からの供給に待たねばならないのであるが、イリ上流河谷の物資により軍隊に對し一部分とは云へ兎に角現地調辨が出來得るのである。イリ管區の總面積は五二、三七八平方露里、卽一、〇八二平方哩である。（註）

註　陸軍少將ストレリビツキイ氏の計算による。

併し此中農業及定住に適するものは極めて小部分で、大部分は山岳及山間の峽谷に占められてゐる。低地は良草繁茂してゐて遊牧民の居住に適してゐる。

チユンガリヤ北部地區はチヨルヌイ●イルトウイシ河よりバルルイク山脈の南端及アヤル●ノル湖に至る間の高地で、タルバガタイ及バルルイク各山脈の分友脈に滿されてゐる。此兩山脈支脈はエミリ河谷によりて兩分され、エミリ河谷は恰も兩高原への門戸と云つた觀を呈してゐる。チユンガリヤ北部地區は水量少なく石地にして植物も少なく、從つて定住地に適しない。故に本地區内の定住地としては僅かに三ケ所を數ふるに過ぎない。天山及ボロホロ兩山脈北麓に沿ふてゐる中部地區は、北部地區に比して遙かに海拔上の位置が低く、地區內には多くの湖沼あり、何れも葦及鹽澤に圍まれた、干水時代の遺物で、アヤ●ノル、エビ●ノル、サイラムの三湖は最も著明なものである。北部地區の平均高さ（當地を縱橫に走つてゐる、雪を戴いてゐる高峰など引出すまでもなく）二、〇〇〇呎であるに反して、中部地區は遙かに低く七〇〇呎（エビ●ノル湖）まで下つてゐる。當地方には天山々脈に並行して、恰もエビ●ノルやアヤル●ノル湖などの延長のやうな觀を呈してゐる一大砂地（グル●ブニ●トングト砂地）もある。グル●ブニ●トングト砂地は支那語で「ハン●ジネリ●シン」と呼び、奇臺子午線の東約五〇露里に起り、廣大な地區を成し、西方アヤル●ノル湖に向つて延長し、此地帶の幅は五〇乃至七〇露里の間にあり、所によりては八〇露里に達してゐる。砂地又は各所に穴ありて何れも溜水がある、併し全部必ずしも飲料に適しない。砂地は殆ど無人地帶で、大體北西より南東に向つて矩形をなしてゐる。矩形內の起伏は峻嶮ではないが、砂地であるから車輛の通行は頗る困難である。（註）

註　ベフツオフ著、チユンガリヤ概要四四、四五頁。

砂地はザイサンより奇臺を通ずる隊商道路が交叉してゐる。砂地は奇臺を去る二露里の點に起り、隊商路上を北方に五〇露里以上延長してゐる。

註　ブルン●トホイよりグウチエンに達する道程參照。

チユンガリヤの中本地方の根本的特徵は、天山々脈及其支脈ボロ山脈北麓に連なつてゐる。峽隘な肥沃地帶である。此肥沃地帶は前記各山脈北斜面から發して、定住生活の發達を助成してゐる多くの河流に灌漑されてゐる。肥沃地帶は天山々脈南麓、所謂東部（支那）トルケスタン別名カシガリヤ領內に橫はれる地帶に酷似して居り、カシガリヤ地方と同樣、當地方も山麓に沿ひ農產品の多いオアジスがあり、其の間に砂地が挾まつてゐる。これ等オアジスは、相當大地區の政治的中心をなしてゐる都會の名を夫々冠してゐる。此オアジス間には車輛を通ずる道路があり、其沿道定住民なき地點には支那人の手により哨舍が設けてある。北路（ベ●ル）は鎭西より奇臺、廸化、綏來、烏蘇に通じ、更にタルキンスコエ峽谷を徑て、現在イリ地方統治の中心點たる綏定に達してゐる。南路は（ナン●ル）は哈密よりピチヤン、トルハン、カラハル、クチヤ、バイ、アクス及カシガルの各地に通じてゐる。此南北兩路は哈密に於て相合し、これよりアニシ、スチエフ、リヤンチエウに出で、更に西部支那及北京にまで達してゐる。此外哈密以西に於ても此兩路は廸化ートルハン間に道路が通じてゐる。天山々脈の南北兩山麓に沿つてゐる交通路の價值は支那人も夙に之を認め、西曆最初の二世紀に亘つて君臨したハンの時代より之を重視してゐた。十九世紀の後半チユンガリヤ、カシガリヤ共に再度支那主權下に歷屬するに至るや、此兩路も再興されて皇帝路と稱へらるゝに至つた。平坦地區は土壤が硬質である所から、本道路は極めて良好の狀態に置き得るのである。

以上チユンガリヤ領土につき概要を終へたから、以下其の地表につき、現有資料に基き出來だけ詳述することにする。

第三章　チユンガリヤ山岳誌

チユンガリヤ領域は既に述べた通り南及北東より山脈によつて鎖され、西方正確に言へば北西方も高嶺の山脈に境されてゐる、併し此山脈は連續一線をなしてはゐない。卽ち無數の河流が山岳への出入口をでも附けるかのやうに幾多の支流によつて山脈を細かく截ち割つてゐる。併し此支流あるがために、涸渴したジユンガリヤ河流も或はバルカシ河、或はオビ河と

結ばれるのである。

第一流―ウルング・イルトウイシはタルバガタイ山脈をアルタイより、又は第二流―エミリ河はタルバガタイ山脈をバルルイク山脈より分ち、第三流はエビ・ノル湖とアラ・クリ湖を繫ぐカブタガイ峽谷を形成して、バルルイク山脈とヂユンガリヤのアラタウとを兩分してゐる。第四流はイリ河を成し其河谷によりボロホロ山脈とウヅン・タウとが分離され、第五流テケサ河は天山々脈よりウヅン・タウ山脈を分離してゐる。以上の山脈區分に從ひ、左記順序を以て順次之を詳述して見よう。(一)蒙古アルタイ、(二)タルバガタイ連山、(三)バルルイクと其支脈、(四)ヂユンガリヤ・アラ・タウ、(五)ボロホロ、(六)ウヅン・タウ、(七)カルルク・タグ山脈とハン・テングリ山脈との中間地區に於いてヂユンガリヤとカシガリヤとを區分する天山々脈。

(一) 蒙古アルタイ

本山脈は總體にアルタイと云ふ名稱を冠してゐるが、トムスク縣の南東部全體とセミパラチンスク洲國境の一部とに亘て、無數の小山脈から成つてゐる山脈と區別して南及びボリシヨイ・アルタイとも稱されてゐる。本山脈は國境に横はれるキイチン連山(ブフタルマの上流)に起りて南東に延び、一面に於てはヂユンガリヤ砂漠の、他の一面に於ては科布多盆地の夫々境界となつてゐる。本山脈は一流とは云ひ難いけれども、相當高嶺を有し、雪線を越ゆるものが各所にある。蒙古アルタイは未だ歐洲人の間に餘り深く知れてゐないので、これに關する報道は僅かに斷片的のものしかない。歐州人旅行者にして本山脈を初めて踏破したのは、一八七六年及七年ウルモガイツイ、オレン・ダバン、ヌウル・ケレの三峠を越えたボターニン氏である。(註)

註　ボターニン氏には地形測量部員陸軍中尉ラフアイロフ氏が同行して、其通過地の美事な地圖を作製した。

次いで一八七七年露國商人がこれを越えてゐる。ウランダバン峠(ブウルグニヤ上流)を越へたのはワセネフと云ひ、ダビスチン・ダバ峠を越えたのはクズネツオフと云ひ、ボルチジム・コル(ボルチヨン)をえたのはコテリニコフと云ふ人であつた。(註)

註　ワセネフ、クズネツオフ兩氏は科布多より奇臺に、コテリニコフ氏は科布多より鎭西に出てゐる。これ等各人の殘した旅程はボターニン氏の書中に集蒐されてゐる《卷末旅程の章參照》。ボターニン氏の報道、ラフアイロフ氏の作製した地圖及前記商人の報道等を基礎とすれば、蒙古アルタイの地形に關して大體次の如く斷定することが出來る。

本山脈はキイチン山脈より分れた一支脈で、主脈からも又數多の臺地を直角に出してゐる。此附近に於いては本山脈は非常に高く、キイチン山よりムス・タウ(氷山)に至るまで雪を戴いてゐる。此間に於ける通路は嶮岨なスムダイルイク峠一つである。山脈通過の比較的容易なのは高さ九・七〇〇呎のウルモガイツイ峠を越えて後である。此峠はブルン・トハイより科布多への途中にあり、夏期以外の通過は不可能である。十月一日以後は全く雪に閉されて本峠一切の通行は杜絶する。此東にあるカウル・アルチヤン峠は餘り便利ではない。これより山脈は稍々底下して、ブルクニ河上流にはウランダバンと稱する峠があるが、四季通じて通行可能である。科布多―ブルン・トホイ間の交通は本峠を通じて不斷行はれてゐる。只冬期の通路はブルグニ河上流より直ちに西折してブルグニ河下流に出でない。ウラン・ダバン峠越しは科布多より奇臺に至る最短通路である。ウラン・ダバン峠はワセネフ氏の報告によれば、頗る嶮しく且つ大石塊に埋められ、爲に駱駝の通行を少からず困難ならしめるとのことである。ウラン・タバン峠の稍東に小ウラン・タバン及ダブイスチン・タバンの二峠が相接近して存在する。後者に關してクヅネツオフ氏は其旅程(後に述べる)中に何等困難を感じなかつた旨記してゐる。兩峠共に科布多よりブルン・トホイ及奇臺に至る途上にある。之に次いではボルチヨン、ナム・ダバン、オレン・ダバン(ボタニン氏のウラン・ダバン)、オグルザ・ダバンなとの諸峠が科布多より鎭西に到る間にある。

ボルジヨン―又は商人カテリニコフ氏の呼び方によれば、ボルジム・コル―は決して嶮岨な峠ではないが、オレン・タバ

ン(ウラン・ダバン)はボタニン氏の證言によれば科布多方面からの上り路は相當嶮しくはあるが荷車が上れる。オグルザ・ダバン峠は冬期積雪少なく一層容易である。これより西方、ウリヤスタイよりバルクリに至る途上のタムチン・ダバン峠も多分左程の困難はない。

タムチン・ダバン以東に於てアルタイは數個の支脈に分たれる。從つてボタニン氏は、哈密ーウリヤスタイ間に次の三峠を越えてゐる。アチボグドー南方分脈、ブルハン・オラー中央脈、實は本脈の繼續、タイシイル・オラー北方分脈。

南方脈（アチ・ボグド）とアルタイ本脈とを結ぶものはコブチ、バガ・ブグの兩山脈で、後者(バガ・ブグ山脈)はタムチン・タバン、マニト・タバン兩峠間に於いてアルタイ主脈に合する。バガ・ブグ山脈を横斷してブグ・ダバンと云ふ峠がある、これによりてグニ・タムガ(科布多ー鎭西間途上にあり)よりタイシ・イル・オル山脈北側の部落ザサカツ・ハナに達することが出來る。只途中マニト・ダバン街道により中央脈(主脈)を越えることになる。此マグニト峠は高さ著しからず而かも平坦である所から「コテリ」と稱へられてゐる、それは非常に通過の容易な峠と云ふ意である。マニト・タバン峠を過ぎるとシャリン・ゴルの方向に流れるトグリユク河に出るのであるが、此(シャリン・ゴル)河谷が即ち本脈と其北方支脈との境界に當るのである。此水源は東方に在つてハロン及ツアンギルと呼ばれてゐる。兩水源とも初め西に流れ、次いで地中深く姿を沒し、後廣大な砂漠の盆地に至つて再び出現、此に兩者合して一河流となつてゐる。

タムチン・ダバンとブグ・ダバンとの間に於てアルタイ主脈北斜面よりチヂルリク河が發してゐる。本河流は溪谷を出でシャリン・ゴラ盆地に入りて後はツアガン・ブルグスンと稱へられてゐる。中央(主)山脈は最初マニトと稱へられ、次いでハラ・アツズイルが、其後更にブルヒン・オラと呼ばれてゐる。本中央山脈と南方山脈(バガ・ブグ、アツヂ・ボゴ)との間には多くの盆地があり、盆地の間には夫々臺地がある。最西端盆地にはアルイク・ノル湖及ガハンチ、ノハンチの兩河がある。兩河共に東に流れてはゐるが果して湖水に達してゐるか否かは不明である。これより東にレク、ブウルの兩盆地がある。

蒙古アルタイ南斜面よりウリヤサ河(ブルグニ河左岸の支流)以東にナルイン・コル、アンギルツイと云ふ支流のあるボヅンチ、バルルイク、ウブチユ、クルト、ビツジ、ツアガン、ゴル、タキリドイ(コブチ山より發出)、ボグツイン・ゴル（チヨンズイムイン・ボグド山より發出)、ウルト・ゴル(チヨンズイムイン・ボグド山とアツジ・ボグド山との鞍部より出づる)の十河流がある。アツジ・ボグドよりも數流の小流が分れてゐる。アツジ・ボグド山脈は不毛の岩山で、永久雪線に達する程高くはない。アツジ・ボグドの南側は非常に峻嶮な斜面であるが、北側は岩石多き幾多の山背が緩傾斜に延びてゐる。（註）

註　ボターニン著、モンゴリヤ北西部概要、第一巻一九二頁。

ウリヤサ河の西方は既に述べた通り、相當の高さを有し、所によりては雪線を越えてゐる。アルタイ主脈南西斜面よりは多くの優勢な河流が發出して、チヨルヌイ、イルトウイシ河の支流をなしてゐる。（註）

註　チヨルヌイ・イルトウイシ河記事參照。

此邊の山の高さは之に源を發してゐる諸川の大さ及數量と相關連してゐる。

蒙古アルタイの主脈であるブルヒン・ボグドは既に述べた通り實は本脈の繼續で、其高さは南支脈と同樣永久雪線に達する程ではない。山脈中にケルチ・ヌル・ダバンと云ふ峠があり、哈密よりウリヤスタイに至る通路が之に通じてゐる。峠は相當高いに拘らず、僅かな臺地のやうな相貌を呈してゐる。其間にある盆地には湖水のあるもの、湖水の涸渇したもの樣々で、其周圍は傾斜の緩い、僅かに頂上に花崗石を覗かせてゐるなだらかな山で圍まれてゐる。峠の下り路はブルヒン・オル西斜面より發してチチリン・オル河谷に沿つてゐる。（註）

註　ボタニン著モンゴリヤ北西部概要第一巻二一〇頁。

蒙古アルタイの北脈をなすタイシル・オル山脈は中央及南脈と同樣北側よりも南側が遙かに嶮しく、其高さも永久雪線には達してゐない。南斜面は深く且つ岩石の多い溪谷に刻まれ、北面には高い高原が山脈に迫まつてゐて、之には深い谷はな

いが、淺い歪曲の少い低地があり其底部は可なり嶮しい。これ等の低地は何れも鞍部より山麓に向けて並行に延び、山脊と交互になつてゐる。低地には高山芝生が茂つてゐるが、所によりては針葉樹に蔽はれてゐる。山脊は瓦礫に包まれてゐて草木を見ない、稀には全く裸峯のも見當る。（註）

註　イビド著二一八頁。

哈密よりウリヤスタイに通ずる本支脈越への峠は坦々とし頗る緩かなものである。

註　同上　二一七頁。

峠の下り路にはタイシ・オルの北麓にザサカツ・ハンの營所があり、木造邸宅と木造僧院との二陣から成つてゐる。

註　同上　二一九―二二〇頁。

以上三アルタイ支脈は最初何れも南東に延び、次いで東に折れて遠く蒙古の奥深く進入してゐる。蒙古に入りて後の山脈は其低下特に著しい。アルタイの南側には、山脈を相當距てた地點に餘り高くない山脈が並行に走つてゐる。此山脈はブルント・ホイよりグウチユンに至る通路の西方に起つて、東方遠く大ゴビに及んでゐる。山脈は各地各樣の名稱を附せられ、西方に於いてはバイトイク・ボグド、次いでハツプトイク、更にココ・ウンヅウル・シヤルイ・ヌウル（科布多より鎭西に至る通路の交叉點に於て）、最後に東方に於てはエレニ・ヌウルと稱へられてゐる。此山脈は天山方面よりは頗る高き斷崖をなす如く觀せられるが、北方面からは遙かに低く感ずる、北方は高原や橫走する臺地によりて大山脈に連續するからである。蒙古アルタイはボタニン氏の記錄によれば、植物の點に於ては天山にも劣る程の貧弱さで、蒙古山脈全體を通じて山林は殆んどなく、僅かに北斜面の溪谷中に西伯利落葉松（Larix sibrica）河谷に沿ふ谷底には或る種の濶葉樹（白楊、猿楊Sarix capeb）ナナカマド（Sorbus ausuparia）等を見ることが出來る。アルタイ山脈が三支脈に分れる地點からは、北方脈は其前特徵を比較的帶びて居るが、中央及南方兩支脈は植物絕無である。

（二）タルバガタイ山脈と其支脈（モンラク、サウル、ハトイン・ウラ、ウルクシヤル等）

タルバガタイ山脈はセミパラチンスク洲、セルギオポリスカヤ驛の南東に源を發して、西より東に延びてゐる。初め岩石は多いが高くはない。ザイサン湖西端を通ずる子午線上に於て其高さ絕頂に達し、短かく幅の廣い而かも平坦な支脈テルス・アイルイク（セミパラチンスク領內）を出してゐる。これよりタルバガタイ山脈は東するに從つて低下する、併しブルガスタイ通路を形成するに及んで再び其高度を增し、其後間もなく山脈の一大集團に合するのであるが、此山脈間に三ケの廣大な臺地が挾まれてゐる。（註）

註　ベフツオフ氏著、チユンガリヤ概要三頁。

タルバガタイ山脈の雪は夏期全く融ける。南斜面には山林は全くない。山脈南側の支脈は嶮しく、岩石多くそして深く峽い谷に刻まれて居り、谷の兩側は嶮しい斷崖を成してゐる。タルバガタイ山脈は餘り高くないので、之に發する河流は甚だ少く、タルバガタイ南側に發する溪流にしてエミル河に達するものは一もない。（註）

註　チフメネフ著アジヤ資料集第二卷六、七頁。

タルバガタイ山脈を越えてゐる山道に次のやうなものがある。

（一）バイムルジンスキイ（別名コトン・アシチ）最東方路にして車輛通過に適し、上下の坂路何れも嶮しきものはなく、道路全長三〇露里である。

（二）ブウルガスタイ。前者の西方三〇露里にあり、一八七一年ボルトラツキイ將軍探險の際、車輛通過用としての改良法が研究され、一八八〇年全く改築されたものである。峠より南側への下り坂は可なり嶮しく、砲車は輪繩を以て抑制する必要がある。本通路には途中窪地があり、之に溪流が流れてゐる。全長二〇露里。

（三）クスタイ（ブテイチイ）―ブルガスタイ通路の西方二〇露里にあり、車輛の通過は全く不可能で、南方への下り坂は非

常な嶮難で、數回急流と交叉してゐる。全長三〇露里。

(四)ハバル・アス。塔城の北方五〇露里に在り。勾配險しく岩石に富み車道としては相當の難路である。併し車輛通過用に改修することは不可能ではない。道路は可なり彎曲や坂道が多い。山中路面は約七〇露里ある。

(五)サイ・アス。バルアスの西方二〇露里にあり。サイと稱する廣い溪谷に沿ひて南より進み、各所に於いて道は河谷と離れて山間に通じてあるが山は嶮しくはない。ハバル・アス峠の分水嶺の北方一〇露里に於て前述のハバル・アス通路に出る、サイアス峠は一八八四年ザイサン駐屯砲兵中隊の一小隊をバフタ地方守備隊に編入せしむる目的の下に車輛通過用路面に改築の計畫が樹てられたのである。

(六)タルドイ・アス。非常に長い而かも單獨騎者以外通過不可能な不乄此上ない峠である。

タルバガタイ山脈南斜面には石炭の埋藏があり、之が早くも支那人によりて採掘されてゐたことは、カラキタタ河左岸ブルハン・ブラク河口より下流に存する痕跡によつて明かである。

タルバガタイ山脈南斜面の主支脈から、北緯四七度以南の地點には二支脈があり、何れも西南に走つてゐて、エミル河とコク・テレカ河との分水嶺を成してゐる。

此兩方脈はコサツク村セルギオポリスカヤよりバフタ地方へ通ずる郵便街と交叉してゐる。

西側支脈はキヅイル・チヤルイとアキイ・レクとで、キヅイル・チヤルイは低平な高地から成り、その西斜面は非常に少い而かも貧弱な牧草に包まれ、東斜面には牧草もよく又水量は少いが水源も若干ある。アキイ・レク連山は僅かな高地に過ぎない。

東側支脈はバフツイ、コイチ、アルカルルイで、バフツイ連山には高いものはなく、北西方から南東方に向けて走り、北方に於いてサルキヅイン高地によりてタルバガタイ支脈に合し、西方に於ては平坦なコイチ高原と合してゐる、連山の各山頂は鋭く尖り、岩石も多く従つて樹木はない。バフツイ山にはキルギス人の言によれば、塔城よりカザツク村ウルヂヤルスカヤに達する通路がある。

コイチ連山はなだらかな傾斜の波狀高地からなり。その直徑は郵便路に沿ひ約七露里ある。各高地を掩つてゐる牧草は羊の飼養に適してゐる。ためにキルギス人は之に適する名稱を與へたのである。(註)

註　チフメネフ著、アジヤ資料集第二卷八・九頁。

タルバガタイ山脈の北方には殆ど之と並行にモンラク山脈が連なつてゐる。其高さも僅かにタルバガタイに及ばない程度である。モンラク山脈のタルバガタイ山脈に接合する地點には、密集した山群がある。ムムスク・タウ、ジユウレ・タウ、マリイ・カラ、クリ・タウ、ムンケジユルガ、ケレゲンタス、コルブン・クリ、クレ・ウンヅイリ等の諸嶺が相集つて一の高い臺地をなしてゐる。

タルバガタイ及モンラク兩山脈と上述の高原及先に述べたるテルス・アイルイク山脈とで圍まれてゐる高い臺地はチクチンスカヤ平原と呼ばれてゐるが、實は海拔平均四、二〇〇呎と云ふ高さにある高原で、其西部は平坦な沼澤多い低地でキヅイル・チリキツイと稱へられ、カンズイ・ス河の源は之に發してゐる。チリクチンスカヤ高原は前述の如く四方山に圍まれてはゐるが、隣接諸平原と次の六山道路を以て連絡してゐる。北方にヂヤン・チレム、東方にチヨガン・オボ及ケレゲンタス。南方にカイムルヂンスキイ及ブルガスタイスキイ、西方にイツスイクスキイ門がそれである。以上の六山路中チヨガン・オボのみは車輛通過全く不可能で、他は全部車輛通行自由で、就中イツスイクスキイ門の如きはコクベクツイ市よりチヨガン・オボ及更に奥地支那各地に達する直通路である。(註)

註　ペフツオフ著ヂユンガリヤ概要三五頁。

チクチンスキイ高原北東隅に於てモンラク山脈と、高原東側の邊縁をなす諸山の一群とが、同系中の最高サウル山脈に合

してゐる。サウル山脈は同地點を發起點とするものであるが、當地方に於いて特に著しい高峰を現はして後、初め東北東に進み、後東方に直進し、國境附近支那領に於いて再び高嶺を現してゐる。此高嶺はムス・タウと稱へられてゐるが氷山（蒙古語で「グルバン・ツァサツ」）の意である。此高嶺は三ケの連山から成るもので、東端に在るもの最も高く且つ嶺峰が多い。これより西方の他の二連山は共に同一子午線上にあつて、東端のものに比して僅かに低い。三連山共に常に永久の雪に包まれ雪のないのは僅かに其尖がつた山脊たけである。（註）

註　ベフツオフ手記。

連山中の最高峰はベフツオフ氏の認定では一一、五八〇呎で、サウル山脈中雪を戴いてゐるものは此ムス・タウのみで、これより以東は漸次低下しウリングラ湖を去る三〇露里の地點に於ては夫々の高地に分れ、其尖端は同湖西南岸に及んでゐる。（註）

註　ベフツオフ氏ヂュンガリヤ概要四頁。

山脈南側は頗る峻嶮で且つ横谷に乏しい。然るに北側は緩傾斜である。南側の諸川は水量少く平野に出でて後は間もなく消失する。サウル山脈南側に沿ひザイサンよりブルン・トホイに通ずる道路がある。

サウル山脈を横斷する通行路は一〇條もある、併し何れも車輛通過には全然不適當である。此等の通路は山脈延長に對し均等でなく、東部には西部よりも遙かに多い。以上の通路中コブカ溪谷より山脈北側に通じてゐるハルガツイ峠は一八八二年ベフツオフ氏の踏破したものである。此峠に達する南側の上り坂は相當嶮しい、其高さは七、五五〇呎である。峠は落葉松の上部分布境界線と同一高さにある。峠の頂上は沼地で頗る美事な草原に掩はれてゐる。峠よりタスツイ河に至る下り坂は初め嶮しく、後次第に緩傾斜となる。ハルガツイ峠から來る道路が其流れに沿つてゐるタスツイ河は、峡く林のない岩石の多い溪谷を流れ、兩岸は嶮しく岩石に滿され、諸所瀑布を形成してゐる。斯かる特徴は其發源地に至るまで同一である。

水源に向ひ六露里以内の地點に於て右方よりクスタイ河が流入してゐる。タスツイ河は山間を出でてカラ・チユク高地附近に於て左方より河水漫々たるセレン・カラガイを合してゐる。此支流は其源をヂヤマン・グイル峠に發してゐる。ヂヤマン・グイル峠は雪の群山マス・タウの東方十二露里にあり、これが通過は頗る困難で、南斜面に出つるにはテレクツイ河に沿つて進むのである。テレクツイ河は平野に出るや忽ち其の姿を消して了ふ。

タウツイ河が山間を出でて後の其河岸には稀に孤立する白楊を各所に見る。タスツイ河はカラチユク山を過ぎて後、平野に出で嶮しい兩岸の間を流れるのであるが、キルギス人の言によれば山を去る二五露里程の地點に至り全く其の跡を絶つてゐる。サウル山脈北斜面の諸川にして同山脈以東に向ふものゝ河岸には、タスツイ河と同樣山林がない。併しサウル山脈南側の嶮しい斜面に於てはタスツイ河以東の子午線にあるナガイツイ、ジルメラ、カルルイク等の各河岸に落葉松繁茂してゐる。サウル山脈北斜面に發出して、タスツイ河以東に流るゝ河は甚だ少く、山間を出づれば直ちに其跡を絶つ、其中稍名あるものはサルイ・ブラクで、右方にブラグと稱する支流がある。サウル北斜面タスツイ河以西に、東西兩ウラスツイがある。東ウラスツイ河はマス・タウ群山に其源を發し、落葉松の茂つてゐる荒涼たる狹谷を走り、平原に出てジヤマン・アドイル及キヅイル・アドイル兩山脈によつて形成される山門に達する。兩山脈中前者は河に對して垂直に延び、後者は（左岸に）並行し進んでゐる。東ウラスツイ河は山岳を去ること約三〇露里にして砂丘の間にあるウラル鹽澤中に沒してゐる。西ウラスツイ河はマス・タウ群山の稍々西方に發出し、山岳を離れて後は東ウラスツイ河と同樣平原を北方に流れて後砂中に消えて了ふ。

東ウラスツイ河及タスツイ河各沿岸には山麓地區にトルゴウト人約七〇戸遊牧生活を營んでゐる。彼等は河畔に小許の耕地を設け、小麥、黍、大麥、少量の阿片用ケシを栽培してゐる。彼等の冬營は山麓に近い河岸である。彼等はサウル山上ウト・ラスツイに住むコブク人の仕へてゐた汗に服從してゐた。彼等は東西兩ウラスツイ河より多量の水を其灌漑用水に引入

れる所から、兩河の水は忽ち涸渇して了ふ。北邊は移住に適する土地は全くない。（註）

註　ペフツオフ氏手記。

同じ一八八二年に、ペシコフ氏はハルガツイ峠から約二五露里東方にあるアイル峠を越してサウル山脈横斷を敢行した。此峠はハルガタイ峠より難路で、其高さ七、七八〇呎ある。サウル、モンラク兩山脈接合點附近の鈍角地點に恰も兩山脈の前地と云ふ格に、キシキネ・タウ（小山）と云ふ岩の多い高原がある。此高原には多くの溪谷が横斷してゐる。

サウル山脈の南方には山脈と並行して一大山脈が連なつてゐる、其延長の大部分はサルブルチンスキイ連山と云ひ、西方部のみ初めアヅルイク・カラ、次いでアルガルツイと呼ばれてゐる。本山脈は其高さ僅かにサウル山に及ばない、チルクチンスカヤ平原東側を圍んでゐる群山には連續しない。併し其間に廣大な出口を形成し、此を越えて水量豊かなコブク河（後章コブク河記事參照）が南東に向つて流れてゐる。本山脈東部は遠く延び僅少の間隙を置いてウルング河左岸に於て蒙古アルタイの支脈に達してゐる。本山脈とサウル山脈との間にはコブ平野が挾まれてゐる、平野とは云へ海抜四、八九〇呎の高さを有し東方に向つて次第に低下してゐる。

サウル山脈の北方には山脈と殆ど並行して多くの短い、互に連續してサウル山には連結してゐない支脈がある。其中ノホイ、ジヤリドイ・カラ、コクスン、ウシ・カラ、ナルイン・カラなどは著名なものである。最後のナルイン・カラはウリユングラ湖の湖岸北西方に擴大してゐる。本山脈とサウル山脈との間には山間の平原が展開してゐる、其平均高さは海抜二、七三〇呎で、コブ平野と同様東に向つて次第に低下してゐる。（註）

註　ペフツオフ氏ヂユンガリヤ概要五頁。

以上の山は何れも樹木なく其中には水源も極めて稀で雜草も頗る貧弱である。

タルバガタイの東端コブク河上流附近から二山脈分派し、一は東南東に、一は南西に走つてゐる。前者はハツイン・ウラ（セミシ・タウ）と云ひ、後者はウルカシヤル（トルケスタン地形課四〇露里地圖にはオルホチユク）と呼ばれる。ハトイン・ウラ山脈は右方よりコブカ河谷を境し、ウルカシヤル山脈はエミリ上流溪谷左岸を形成してゐる。兩山脈共未だ全然調査されてない。

（三）　バルルイク連山と其支脈（マリイ山脈とヂヤイル山脈）

これ等連山は、ヂユンガリヤ・アルタイ山脈とタルバガタイ山系との連鎖をなしてゐる特別な山群である。此山群を區畫するアラタウとの間には、エビ・ノル湖よりアラクリ湖に至るカブタガイ溪谷があり、タルバガタイとの間にはエミリ河の河谷がある。連山の一般方向は南西方から北東方に向つてゐる。本山群は一八八六年ザクルチエフスキイ氏及ボグダノフ兩氏によりて調査され、兩氏は全面積に亘りて詳細な測量を行ひ、縮尺十露里の地圖を作製した。ザクルチエフスキイ氏は尙ほ調査個所に關して可成精密な記錄を殘してゐる。（註）

註　本稿中、ザクルヂフスキイ氏の記錄より採りたるもの相當あり。

前述の山群研究の便宜上先づバルルイク連山に就いて述べ、次いでマイリ、ヂヤイル各山脈に關して述べることにする。バルルイク連山は嚴然たる山脈としての特質は備へてゐない、山脈と云ふよりは寧ろ山群と云ふべきである。此山群は北、西、南の三方に水を流下させてはゐるが、その總蓄水池はアラクリ湖の低地である。バルルイ連山の隆起軸を點檢するに、隆起の軸は南西より北東に延び、軸の南西端に隆起の頂點を有し、ケリ・タウと稱せられ高さ八、〇〇〇呎に及んでゐる。ケリ・タウより四方へ重要支脈が分れてゐるが、何れも峽まく深い溪谷によつて分離されてゐる。ハルルイクのケリ・タウからは北方へも西方へも餘り重要とは云へないが支脈を出し、南東に向つては急角度に落下して、クブ河溪谷を以て明瞭な境が置かれてゐる。バルルイク連山は一般呼稱の外に各地各様の地方名を有してゐる、例へばコリク・タウ、アラサン・ヂエタスイ（露領に於て）、ベリアゼン等がそれである。

現今セミレチエンスカヤ洲と支那タルバガタイ地方との間の國境線となつてゐる元支那哨兵用道路は露西亜側卽ちバルルイク西方部のみが測量されただけで、バルルイク西斜面の河流は次の如きものである。

(一)　ツァガン・トゴイ。これが水源は連山最中央アクセコ峰の頂上附近である。(二)　カインドイ・ブラク。(三)　ヅウラトイ(ブルハン)。(四)イチエンドイ。(五)アシチルイ。(六)　チユルグウト。(七)　テレクトイ。(八)　スユト。後者の二河流上流には頗る優良な建築用材がある。テレクトイ・クサク河は西方に流れでバルルイク南山脈とマイリ北西斜面との境をなしてゐるが、其源は沼地中に隆起してゐる平原コヌル・オボに發してゐる。上記各河川とも水量少なく河谷に出てて後は流砂の中に姿を消す、只ツァガン・トゴイだけはアラクリ湖に達してゐる。各河川とも其河谷には穀物栽培に適する場所が多い。バルルイク連山は北東に向つて次第に低下し、其末端は幅の狹まい山脊となつてカラヌイン・タウと呼ばれてゐる。

バルルイクの北斜面に發出する河流中、比較的水量の多いものは左の如きものである。

(一)　カラ・ブラ(アル・アマトウ)。山間を出でて後相當久しく河水を保有してゐるが、エミリ河に達せずして砂中に吸收されて了ふ。河谷には雜草、灌木、獨立樹(ヤマナラシ（Populus tremula白楊) 密生し、夏期水深からず淺瀨は到る處渡河が出來る、(二)クサク(チベアタ)。本河はヂアンガスイ及びチヤガルの二水源を合して成れるもの、兩岸沿道には牧草地や農耕地がある。バルルイク連山の南側、正確に云へば南東側は灌漑頗る不良で、當サルイ・フルスイン哨舍よりアルトイン・エシリスキイ通路に至る三〇露里の間に於いて僅かに四ケの貧弱な流れがある丈けである。併しこれより南西に支脈の延び且つ高まるに從ひ溪流は次第に多くなる、これ等はクブ河左岸の支流である。クブ河に就いては後ちに詳述する筈であるが其溪谷はバルルイ連山とマイリ及チヤイル兩山脈との境をなしてゐる。バルルイク連山南東斜兩は灌漑不良なるに拘らず、雜草は北及西斜兩よりは遙かに豐富である。

バルルイク連山中央部は縱橫の大山脈から成り、各山脈とも裸岩が佇立してゐて之が通過は非常な困難とされてゐる。狹い溪谷換言すれば山間の狹谷は深く彎曲も多く而かも荒れてゐる。クブ河の河谷はバルルイク連山とマイリ、チヤイル兩山脈との境界をなしつゝ、一般走向は南西から北東に向つてゐる。溪谷南西部は砂利、小碎石などに蔽はれ雜草類も殆どない。中央部も亦雜草貧弱であるが、只中央部には山麓に支那キルギズが穀類栽培に携はつてゐる。これより北東に進むに從つて草類依然として少きも、キルギス人の證言によれば畜類の飼養に適してゐる。夏期、クブ河谷には住民は殆どない。夏期當地方は匪賊橫行地帶となるが、之は附近郵便路上に配備されてゐる支那兵が更に之を顧みないためである。クブ河谷の下流は冬期遊牧民が其畜群を追ひ來る頃に限り相當賑ひを見せる。當地は冬期降雪量少く、爲に畜群自ら餌料を求むる便利があるからである。クブ溪谷は同一名稱の河流に洗はれてゐる。河は其源をマイリ山脈北斜面に發し、山間からコメル・オボ平野に出でゝ後は地中奧深く其姿を沒し、其まゝ地下を流るゝこと七露里、後再び地表に現はれて、バルルイク、マイリ兩山脈の支脈によつて形成される岩石の多い狹谷を二五露里の間流れてゐる。狹谷を出でゝ後クブ河は嶮しい粘土質の兩岸のある深い低地を流れ、其後兩岸開けて河は細かい砂礫の堆積中に消え失せて了ふ。クブ溪谷の最下部は二部に分れ、東方のものはチヤイル山脈とウルカシヤル山脈との間にある廣い平野と合し、北方のものは狹い狹谷によつてエミリ河谷と合してゐる。此の狹谷がチユグガナやドロブルヂナなどから烏蘇に通ずる郵便(哨兵用)路となつてゐる。狹谷の中央、河畔に支那營舍サルイ・フルスインが設けられてある、嘗ては(東干族大虐殺以前)非常に繁華を極めたのであるが、現在では僅かに一軒の支那小屋があり、之に數名の支那兵―民兵が住居して居て郵便事務に服務してゐるに過ぎない。バルルイク連山は其南西端に於てマイリ山脈に連續してゐる。

マイリ山脈は高さ餘り著しからず、カンタガイ狹谷より北東支那營所ヤマツウまで連續してゐる。マイリ山脈の北西斜面には長い單調な支脈が無數にある。之に反して南東斜面は嶮しい裸かな岩棚をしてゐる。山脈中央部は緩かな波狀丘陵で、西端及東端は多くの高い丘である。

マイリ山脈南西端附近にある高峰サル・トロゴイから、ウヅン・ブラク河及テレクツイ・クサク源に沿ひて、樣々な名稱を持つ(コジエケ、サル・アガツイ、ウズンブラク、サルイ・ブラク、テレケツイ)餘り高くない岩石の多い支脈が連續し西方に進むに從つて次第に低下してゐる。

マイリ・タウと云ふ名稱は(油山の意)久しい以前から此山に與へられものであるが、これは此斜面には遊牧民の畜類のために最もよい餌料である草類が、濃密に高く豐かに生茂つてゐるからである。此邊は冬期大雪はなく夏期炎暑がない、從つて當地方マイリ山地はノマド人の定住地となつてゐるのである(當地に遊牧せるはキレエフ種のキルギス人である)。

マイリ山脈北西斜面を灌漑する諸川の中比較的水量の多いものはウヅン・ブラクと云ふテレクツイ・クサクに注ぐもの、ブルリ・バイタル、クブ河に注ぐマイリ・ブラト、マイリ山脈とジャイル山脈との境をなすヤマツなどである。

マイリ南斜面及南東斜面にはコジエケ、ラバ・アイガルツイと云ふ支流を持つスウル、水量の多いチャイガイと呼ぶ山間の溪流を集めたものなどがある。これ等河流は何れもエビ・ノル湖を指して流れてゐるがこれに達しない中に砂中に消えてゐる。

マイリ山脈の延長がヂャイル山脈で、ヤマツ河河の谷と長く平坦なマイリ・ヂャイル峠とが僅かに兩山脈の條件的境界をなしてゐるに過ぎない。ヂャイル山脈はヤマツ河の河谷に起つて、初め北東に向ひ後間もなく急に東に折れ殆ど二〇〇露里を其まゝ進んでゐる。マイリ・ヂャイル峠の高さ(六、〇〇〇呎)から押して、ヂャイル山脈の平均高さは七、五〇〇呎以上と推定される。山脈の緩かな傾斜の波狀地表は優良草に包まれて居る所から自然廣漠たる一大牧場を出現し、狹谷の或る斜面には松林や落葉松の林さへ見えてゐる。

ペフツォフ氏の資料によれば、本山脈はサウル山脈と反對に北斜面が嶮しく、南斜面が緩勾配である。北斜面には數條の溪流があり、大部分は平野に出でて後地中に姿を沒してゐる。只ベリ・アガチと云ナムイン・ゴル（後章河流記事參照）に注ぐもの、ダルドイムツイと云ふオルフ湖（アイリク・ノル）に注ぐものとは例外である。ヂャイル山脈南斜面には土人の言によれば東より數へて、コヂュルタイ、マイ・クイシ、ウチ・ブグト、ヂエラナシチの四流がある。

支那との間に締結されたペテルブルグ條約に依ると、ドリバルルイク連山は、露國民たるキルギズ人に一〇ケ年間使用を許されたものである。本條約に基き現今バルルイク連山にはギルギス人が住んで居るが、彼等はバルルイク、エミリ、ラバ・マイリの三政廳の支配下にある。バルルイク一帶に居住する我がキルギス人は夏期二、三〇〇戸(一一、五〇〇人)、冬期二、八〇〇戸（一四、〇〇〇人）と見てよい。併し時にはザイサン地方のキルギスも南タルバガタイやチリクチン各部落から來るが、其數は三〇〇戸乃至一、〇〇〇戸である。此外にセルギオポリ郡のキルギスも、アヤグズ、ウルヂャル、カラコリ、チャルバクチンなどの諸部落から畜群を追つて來ることがある。

バルルイクのキルギスは夏期は高原に居り、冬期は溪谷に下りて生活する。バルルイク南斜面には、マイリ山脈やヂャイル山脈と同樣我がキルギスは遊牧してゐない、併し冬期はタルイスカヤ河やウズン・ブラク河へ向け多くの羊を追つて來るバルルイク地方には穀類栽培に適する土地は相當にある、併し我がキルギスにして當地の農耕に從事してゐるものは頗る少い。彼等は多く狩獵を業としてゐる。狩獵の目的物は「アルハル」(山羊)及「サイガ」（Saiga tatarica）の大群で、猶ほ狼、

註　當地方には普通狼の外赤狼棲息す。

狐、兎、熊などの獵も相當行はれる。バルルイク連山には林產餘り豐かならず、建築松材は北方及西方斜面の間隙にある濶葉樹ではサルヤナギ（Salix caprea)、エゾウワミザクラ（Trunes padus)、ナナカマド（Sorus ausuparia)、殊にヤマナラシ（Topulus tremula）などである。ヤマナラシは森林をさへ形成してゐる。白樺は見當ることが甚だ稀で、太さも僅かなものである。バルルイク東部の間隙に於て主要な樹木は野生林檎樹で、ヂョワクスキイ狹谷やカラヌインタウ山の各所に密生してゐる。キルギスは林檎を食料品ともし販賣品ともするが、其樹は情用捨もなく伐倒して燃料にも使用する。前記のカラヌイ

ン・タウ山には巴旦杏（Amygdalus communis）も野生ながら見當ることもある。

バルルイク地方に茂つてゐる灌木でよくあるのはスグリ、野バラ、ボヤルイシニク（Crataegus）、カラガン（Caragana arborescens）及其他刺の多い灌木である。

（四）チユンガリヤ・アラタウ

本山脈はアラ・クリ湖とエビ・ノルとの分水嶺である。本山脈北方部は十分調査が遂げられてあるが、南斜面のボロトラ河に面した側は調査不十分である。本山脈はカブタガイ狹谷からボロトラ河の水源に至るまで近づき難い難路であるため、露支兩國間國境線として屈強なものである。カブタガイ狹谷はヂユンガリヤ・アラタウとバルルイク連山との境をなしてゐると同時に、此狹谷は嘗てアラロ・バルカシ河系とゴビとを繋いでゐた海峽と云つた形で、其跡は今尙ほ歷然としてゐる。カブタガイ狹谷の最も狹い場所（チヤラウルイ高地とサルイ・ブクトル高地との間）は廣さ七露里である。此の狹谷が著明なのは此狹谷を殆ど間斷なく吹卷つてゐる猛烈な寒風が、山嶺に鎖された河床を渡つて炎熱の低地に吹き出される寒冷な空氣の流れに外ならないと云ふことである。卓越風は北東風で、キルギスのサイ・カンと呼んでゐるものである。尙ほ前述のものと反對に南西方より吹く風エビも其强さに於て前者に劣らない、寧ろ時期はサイ・カンより長い。（註）

註　コステンコ氏。トルケスタン地方第一卷五五頁。

チユンガリヤ・アラタウは西方正確には南西方ボロトラ河の水源附近に於てボロホロ山脈に合してゐる。山脈の走向は緯度四五度と殆ど竝行してゐるが、僅かに南方に傾いてゐる。山脈の長さはカブタガイ狹谷からボロトラ河の水源に至る約二〇〇露里である。實は南西更にセミレチエンスク洲內深く入込んではゐるが、これは數條の支脈に分れてゐるのである。山脈主峰は永久雪に掩はれてゐるが、其他の嶺峰及鞍部に於ては夏期は融雪する、此結果山は斑山に見える、これがキルギスのアラタウ（斑山の意）と稱する所以なのである。山脈の最高部は西方部のボロトラ河水源附近にある。山脈は東部に於ては漸次低下し、カブタガイ附近に於て急に低下してゐる。ヂユンガリヤ、アラタウ山系と云ふのは、本脈と之に竝行し進んでゐる二流の山脈數脈とから成つてゐる。最北端脈を成すものがテケリ連山とトクヂヤイリヤウ連山とであり、本脈に竝行する第二脈を成すものがカイ・カン、サナルイ、チエベンドイの諸連山である。ヂヤブイク、カラ・トカ、ヂユン・ヂユリユク、カラ・ガルイなどの各連山は之に次いでの山脈であり、タシ・タウ山脈は本脈に竝行する山脈の最後のものである。（註）

註　チフメネフ著亞細亞資料集第二卷一二頁。

北斜面に於てはアラクリ・バルガシ河系に屬する主要源流トクツイ、テレクツイ、ヂヤマンツイ、イルガイツイ、テンテク、レブサなどが其源を發してゐる、前記の諸川は山中を出づるに當つて大體二方向に分れる、卽ちトクツイ、テレクツイヂヤマンツイ、イルガイツイの四源流は東方に、テンテクは北方に、レブサは北西に（イビド、一二頁）流れてゐる。ヂユンガリヤ・アラタウ西方部に於ては北斜面からバスカン、サルカン、アクス、ビオン、カラタル、コク・スなどの諸川が發源してゐる。

註　イビド、三一頁。

ヂユンガリヤ・アラタウの北斜面は灌漑よく、從つて植物の發生良好である。河川の河谷や支脈の狹谷にはエゾ松、白樺、山白楊等が繁茂し、狹谷の北斜面はエゾ松林に包まれ、その若樹は急勾配の斜面や近つき劍岩を掩つてゐる。濶葉樹、松は主として河岸に生長し、其占むる地域も餘り廣くはない。支脈の斜面や峽谷には優良な牧草があり、波狀の溪谷は耕地に自然區畫を附してゐる。耕地には五穀が人工灌漑を要せずして實つてゐる。

ヂユンガリヤ・アラタウの南斜面は遙かに嶮しく、水の灌漑は十分とは云へない、從つて山林はない。

ヂユンガリヤ・アラタウ山脈の通行難易は之に通じてゐる縱橫の通行路數によつて定まるのである。セミレーチエンスク洲からはボロトラ河谷へ向けて、イルトイ河の水源附近にあるアルカン・キルガン峠やトルラウルイ峠を越ゆる橫斷路があり、テンテク河の水源附近にあるコカタ・ウ峠を越ゆる橫斷路もある。

住民の語る所によれば、互に相接してゐるアルカン・キルガンやトルラウルイなどの峠へは、アラクリ湖西岸からイルガイツイ、テレクツイ、チヤマンツイなどの諸河流に沿つた通路があり、タシ・タウ山脈中のアト・タブカン峠に於て之が全部合し、其後前述の各峠の一によりてサラガチの天然境界であるボロトラ河の河谷に下ることが出來る、此に於て徑は再び相合してゐる。以上三通路中最も近路はテレクツイ河の河谷に沿つてゐるもので、その河谷はアラクリ湖岸からアルカン・キルガン峠を越えてボロトラ河に達する約一三〇―一五〇露里である。三通路とも地形學的特質からは極めて通過困難な騎乘小徑である。コカ・タウ峠を越えてゐる駄馬路はレブシンスク市からボロトラ河の河谷に出るもので、其長さは峠まで約八〇露里、峠からボロトラ河まで二〇露里である。自然境界タイ・サイチヤンに至るまでの駄馬小徑はレブスイ河谷に沿ひ前記天然境界に於てテンテク河谷に移り、其上流アルチヤルイと呼ばれる河附近に於て主要山脈を越えてゐる。此邊の行動は夏期の各月以外には絶對不可能である。

北斜面の縱斷通路は三路で、最南端のものはテンテカ河谷からカブタガイ狹谷を經てボロトルイ河谷に達する斜面の麓を通ずるゝもの、其長さはウシ・アラル村からボロトラ河の天然境界サルブクに達する約二八五露里である。カブタガイ狹谷に至るまでは車輛を通じ得るが、其先きは駄馬路である。中央路はレブシンスク市を發して、オシノフカ、チラシモフカ、コルバコフスユエなどの諸部落を經てチヤマンツイ河谷に至りて南方路と合してゐる。本通路は車輛の通行に最も適してゐるもので、其長さは八五露里である。北方路はレブシンスク市を發してチト・テンク河チヤマンツイ河などの上流に沿ひ、イルガイツイ河谷に出でゝ南方路に合してゐる、其長さは凡そ一四〇露里である。此近距離駄馬小徑で而かも非常な難路である（註）

註　イビド、一三、一四頁。

チユンガリヤ・アラタウの南西部には數條の通路があり、之によりてボロトラ河谷に出る駄馬小徑バスカンスキイ、サルカンスキイ、ツイカス、カイカン、コクスイスキイなどがある。各通路とも先づ難路の部類に屬するもので、夏期各月の外は通過不可能である。

（五）　ボロホロ山脈（タルキ、レイン・ハビルガン）

本山脈はボロトラ河の水源よりアドン・クル山脈分岐點に至るまで、イリ河谷の山間部北部の境界をなしてゐる。本山脈の西端ホルゴサ河水源までの、ベツチン・タウと稱する小地域だけは我が露國領内にあるが、殘餘の部分は全部支那領域にある。兎に角自一八七一年至一八八一年露國人のクリヂンスカヤ地方領有當時本山脈は十分研究され、既に半ば機械的測量も遂げられてゐる。本山脈は西方部に於ては或る嶺峰には六月まで雲を戴くものもあるが、永久の雪を戴くものはない、之に反してタルキン峠以東殊にカシ河の各水源附近に於ては其嶺峰は永久雪線を凌いでゐる。山脈の南斜面は數段の地段をなしてイリ河谷に陷落し、判然と看取出來る地段の最下位のものは西マザルから舊ボロフヂルの廢墟に向つてゐる道路に據つてゐる。道路を越えてから斜面の匂配は緩やかにイリ河右岸をなす砂丘にまで達してゐる。各支脈斜面の下部は優秀な牧場で被はれて居り、支脈の前山地帶は特に灌水せずして穀類が稔り、峽谷には山林及優秀な牧草地がある。山脈の南斜面は水の灌漑良好にして、此に源を發する諸川は一部はイリ河及其支流カシに合し、一部は溪谷に出でて後其姿を消してゐる。此外山中には多くの泉や水源がある。

ボロホロ山脈西端部を横斷して唯一の遊牧民用の隘路がホルゴス河岸に沿つて通じてゐる。併し最低水量の時でなければ通行不可能である。其他の河谷には通路はなく、遊牧民用隘路も山脈中大支脈までしか通じてゐない。ボロホロ山脈のニルキン峠からアドン・クル支脈分岐點までの地區も決して通行自由とは云へない。山脈中の最も通行自由なのはホルゴス河水源とニルカ河水源との間で、此間には、通行困難な第二流のものを加へないで、主要峠だけでも一一の多きに及んでゐる。單獨の者は大部分敷設小徑なしに通拔られる。前記一一峠の中西方より數へて四峠（アクスイ峠三、タルキンスキイ）はサイラム・ノル湖に通じてゐる。同所に於てタルキンスキイ峠を越へてゐる大郵便道路に全部合して了ふ。五峠（ケレゲ・タス、

コク・カムイル・ヂタスイ、マイチユベ、トウラス、コクルチ）は北に近づき難いツフムト山脈を控へてゐるタズイ・イムチク河の河谷に出で、同所からは比較的通行自由なバタン・カルイルガン峠によりて、タキヤンズイ市の西方に於て同じ郵便道路に出でる。次にチテルチン峠アチヤリ峠を越えてゐる通路はキズ・イムチク東方に於て郵便道路に出で、ニルキン、ボルゴツイ、アフマジ、アルイスラン、ムンガツイなどの諸峠を越へてゐる通路は、精河、烏蘇などのある平野に於て前記郵便道路に出てゐる。以上各通路の中最も通行容易にして、從つて支那に取りて重要意義あるものはタルキンスキイ峠とアチヤリスキイ峠とで、之にクリヂンスキイ地方より支那西部地方諸都市へ達する車輛道路が通じてゐる。（註）

註　イビド、四七、四八頁。アチヤリスキイ峠は露國人により一八八〇年車輛道路として敷設されたものである。然るに支那は同地方占領後之を放擲したるを以て、現今は實際的效果はない。

ボロホロ山脈の東部には從屬山脈が並行して延び、カシ河とクンゲサ及イリ河との境をなしてゐる。此從屬的二流の山脈は其の高さ本山脈に比して著しく低く、樣々な名稱をもつてゐる、例へば東部に於てアルシヤン、中部に於てボオハン・シユン、西部カシ河下流に接する地點に於てはアウラシと稱へられてゐる。此山脈は雪線までは遠く及ばない、岩多くして峽谷にさへ一本の樹木もない。（註）

註　コステンコ氏著トルケスタン地方第一卷二七二頁。

カシ河谷より本山脈を橫斷してクンゲス峽谷に通ずる道路の數は極めて少く、最も便利とされてゐるものはオワツイ峠で四季何時にても駄馬を通ずることが出來る。他にヂギリツイ及バスツイと云ふ二峠があるが遙かに不便である。（註）

註　イビド第三卷二二六、二二七頁。

（六）　ウズン・タウ山脈

イリ河の南方に同河流と竝行して西より東に向ひ延々たる山脊が連なつてゐる、雪こそ戴いてゐないが高く聳えて、イリ河上流とイリ左岸の支流テケサ河との境をなしてゐる。此山脊は西方部はチヤルイン河（イリ左岸の支流）中流に臨んでゐる從つてチヤルイン河は本山脊と外イリ・アラタウ連山との境界となつてゐる。山脊の東部はテケサ河下流附近に終つてゐる本山脊の總延長は二六〇露里であるが、其約一四〇露里は我が露國領内にある。ウズン・タウ山脊は他の一般アジヤ山脈と同樣一定の總稱を持たないで、各所とも夫々の特徵に基く名稱を持つてゐる。例へば最西端に於てはテムルリク、次にケトメニ、次いでク・ブルタシ、ウズン・タウ、最後に最東端はカラタフと稱へられてゐる。本山に總稱がない所から我がトウルケスタン軍管區の四〇露里圖には本山をウズン・タウ（長山）と命名してあるが、これは東方部に於ける一天然境界物の名稱を取つたものである。本山脈は一般に通過困難であるが、比較的便利なのは東方部のトグウヅ・トラウ天然境にあるシヤル・ボグチとばれる峠で、此峠は甞て我が露國が伊寧地方攻略の際、伊寧よりムザルト陣地の舊要塞へ向けて、糧食滿載の荷車を通ぜしめたことのある通路である。併し此通路は廻り路で、最も近いのは伊寧のオアジスからテケサ溪谷に向つてゐるもので、チヤブ・チヤル峠を通るものである。此通路は最も便利で特に車輛通行用として開かれたものである。以上の外に尙ほハンガイ、ス・アシユ、ケトメニスキイなどの（駄馬）峠があるが、最後のは我が露國領内にある。（註）

註　コステンニ、トウルチスタン地方第一卷五六頁。

ケトメニスキイ峠の外我が露國領土内にありて、十分研究の遂げられたものにカツサンスキイ、アチノクスキイの兩峠がある、ケトメニスキイ峠に比して更に難路である。カツサンスキイ峠に通じてゐる通路はスムベ河の溪谷に達するが、アチノクスキイ及ケトメニスキイ兩峠にある通路はケゲン河流谷の上部に通じてゐる。探聞の結果によれば、ケトメニスキイ峠以西に尙ほシユウムカル、ダルダンツイ、ドウラツイ、カルタム、ウドウツイ、バインカザク、ツオガン・ウスン、テルメツイ、チヨンタムギ、バガ・カムギ、テメルリクなどの峠がある。何れも難路で最も便利と云はれるのが最後のもので、何れもイリ河谷からケゲニ河谷に出るものである。（註）

註　チフメネフ氏著、アジヤ資料集第二巻五〇頁。

ウズン・タウ山脈北斜面は三段の臺地をなしてイリ河谷に臨んでゐるが、此の臺地は卽ちイリ河谷の左側をなすものである。又南斜面は若干の支脈に分れて、テケサ河谷の左側を形成してゐる斜面の中に消えてゐる。ウズン・タウ山脈は其狹隘の間に落葉松林が豐富にある。エゾ松の外に山の低斜面にはナナカマド、楓、サルヤナギなどがあり、灌木も數種ある。森間には變つた獸としては多くの山鹿の群の棲息してゐることである。（註）

註　山鹿は天山の本支何れの山脈にも棲息して、支那人の好餌となつてゐるが、支那人が之を截つて獵するのは其角を得んが爲で、角は醫療藥として支那各地で賣買されてゐるからである。

現地住人の談によれば夏期テケサ河畔の葦の中から山中に猪や虎などが出沒するとのことである。山中の爬蟲類では蛇が相當多く、之が畜類に與ふる害毒は大なるものである。山の溪谷は、夏の間よく太陽の灼熱を堪え通した優良な草が生ひ茂つてゐるので、キルギスの遊牧生活には屈強な場所である。山脈の北方其の臺地やイリ河谷に定住してゐる土民も夏期其の所有馬を山中に放つて放牧するのである。（註）

註　コオデンコ著トルケスタン地方第一巻五七頁。

ウズン・タウ山脈は西方に於て、南方に垂直に延びてゐる二線の支脈を出してゐる、アイ・ガイ・タス山脈と、ウズンタウに竝行してゐる第三脈カラ・タウを持つカッサン山脈とがそれで、此二脈を以て、有名なカッサン・ブラトと云ふ溪谷が區劃されるのである。アイガイタス山脈はカッサン盆地の西方に聳えて、一面にはチャルコヅイ、ス河スムベ河の分水嶺であり、他面にはカラガイ・テ河の分水嶺である。又カッサン山脈はカッサン盆地東方の境であり、チト・カサナ河とハナ・ハヤ河との分水嶺である。カラ・タウ山脈は前記盆地南方の境をなしつゝ西方に延びて、スムベ河チャルコヅイ・ス河の分水嶺となつてゐる。東方チャブチャル峠附近に於てウズン・タウ山脈に合してゐる。イシガルツイ峠から本山脈に沿ふてテケサ河及ケゲニ河の左岸支流分水嶺が延びてゐる。スムベ河上流附近に於て南西の方向に向ひ、餘り高くないスムベ山脈が此カラ・タウ山脈から分れてスムベ河を横ぎつてゐる。カラ・タウ山脈の平均高度は七千乃至八千呎で、其嶺峰は奇岩多く樹木に惠まれない。併し兩斜面を包む良草は能く夏の間太陽の灼熱に堪え得たものである。北斜面の狹谷にはエゾ松が餘り密生とは行かないが點々散在してゐる。アイガイ・タス山脈は全體を通じて岩石が多く山麓に至るまで裸山である。カッサン山脈はアイガイ・タス山脈よりも高さに於て劣るが、岩石少く樹木も相當にある。以上述べたる三山脈の溪谷は凉味豐かに水量は多く山林にも富んでゐるので、キルギスの遊牧地として最良のものである。殊にカッサン盆地は優秀な牧場とエゾ松林とを豐富に持つてゐる。各山脈の盆地に面した斜面は盆地の三河流に向つて下降してゐて、此にオイカラガイと呼ばれる高原を形成する。此高原は夏期ウエルネンスキイ郡のキルギス部落で全部埋められる、夏期キルギスは馬の大群を伴ひ羊の大群を引いて此に移住するのである。本山脈の中に其源を發する河流はカッサン、スムベ、イシガルツイ、ダラツイなどであるが何れもテケサ左岸の支流である。イシガルツイ、ウラン・クタリ、クムベリなどの峠に通じてゐる通路はテケサ河流谷からイリ河流谷に通ずるものである。イシガルツイ峠とウラン・クタリ峠とはカラタウ山脈にあるもので、前者を通る通路はテケサ河谷からチャルコヅイ・ス河の溪谷に出るもの、後者を通るものはスムベ河谷からカッサン盆地に至る通路である。アイガイ・タス山脈のクムベリ峠もチャルコヅイ・ス河谷とカッサン盆地との連絡するものである。以上の各通路は何れも人工が加へられてない。（註）

註　チフメネフ著アジヤ資料集第二巻八三―八五頁。

（七）天山山脈

天山と云ふ名稱はアジヤ最大の山系を示すもので、天山はスイルダリイ、チユウなどの諸川、バルカシ、アラクリ、エビノル、アヤルノルなど各湖水に注ぐ各河流、アム河上流域、ロブノル（タリム河）流域等の分水嶺となつてゐる。天山々系は

其長さに於ても(二、五〇〇露里)、其高さに於ても地上最も大なるものゝ一である。其高さは主山脈至る所に於て永久雪線を越えてゐる所から、支那地理學者が早くも之をチャン・シャンと命名した、卽ち天山の意である。本山系は最近に至るまで最も不明のものに屬してゐた。一八五六年我が露國人のアジヤ大陸奥地深く强行移動をなすに及んで始めて、最初は天山中央部次いで其西方部に於て科學的調査が行はるゝに至つたものである。天山々系中今日に至るまで最も多よく研究された部分は西部で、中央部は尙ほ未だ可成りの缺所を残してある、若し夫れ支那トルケスタンとヂュンガリヤとの境界地區である天山東部に關しては現在吾人の有する資料は極端に貧弱である。天山々系の東端よりハン・テングリ嶺峰に至る一、二〇〇露里に亘る根幹部は今日に至るまで僅かに或る小數の我が露國の旅行者が而かも或る僅小部に於て山越えをしたに止まつてゐる。例へば一八七五年ソスノフスキイ氏の、一八七六年ボタニン氏の、一八七八年ブルヂエワリスキイ氏の探險隊が夫々鎭西と哈密間に於て本山系を横斷し、一八七六年には奇臺に來たベフツオフ氏が南方へ旅して永久雪線に達しレゲリ氏は一八七九年ツウルハンより廸化に出で、アドンクル峠を越えてナラト山脈を横斷した。ブルヂエワリスキイ氏は一八七六年クンゲザ溪谷からナラト峠を越えてユルドザ溪谷に至り、ラリオノフ氏も同年大小兩ユルドザの探險を遂げ、遂に一八八二年には我が露國測量師等ムザル狹谷によりて天山々脈を踏破しカクス山に至つた。

天山山脈の特質は東方部に於て、或は北側に或は南側に根幹山脈と殆ど竝行して第二流の從屬的支脈を分出しては居るが山脈の幅が可成り狹くあるのに反して、廸化市の子午線よりは山脈は甚しい分裂を見せ多數の支脈を出して、可なり高く又長い山脈をしてゐるために、山系總體を極むることが非常に困難であると云ふ點にある。東部地區鎭西市子午線に於ては天山は南北二線の山脈から成つて居り、南方のが主脈で北方のはメチン・オラと稱へられる從屬的山脈である。山系の幅は此附近に於ては百露里を出てゐない、然るにカシガル市の子午線に於ては、當市より眞北へイリ河谷に出でんがためには、山間地方を三七五露里以上を過ぎ、而かも竝行せる其上雪を戴いてゐる山脈を八つも越えねばならない、これ等山脈は甲乙相連續してゐるのもあり、或は高い湖水や河流で遮斷されてゐるのもある。

天山々脈發起點と認むべきものは東方にありては、コシエトウ・タバン(鎭西より哈密に至る路上にあり)より東方に向つてゐる高い雪の山脈である。本山脈はボタニン氏が甞て哈密よりウリヤスタイに出た當時發見したものである。ゴビ北方地區のウヂユル・ムインギン・ブラクからボタニン氏は竝行せる二線の山脈と其の間にトウルクリ湖のあることを明瞭に見分けた(彼は同湖畔を親しく通過したのである)。北方山脈(メチン・オラ)は雪を戴いてゐないが、南方脈(カルルグ・タグ)は永久雪に包まれてゐる。南方脈は東方が長く延びて、次第に低まつて岬のやうな形を呈し、其の端には岬の南に孤立の高地が突き出てゐる。此孤立の高地はウムイル・ウンドイル、ツアガン・デブスイクなどの山々で、其麓に我がサラトフ移民團移住地バイトロゴイがある。(註)

註　ボタニン著蒙古北西部概要第一巻一五七、一八七頁。

カルルク・タグの西方延長は天山主脈をなすもので、廸化子午線までの姿態は只其巨大さを示すだけである。從屬山脈メチンオラは主脈と竝行して延び高原を形成し、其東部にはトウルクリ湖があり、西部にバルクリと云ふ一層廣大な湖がある。此湖の西方に於てメチン・オラ山脈は次第に主脈に接近して來てゐる。前記高原は甞ては一大河流々域であつたものが、現在では二つの湖水となつたものと見るのが至當であらう。メチンオラ山脈はゴビに向つては可なり嶮しく相當高い山脈のやうに見える、併し天山々脈に面しては前記の高原に直ちに連續してゐる。(註)

註　イビド、一五一頁。

加之天山はメチンオラと合して一大巨體を成し、それがバルクリ盆地に向つて急角度に陷落してゐる。五月、ボタニン氏が天山を見た時には、山脈は半ば雪に覆はれ、雪より下方には針葉樹林が連續し、林の下方境界線は山脈の麓の遙か上方に當つてゐた。(註)

天山の高さに關しては、其東方部、鎭西より哈密に通じてゐる通路のある最も便利なコシエトダバンと云ふ峠が九千呎あることを以て大體判斷がつく。天山北斜面はエゾ松や落葉松の林に覆はれてゐるが、南斜面には林は全くない。（註）

註　イビド、一五一、一五二頁。

天山の通路に關しては鎭西と廸化市子午線の間の狀況に就いて吾人は何等の資料も持たない。哈密―トルハン間、トクスンーカシガル間の各南方郵便道路、更に奇臺―廸化間の北方通路を實地通過した歐洲人は一人もない。探聞調査の結果によればヂユンガリヤから哈密オアジスに達する通路は、前記郵便路の外に、鎭西以西に今一本別の通路があるとのことである。此通路はクゲイチユアン(北方路)驛とチユバ・チユアン(南方路にある)驛とを連絡するものである、併し車輛を通じない。これより西方に尙ほ一つ、ピチヤンより北方路の營所シヤオ・マ・チユアン・ツイに至る駄馬路がある。尙ほ鎭西と奇臺との間にも別の通路があるやうに考へられる、それは天山は高くはあるが總體に雪線を越えてゐるのは個々の嶺峰だけだからである。奇臺の子午線上にありては山脈は實に巨大である。ペフツオフ氏の認定によれば此地點に於ける雪線は一二、一二八呎に達し、最高位を占むる頂上はボグト・オラと稱する三峰の山(聖山の意)で・ペフツオフ氏の目測では一五、五〇〇呎以下に下ることはないとのことである。（註）

註　イビド、一五七、一五八頁。

註　グ・レゲリ氏は本山の高さを目測して一四、〇〇〇呎と判定してゐる。「帝國ロシヤ地學協會々報一八八一年、第十七巻二〇八頁」。

ボグト・オラは奇臺の南西、廸化よりは北東にあたつてゐる。奇臺附近の天山々脈の北斜面にはエゾ松が豊富にあり、その下端は五、五〇〇呎の高さにあり、上部は九、五〇〇呎の高さにある、從つてエゾ松林の幅は四、五〇〇呎ある筈である。尙ほ天山北斜面及奇臺より南方に當る狹谷にはエゾ松の外、サルヤナギ、白楊、バラ Spiraea, Rubus, Cotoneaster et Lonicera, などの樹木や灌木が生えてゐる。ボタニン氏が鎭西附近に於て目撃したと云ふ落葉松 (Larix sibirica) は當地にはなく、尙ほ天山の西方に行くに從つて落葉松は愈々なくなるのである。

ボグド・オラから天山々脈は急角度に南に折れて而かも著しく低下する、廸化からトルハンに至る車輛道路の交叉する地點に於て特にそれが著しい。此交叉點に於て通路は餘り高くない二線の山脈(一は天山々脈の延長、一は其支脈)を越えてゐる、兩峠とも其高さは四百乃至五百呎以內である。此邊の山脈は植物が頗る貧弱である。（註）

註　レゲリ、帝國ロシヤ地學協會々報一八八一年第十七巻二〇八頁。

トルハンー廸化間通路が天山々脈に交叉する所より、山脈は西に折れて再び其高さを增してゐる、これは、山脈北斜面に幾多の大河流を發出せしめて、アヤルノル湖の河系を作らしめてゐるのも此山脈であると云ふ一事からしても相像が出來る。天山々脈は各所に於て樣々の名稱を持ち、ヂエルキス、ウベク、ムンケツ、ボグド、ザフ・ケリヅイなど呼ばれてゐる。アヤル・ノル湖の子午線上に於いて諸方に支脈を出してゐる、其一はボロホロ(タルキ、イレン・ハビルガン)と稱せられ、サイラム湖に向つて延び、エビ・ノル湖に入る諸川とカシ河及イリ河上流との分水嶺となつてゐる。（註）

註　ボロホロ山脈に就いては前に述べた。

其二はアルシヤン山及びアウラル山と呼ばれ、カシ河とクンゲス河との分水嶺をなしてゐる。

註　アルシヤン山及アウラル山に就ては既に述べた。

其三はナラト山脈で天山主脈の延長である。イリ河の上流諸川と、バグラチ・クリ湖に注ぐハドイク河水源との分水嶺となつてゐる。

ナラト山脈は對角線的方向を取り、北東から南西に高い山脈分岐點エシク・バシまで達してゐる。本山脈はブルチエワリスキイ氏の證する所によれば永久雪線には達してゐないが（註）

註　帝國ロシヤ地學協會々報一八七七年第十三巻「クリツヂより天山外のロブ・ノル湖まで」二六九頁。

兎に角未開な全然アルプス的性質を帶びてゐる。個々の嶺峰の頂點、其嶮しい側傍、殊に山頂附近は到る所斷崖絶壁が峙つてゐて、幅の狹い暗い狹谷を形づくつてゐる。其稍々下方には高山草原が展開して居り、其より下つた所の北斜面はエゾ松林が島のやうに散在してゐる、併し南斜面は（天山々系は何の山もさうであるが）全く無林地帶である。ブルヂエワリスキイ氏は高さ九、八〇〇呎あるナラト峠によりて、天山越えを斷行したのであるが、上り坂は相當嶮しく駱駝も相當苦しんでゐる。がユルドザ側への下り途は緩斜面で、北斜面はブルヂエワリスキイ氏の通過した九月半ばに既に輕少の雪があつたが南斜面には雪はない。（註）

註　イビド、二六九頁。

此峠より東にナラト山脈を越える峠がある、アドン・クル（レゲリ氏はオデインクルと云ふ）と呼ばれて、クンゲス河谷からユルドウズに通じてゐる。此峠をレゲリ氏は何等の困難を感ぜず通過したが、其高さを九千乃至九千五百呎と斷定してゐる。（註）

註　帝國ロシヤ地學協會々報一八八一年、第十七卷、二〇四頁。

ナラト峠より西方にダギト峠があつて、これはボリショイ・ユルドザ溪谷に至るものである。此峠を通過したラリオノフ氏は此高さを一一、二七〇呎と斷定してゐる。峠は特に嶮しいものではない。ダギト峠の西方一二露里の地點に、ラリオノフ氏の說によれば、ナラト山脈を橫斷する別の通路がある、ハルブル峠と云ひダギト峠よりも遙かに難路で、大荷物を携行しては通過全く不可能である。

註　コステンコ、トルケスタン地方、第二卷二二五頁。

支脈分岐點のエシク・バシより天山主脈は著く高さを增し、ハンテングリ連山の密集す所までは非常な高さを有し、群山密集點に於て天山は其高さ最高に達し、通過全く不可能となるである。卽ち當地點に於て天山は全部嘗に雪に覆はれるばかりでなく、氷塊に覆はれてゐる、ムス・タグ（氷山の稱）あるのも全くこれがためである。此山に通じてゐる通路は只一筋で隊商が通行はしてゐるが非常な難路である。此通路はムザルト（「ムス」とは氷、「アルト」は峠の意）と稱されてゐる、これに通じてゐる小徑は或は嶮岨な坂を上り、或は氷堆、氷山を越え、或は氷原を過ぎてゐるのである。此通路はイリ上流地方と東部トルケスタンのアクス市との連絡に當るものである。ムザルト峠と之に通じてゐるテケサ河谷からアクス市に至る通路の一部、此通路の北麓から氷山の下り坂に至る間は詳細に調査測量されてある。（註）

註　トルケスタン地方第一卷五七―六七夏參照。

ムザルト通路はイリ河谷とカシガリヤとの唯一の交通路たるが故に支那は、一八八一年ペテルブルグ條約締結に當りても此通路が自國勢力下に殘さるゝや百方これ努めたのである。現在の國境は此通路よりも西方、ナルインコル上流に沿つてゐる。ムザルト狹谷の通過は駄馬以外不可能で、伊寧よりアクスに至る隊商は狹谷中央部に於て、氷中に設けた階段を繩によりて下らなければならない。併し繩によりて馬を引上けることは決して容易なことではないので、アクスよりイリ河谷に歸る隊商はウチ・トルバンからベデリ峠を越えてカラコル市に出る迂廻路をとらねばならない。ムザルト峠以東エシク・バシの山脈分岐點までの間、ムスタグ山脈は隊商の通過が出來ないばかりか、個人騎乘者も通過不可能である。

ムスタグ山脈の北斜面には頗る豐富に林が茂つてゐる、此の林は各狹谷にも茂つてゐて北向き斜面を覆つてゐる。狹谷の底部にはエゾ松以外に濶葉樹林があつて、白楊、サルヤナギ、ナナカマド、ヤマナラシなどを出し、更に伏牛花（Berberis）、忍冬（danicera）、野バラ（Rosa canina）、サンザシ（Gataegus oxyacanta）、などの灌木もある。ムザルト狹谷には狹谷の北口附近には白樺さへありて、小さな森をなしてゐる。

第四章　地表の水文學的研究

チユンガリヤ荒野は水の灌漑最も不良な地方であるが、之に尙ほ今日、鹽澤に圍まれてゐる若干の湖水がある、之等は何れも千水時代に存在したものである。名の知れてゐる湖水はウリユングル、バガノル、サイラム・ノル、エビノル、オルフ、バルクリ、ツウルクリなどである。これ等の中或るものは支流而かも大河流を有するものさへある。河流や湖水の方向から、チユンガリヤ荒野が東方から西方に傾斜を有し、此最低部はエビノル湖で海拔僅か七〇〇呎しかないことなどが知れる。尙ほ此湖水は嘗ては、アラロ・バルカシ河系に屬するアラクリと連結してゐたものである。吾人は湖水の研究を先にし、次いでチユンガリヤ河流の研究に移る豫定である。

(甲)　湖　沼

一、ウリユングル

此湖は長さ五〇露里、廣さ二五露里、周圍一五〇露里に達してゐる。ウリユングルの東及南兩湖岸は殆ど全部葦に覆はれて、水深は岸を距るゝに從つて次第に深くなつてゐる、次第にではあるが岸から五〇「サージエン」距れた處は早くも深さ五―七呎あるから、餘り徐々と云ふ方でもない。北西方の湖岸は非常に嶮しく高い。南方及南西方の土地は湖面に向つて陷沒して居り、サルブルチン連山東端の南湖岸に接した地面も同樣である所から推して、ウリユングル湖中央部の深さは相當なものと考へられる、殊に北西方の高い湖岸に接した部分が最も深いものと想像される。

ウリユングル湖の水は僅かな鹽分を含んでゐるが、而かもこれには恐ろしく澤山の淡水魚が棲んでゐる、鱸、「ウグヒ」の類、鮒、鯉の類、殊に「チヤバク」と稱する鯉の一種が多い。以上の魚類の外此湖水には夥しい數の淡水軟體動物が棲息してゐる。此湖水の動物狀況は特殊なものの多いことが特徵である。雁、鴨、黑鴨、大「バン」、鷗、海鷲、ペリカン、鷺などこれに居る。

註　ペフツオフ氏、チユンガリヤ概要、一八、一九頁。

湖水は一、六〇〇呎の地點に位置してゐる。(註)

註　ブルヂエワリスキイ氏、第三回旅行、一三頁。ペフツオフ氏は一、七四〇呎と云ひ、ラフアイロフ氏は一、五三〇呎と云つてゐる。

此湖水の特に著しい特徵は、高くはないが非常に狹い地段で、これが此湖水の北東隅とチヨルタイ・イルツシ河との境をなし、これによつてオビ河流との連絡を絕つてゐるのである。(註)

註　イビド、一四頁。

此の湖水は東方より唯一のウルング河を受けてゐる。

二、ハガ・ノル

バガノル湖はウリユングル湖の南東約一五露里の地點にある。併し兩者の間は沼澤や葦に蔽はれては居るが、互に連絡はない。(註)

註　ペフツオフ氏、チユンガリリヤ概要、一三頁。

只之によつて嘗ては兩者相合してゐたものであることを思はせてゐる。(註)

註　ブルヂエワリスキイ氏、第三回旅行、一四頁。

湖水の形は楕圓形で、最大軸の長さは約一二露里、最小約四露里である。湖岸は砂地で、植物に惠まれず平坦で、附近の狀況は單調にして寂寞たるものである。水が度外に鹽辛い所から、これには魚も棲まず、又湖面には泳ぐ鳥も居らず、水邊に長脛鳥も來ない。

註　ペフツオフ氏、チユンガリヤ概要、一三頁。

三、サイラム・ノル湖

湖は全山間湖で、ボロホロ山脈の北方にあり、同支脈に圍まれてゐるが、東方部だけは山脈が低下してゐるので、湖岸はヂュンガリヤ荒野に連絡してゐる。サイラムノル湖の南東岸に沿ひ郵便（ボグドハンスカヤ）道路があり、イリ河谷から烏蘇及び更に延びて廸化に達するものである。湖水の位置はタルキン峠の絶頂より僅か低い所にある。其高さは海拔七、二〇〇呎。（註）

註　ロマノフスキイ氏及ムシケトフ氏の作製に係る、トルケスタン軍管區の地圖參照。

で、周圍は六〇露里に達してゐる。水は淡水で全く透明である。これが即ちサイラムノル―清き水―と云ふカルムイク語の名の出た所以なのである。湖岸は平坦で眼を遮るものはない。湖底は固く大粒の砂地である。魚類は棲んでゐない。湖は相當深いものと想像される。（註）

註　コステンコ氏、トルケスタン地方、第一卷、五四頁。

此湖に就いて土民は無稽な謎信を懷いてゐる、それは湖水が風のない全く靜かな日に荒れ出すことがある、これは湖底深く隱れてゐる怪物が此時に目を醒ますためである、と云ふのである。（註）

註　ヤキンブ氏、ヂュンガリヤ及東部トルケスタン記、ペテルブルグ、一八二九年、一〇四頁。

湖水には入る河も出る河もない

四、エビ・ノル

此湖水は（ボロホロ山脈の北方烏蘇市に至るまでの地域は全部同じであるが）我が露軍が元クリヂンスキイ汗國を占領して後間もなく我が露國地形學者によつて測量し上げたのである、湖水は楕圓形で、其大軸は北西方より南東に向けられ、軸の長さは約五五露里、幅は二五露里ある。湖水の南東半全部は、約六露里程湖水を繞んでゐる沼地に接してゐる。沼地はキイツイン河の河流に沿ひ北方へ烏蘇市まで、南方哨營道路まで切々に連續してゐる。沼地は砂地と交錯し、屢々通過出來ない葦で包まれ、砂地は雜多な砂漠の灌木、グレベンシチク（ギョリユウ屬 Tamarix）、サクサウル（Anthasphythum Ammodendron）などで埋められてゐる。此沼地と砂地とは、西よりエビノル湖に注ぐボロトラ河の下流地區をも埋めてゐる。湖水の北西岸には何ものもなく、サクサウルのやうな灌木以外には植物は一物もない。ヂュンガリヤ盆地の最低部は此湖で海拔僅か七〇〇呎である。水は無暗に鹽辛く飲料にならない。湖岸はなだらかで淺く、その土質は鹽澤地のそれである。湖面には雁、鴨、鵠など多いが、水中には魚ば居ない。（註）

註　一八七五年本湖を測量したラリオノフ氏の研究資料による。

五、アヤル・ノル（別にテリ・ノル）

此湖は、一八七一年我が露國がクリヂン・スウルタンを占領して後、間もなく天山北方地區の調査に從事した我が露國測量隊によつて最も精密に測定された。湖水は周圍約一二〇露里あり、東方よりチン・シユイ・チヤ、マナスゴルの二大河が之に注いでゐる、兩河共天山北斜面より發してゐるが、其詳細は殆ど不明である。

湖中の水は甚だ鹽辛く使用出來ない。湖岸は全荒廢してゐる。アヤノル湖とオルフ湖との間に不毛無人の大砂漠が横はつてゐる。兩湖間の距離はトルゴウトの證明する所によれば四日路行程である。

六、オルフ湖

註　ペフツオフ氏の土民聽取による。

此湖は別にアイリク・ノルとも呼ばれてゐる。其位置は北緯四六・五度、ブルコフを距る東經五五・五度である。湖水の周圍は約一〇露里、水は全く飲料に適しない。湖水よりは沈澱鹽を採集する。湖岸は荒廢してゐる。湖水より東方餘り遠くない所にトルゴウト部落がある。

オルフ湖には北方からナムイン・ゴル河（後章同河記事參照）が注いでゐる。

七、バルクリ湖

地形學的に研究されたのではなく、一八七八年バルクリ高原を旅行したブルチエワリスキイ氏の行つて聽取に基いて判明したものだけを述べる。此の湖は鎭西市に近き、砂漠臺地の西端にある、砂漠臺地は、天山山脈から分れて砂漠臺地の北方を境するメチン・オル山脈によつて形成されてゐる。此臺地には尙ほ別の湖がある。一八七六年ボタニン氏は鎭西市よりウリヤンスタイに旅した際これを調査してゐる。それによると、此臺地は元此にあつた湖の底部だつたもので、其後湖が僅か二個の小さな水溜りを殘して干水して了つたものに相違ない、と云ふのである。バルクリ湖は土民の言によれば周圍約五〇露里を有し、湖岸は溶け易い鹽澤であり、湖水の中央部には美事な沈澱鹽がある。此湖水に東方から（註）

註　ブルチエワリスキイ氏は「西方から」と記してゐるが、恐らく誤なるべし。

イルドイへと稱する小流が注いでゐる。バルクリ臺地の土質は粘土質で、一部は鹽沼地であるが、全體としては豐饒な地質である。尙ほ當地方には到る處優秀な牧場が多く、ユルドウゾフ低地に見るが如く中央天山の優良地區を悉く占領してゐる。牧畜の外バルクリ臺地は其高さ著し（五、〇〇〇呎）いのにも拘らず、大麥、小麥、黍其他が豐かに産出する。（註）

註　ブルチエワリスキイ氏第三回旅行、五九―六〇頁。

八、ツウルクリ湖

此湖は低い嶺の僅かな橫斷脈でバルクリ盆地と境されてゐる盆地にある。

註　ボタニン氏、北西蒙古誌、一七三頁。

此湖水は西方より東方に延びた細長い形を有し、其長さ約六露里、水は鹽分を含み、湖岸には食料として使用出來る鹽の沈澱がある。湖畔には「ドイリスン」（註）と云ふ植物が繁茂してゐる。湖水の外廓地區にもドイリスン密生し、粘土鹽沼地には鹽沼地灌木が生長してゐる。此地帶の外廓は堅い砂地で、砂地は砂利に覆はれたまゝ湖水を圍繞してゐる岩山まで連續してゐる。

註　「ドイリスン」とは蒙古語であるが、此植物はトルケスタン地方では「チイ」（Lasiagrostis splendens）と呼ばれてゐる。

註　ボタニン氏、北西蒙古誌、一七四頁。

（乙）河　川

一、チヨルヌイ・イルトウイシ（カラ・イルトウイシ）。

チヨルヌイ・イルトウイシ河はヂユンガリヤ荒野の最北部を洗ひ、アルタイ山系とタルバガタイやサウルなどの山脈との境をなしてゐる。チヨルヌイ・イルトウイシと云ふ名稱（キルギス語ではカラ・イルトウイシ、ウリヤンハイ語ではハラ・エビン）は、同河がザイサン湖に注ぐまでの全流域を通じて使用されてゐる。右岸の支流アルカベク河の合する地點以西は我が露國領土内を流れてゐる。

上流。本河流は其源を蒙古アルタイの南西斜面、ダイン・グリ湖附近に發し、其水源は右岸の大支流クラン河の水源に接し、前記蒙古アルタイ山脈中の嶮山中に橫たはつてゐる。所謂上流は左方に、自己とヂヨルトイ河との間に聳えるアツヅイバイと云ふ高い山脈があり、右方にはケンダイツイ、トイ・ツグシ（本河流域には溫泉がある）クイリケム、テリケムなどの各河流がカラ・イルチシ河上流に注いでゐる。最後の二流は合して一河床をなして居る。此等河川流域にバイル・マングダイ政廳のウリヤンハン夏期營所が設置されてある。アツヅイクバイ山脈からはチヨルヌイ・イルチシ上流に注ぐ目星しい河流は先づない。アツヅイクバイより下流に於ては、クルムツウ、バラ・イルツイス、チエベツイ、クツドチユルツウブルイクなどの諸流がチヨルヌイ・イルトウイシ上流に注いでゐる、此中後者の二流は相當の大河で、最初のクルムツウ河は水源が二つあり、一はサン・タス（東方水源）一はアクサラ（西方水源）である。サンタス河にはサクサイ河地方（殊に左よりサ

クサイ河に注ぐサル・ゴビ河水源）の山路に出る通路が沿つてゐる。アクサラ河には通路は沿つてゐない。クルムツウ河へは、右方よりヂャマツイ河を併せてゐるヂョルツイ河が右方より合流してゐる。此クルムツウ河谷から、コクタシウン峠及ツウルゲニ峠を越えて、ヂョルツイ河谷に出る通路がある。バラ・イルチシ河の水源にはチャガン・ギリ山が聳えてゐる。此地方にチャカバイ（チャンツイケイ）族のギルギス・キレイ人の夏期營所があり、尙ほ此附近に溫泉と冷泉とがある。ヂエベツイ河は右方よりクイヤツイ・サイと云ふ水源が合してゐる。クルムツウ河の水源にはタブイン・ベリチルと云ふ山があり、此にバラ・イルチシ河流から上り來るキレイ人の夏期營所がある、此地からは東方、右岸の大支流ク・イルチシ河（ボタニン氏、北西蒙古誌、第一卷六五―六六）となるべきコイルツイ河（ウリヤンハイ語でハイルツイ）溪谷に出られる。カラ・イルチシ河は上流に於て其幅一〇「サジエニ」、水勢は早く、兩岸は岩多く、水深は相當深い。併し河流に接近することは頗る困難である。（註）

註　ボグダノフ氏手記。

カラ・イルチシ河上流は諸支流を併せて河勢を增して後山を離れ、左岸唯一の大支流ク・イルツイシを合して急角度に西に方向を轉ずる。

此より河流は荒野獨特の狀況を呈してゐる。

チヨルヌイ・イルトウイシ河下流。

チョルヌイ・イルトウイシ河はク・イルツイシ河を合してからヂエベツイ山に至るまで全部嶮しい岩石の多い河岸の間を流れてゐる。其狹隘な河谷には草木、山林共に殆どない。河流の左岸に、これを離るゝこと約五露里の地點に於ては山中に、コブトよりウリユングル湖に至る通路がある。河岸は河流に面する方は嶮崖であるが、南方に向つて緩やかな傾斜で延び、ウリユングル湖に向つて次第に低下してゐる一の高原をなしてゐる。右方はヂエベツイ山までの間に於てザクスイ、ココ・ブラクと云ふのが三流、サルイ・ブラクなどの溪流がカラ・イルチシに合するのであるが、何れも涸渇してゐて水はない。ココ・ブラクとサルイ・ブラクとの河流はヂエベツイ山を西方から取卷いてゐる。ヂエベツイ山を離れて後チョルヌイ・イルトウイシ河谷は西方に向つて其幅廣まり、右岸の支流クラン溪谷と合してゐる。ヂエベツイ山の三〇露里西方に於て、カラ・イルチシ河の右岸に屹然聳えてゐる四方斷崖の一廣場がある。長さ三露里幅二露里、遠方より打眺めたる所はさながら城塞である、ドルブヂンと稱せられて、全面蒙古人の墓に埋められ、木製の鎗や釼や偶像に塞がれてゐる。

ヂエベツイ山の西方五八露里の地點に於てカライルチシ河は、ウリユング湖に非常に接近して、其間の地峽の幅は總計約三露里である。一八八三年此に實施された水準測量の結果によれば、チョルヌイ・イルチシ河の水準はウラングル湖のそれよりも二七・五呎高い。（註）

註　ボグダノフ氏手記。

尙ほ同水準測量の結果、ウリユングル湖とチョルヌイ・イルトウイシとの間にはミロシニチエンコ氏の思惟せるが如き、地下連絡は全然ないことが判明した。（註）

註　ロシヤ地學協會々報、一八七四年第一卷。

チョルヌイ・イルトウイシ河は右岸に入る諸支流によつて河勢を增し、コルヂル河口よりは頓に水量增加し、小舟（吃水約二尺）なれば一ケ年中の半期間は航行出來る。此附近の平均水深は凡そ一〇呎で。河幅は五〇乃至八〇サージエンの間を上下してゐる。一八七三年の夏、河水が其平均水準に達した時、ミロシニチエンコ氏の測量した所によれば、一秒間三七四立方米であつた。（註）

註　レクリユ氏、世界地理第六卷、五〇六頁。

カルヂル河と合して後チョルヌイ・イルトウイシ河に注ぐ支流はない、寧ろ反對に其下流、ザイザン湖に注ぐ附近に於て

は、多くの分流を出してゐる。此等分流の間の地區は葦で埋められてゐるが、此葦はキルギスに取り冬期に於ける最上の遮蔽物である。アクテユベ天然境(コルヂル河口の反對側)上流の河畔一體はサルヤナギの若木に埋められてゐる、此若木も亦冬期遊牧民を烈風より防ぐ絶好の隱蔽物である。只チョルヌイ・イルトウイシ河谷の、東方に向つて僅かに隆起を示してゐる部分は例外で、全く不毛の砂地で、サウル山脈方向卽ち南に向つては砂地で、アルタイの方向卽ち北方に向つては粘土を交へた砂地が延びてゐる。(註)

計　ウエニユコフ氏著アジヤ國境梗概二四五頁。

チョルヌイ・イルトウイシの水源よりザイサン湖口に至る全延長は五二五露里である。チョルヌイ・イルトウイシ河は其下流に於ては吃水の淺い舟の航行に適してゐるが、湖水へは淺洲に遮られて出られない。カブイ河口より上流に於てはチョルヌイ・イルトウイシは淺瀨によりて容易に渡河することが出來る。

チョルヌイ・イルチシ河諸支流。

(イ)　左　側　支　流

ク・イルトウイシ。(註)

註　ボタニン氏は其著竝其れに附けた附圖に此河をタ・イルトウイスと書いて居り、カラ・イルトウイシもカラ・イルトウイスと時々書いてゐる。

又はホ・エビンはカラ・イルトウイシ河左岸支流の唯一のものである。此水源は二ケ所で、東方のものはヂヤングイズ・アガチ(キルギス語で獨立樹の意、峠は蒙古語ではハブツアガン・モドと稱へて、キルギスの峠の意を表してゐる)の山路に源を發し、西方のものは二溪流から成つてゐるが、其上流には何等の通路もない。東西兩水源を合して後西方六露里の下流にカラヌル・アスと稱する峠がある、此にウリヤンハイ人(コク・ムンチヤク天然境界の)の夏期營所がある。(註)

註　ボタニン氏、北西蒙古誌第一卷六七頁。

ラフアイロフ氏の地圖によれば、ク・イルトウイシ河へは左方よりコク・モゴイ、トウルン、カラ・トウンクなどの諸支流が合し、カラ・トウンクは數流の小流を集めたもので、その流れはチョルヌイ・イルトウイシ河の一般方向と同一方向に向いてゐる。右方よりク・イルトウイシ河に合するものはハイルツイと稱する相當の河流で、二水源を合せたもので、西方水源をイヘ・ハイルツイと云ひ、東方水源をナルイン・ハイルツイと云ふ。ハイルツイ河は右にテユルグン、ツアガン・サラの二流を、左にカシキユルツイ・クンデツイ、及クストンの二流を夫々合してゐる。ハイルツイ河の外ク・イルトウイシ河には右よりスブツ(獺の河)及ブグル・ブラクと稱する支流のあるクルツの二流が注いでゐる。ク・イルトウイシ河とカラ・イルチ河との合流三角點に高峰イヘ・デガンデリが聳えてゐる。ズブツ及クルツ兩河畔にはキルギスの耕地があり、サルヤナギや白樺など繁茂してゐる。

(ロ)　右　側　支　流

(一)、クラン。クラン河はウルモガイツイ峠附近に源を發し、其上流に於ては北方より南方への方向に進み、蒙古アルタイ山脈に竝行してゐるキヅイル・アドイル山脈の嶺峰を越えて後、俄かに西轉して其まゝカラ・イルトウイシに注いでゐる。クラン河は其上流部に於て全然溪流で、覆ひかゝる兩岸の巖山に著しく狹められ、河水は悉く一河床を流れてゐる、從つて淺瀨と雖水勢が速く强いので之を渡涉することは不可能である。河谷の幅は半露里を越えてゐない、併し河畔にはボプラや白樺の森が連綿としてゐる。白樺は大抵內部が腐朽してゐる爲、當地方の白樺は樹頭のないのが多く、其上枝も風に奪はれて全くない。故に建築用材としては使用出來ない。(註)

註　イビド、一二四頁。

片麻岩の峰頂ツルタより河流が西方に流れを轉ずるまでの中流部に於てはクランの流れは緩慢で、河谷は廣く、數流の分

流に分れ淺瀨を渡渉することが出來る。此附近には遊牧民の耕地があるが、それに就いては後に農産物の章に於て詳述する。

キヅイル●アドイル連山を離れた下流々域に於ては、クランの兩岸にはポプラ、白樺、ヤマナラシ、「ボヤルカ」などの濶葉樹林が連續してゐる。河幅約一〇サージエン、深さ著しからず、到る處淺瀨は渡渉可能、河底は大部分砂地、水勢急速ではない。淵を形成してゐる所には魚類多く、殊にヤジと稱する鯉科の一種が取れる。

クラン河谷は山を離れて河口に至るまで草木はなく岩石が多い。牧草地區は河畔にだけ見られる。河流が西方に轉向すると共に耕地は見られない。下流々域には之に適する地區がないからである。（註）

註　タラン河下流に關する資料は、同地に於て事實之を測量し之が記錄を作つた地形學者ボグダノフ氏の水源記事中より拔萃した。

クウル河は右側よりケメルチク河を合してゐるが、後者は山間を出ると砂利中に沒して、涸濁した河床のみがクランに合してゐる。此の外にクラン河口眞近に於てクウルツ河と云ふのが右方より注いでゐる。

クウルトウ河は有力な河流で、クウルトウと云ふ名稱を持つのは、同河が山間を出でゝ後の十五露里に亘る下流々域だけで、中流はアラガク、上流はアシチ●クルツと稱へられてゐる。クウルツの下流一帶はウリヤンハイ人の耕地で占められてゐるが、これがため水を用水に引込むので河流の水は屢涸れる。耕地には黍が作られる。

アラガク河左岸にある墓地チクの東方に、草の多い鹽澤があり、鹽澤地の中央には長さ約五露里幅一露里以上のクルツ●トウズと稱する鹽水湖がある。此湖の鹽は底に厚い層を成してゐて頗る良質のものである。湖岸は溶け易い。西方、キズイル●ヂャル山脈の後方に數個の小湖水がある。併し鹽は少く而かも苦味がある。（註）

註　クウルトウに關する資料はボグダノフ氏手記より拔萃。

（二）、**ブルチユム**。ブルチユム河は蒙古アルタイ最西端より發出し、其上流はカナスと呼ばれてゐる、此口はカナス河が貫流してゐる細長い湖水にも附けられてゐる。併し此湖を出でて後の河はブルチユムと稱へられてゐる。カナス湖はミロシニチエンコ氏の測定した所によると四、三七一呎の高さを持つてゐる。四方山に圍まれ、西方湖岸に於ては山は直接其斷崖を湖面に落してゐる。東方湖岸はカナス山に境されてゐるが餘程なだらかである。南方岸は森林に塡められてゐるが、此森林は同じくカナスと呼ばれる河の溪谷にも及んでゐる、此溪谷はカナス山とエメガイツイ山とを以て形成されたものである。（註）

註　ミロシニチエンコ氏一八八二年アルタイ山中に於ける天文研究、サンクトペテルブルグ、一八八三年、一三頁。

ブルチユム河は山中にありては南東に流れるけれども、二流のキヅイル●タス山脈を貫流した後は其方向を南西に換へ、其まゝ平野を流れてゐるカラ●イルチシ河に注いでゐる。流勢躍然たる急流で、平均河幅約一五サージエニ、山中にありては一河床中を流るが、平野に出でゝは二ケ所に於て分流し、カラ●イルトウイシ河に合する際再び一河床に合してゐる。水勢は急で深さも相當あるので、分流に分れる場所以外には淺瀨は殆どない。分流中の淺瀨にしても相當の危險があり渡渉は相當の困難を免れない。平野に於てはブルムチ河は白樺、白楊、エゾウハミザクラ、サルヤナギなどの若木が、廣さ約三露里にも亘つて密生してゐる中を流れてゐる。河の長さは山嶺を離れてから三七露里ある。ブルチユム河の左右兩側にはヂンギリ、ヂズグンなどの密生してゐる砂山の多い地區がある。ブルチユム河々口眞際にはヂヤドイケ族キルギスの冬營所がある。（註）

註　ボグダノフ氏手記。

ブルチユム河の左側支流はスムダイルイク、ヂクベレン、コシ●ソムで、右側支流はクルグタンである。（註）

註　ボタニン氏著書に添へられたラフアイロフの地圖。

ブルチユム河よりクウルツ河に至るまでの地區に於てはキヅイル●タス山中からアク●ス、コスツイク、テレクツイなどの諸流が發出してゐる、併し何れも河水のあるのは其初めだけで、ブルチユムとクウルツ兩河の間にある砂原に於ては水の涸れた河床を曝してゐる。

註　ボグダノフ氏、手記。

(三)、カバ河。 カバ河は、山脈分岐點クイツンの南斜面に源を發するカラ・カバとアク・カバとの二水源を合せたものである。カラ・カバは左岸にヂャマン・カバとアラサン・カバとの二大支流を合して流勢を張り、アク・カバは左岸に優勢なナルイン・カバと云ふ支流を合せて水勢を増してゐる。これ等の各河谷、正確に云へば狹谷は高峰に取卷かれ、混淆林で塡められてゐる。アク・ガバは其水量から云つても亦其方向から云つても本流と見做すべきもので、其水勢は頗る急速である。アク・カバの水は濁つた、乳綠色を呈してゐるので、何人にも直ちに、これが氷河から發してゐることを首肯出來る。併し此地區を測量した地形學者の證明する所によれば、永久雪の雪融は嶺峰の絕頂以外にはないが、アク・カバの奧狹谷には雪も氷もない。只氾濫原（春の水に包まれる場所）白い石英の碎華や少量ながら綠砂などの見當る所を以てすれば、アク・カバ河の水の濁つてゐることや乳綠色を呈してゐるのは、水邊に臨んで絕壁を成してゐる板岩が多量の石英を含んで居り、これを急流で崩すことから生ずるものと考へられる。（註）

註　ミロシニチエンコ氏、アルタイの天文研究、サンクトペテルブルグ、一八八三年、一二一－一二三頁。

アク河やカラ・カバ河などを挾んでゐる山嶺は何れも密生せる濶葉樹林に被はれてゐる。

カナス河及カナス湖とアク・カバとの間にはエメガイツイ高嶺が聳えてゐる、此頂上には雪が斑點模樣を描き出してゐる。（註）

註　ミロシニテエンコ氏、イビト氏、一二一頁。

カバ河右方にはアク河とカラ・カバ河との合流點から直ちに、東より西へ向つて、ウシ・クウルムンクルと云ふ、高さ海拔八、九〇〇呎を有し班の雪模樣を描いてゐる高峰の山脈が連らなつてゐる。（註）

註　イビド、一四頁。

この山脈によつてベレゼカ河とカラ・カバ河とが夫々分たれてゐる。

カバ河は山間を出て後五〇露里以上平原を流れてゐるが、流域は白楊、サルヤナギ、ヤマナラシ、ナナカマド、シモツケ草などの濶葉樹の密生した森林に占められてゐる。一八八三年カバ河に行つたベフッオフ氏の言によれば、此河は山嶺を離るゝと同時に下流域に於て幾多の分流に分れ、山嶺を距るに從つて其數を增し、或る點の如き八流の多きに及んでゐる。其にも拘らず淺瀨渡涉は困難で、ベフツオフ氏の證明する所によれば、春は全然渡涉不可能である。カバ兩岸地區は荒廢せる砂地である。

(四)、ベレゼク河。 此河はウシ・クルムンケルと云つて東より西に連らなつてゐる高峰山脈南斜面より發出する多くの小流溪流から成つてゐる。これ等溪流や小流は前記山脈を離れて後、アク・ヂャイリャウと云ふ、南方をカラ・チョク連山に遮られてゐる廣大な河谷を造つてゐる（イビド、一八－二四頁）。此天然境界の位置は四、四三四呎の高さにある。河谷を取卷いてゐる山上には濶葉樹林が美しく配置されてあり、山其ものは綠色を帶びた板岩からなつてゐる。河谷にはチエルノイルチシ部落の我が露國キルギスの夏期營舍が可成りある。

カラ・チョク山の狹谷を出でゝ、ベレゼク河を成す各溪流は遂に一河床に合してゐる。其後ベレゼク河は平原に出る前に、コブイル・タス（石橋）と稱される狹い谷を橫斷してゐる。砂地の荒野にあつてはベレゼク河は、山嶺から河口までの全流域を埋めてゐる美事な植物のため極めて愉快な感じを與へてゐる。河流の兩岸には白楊、ヤマナラシ、サルヤナギなどの密生してゐて通過出來ない森林が連續してゐる。然るに夥しい蚊のために。チョルヌイ・イルトウイシ河の他の支流と同樣此河も夏期の宿營を許さない。ベレゼク河は其河口に於て水が頗る淺い、而し之を渡涉することは不可能である、それは河底の砂が泥深く、ために二「サージエン」の杭を上部まで打込むのに特に大努力を要する程であるためである。

平野に於ける河谷の幅は餘り著しからず、一露里を出でない。河流全流域の兩岸には廣大な流砂地帶が展開してゐる、此流砂は河口より北方に進むに從つて深まり、アルタイ山麓附近に至りて相當高い砂山を形成してゐる。右岸の砂地段丘は、

ベレゼク河の發出してゐる狹谷の約八露里手前に於て終息し、これより砂地は北西方に折れ、其まゝアルタイ前山まで進み、次いでアルタイに竝行してアルカベク河に達してゐる。左岸の砂地に前記狹谷の一〇露里前方に於て終息し、幅約五露里の地帶を南東に延べてゐる。

ベレゼク河谷にはキルギスの各營所があり、其附近には小麥、豌豆、燕麥などの畑があり、耕地は河流より設けた灌漑渠を以て灌漑されてゐる。砂地を通過して後のベレゼリ河谷は土質が植物生長には適しないが、山麓までの間優良な牧場である。（註）

註　イビド、一六―一七。

（五）、アルカベク。アルカベク河はベレゼク河と同樣にウシ●クルムンケル山脈南斜面に源を發し、最初の間はアク●ジエイリヤウ低地を走つてゐる。アク●ジエイリヤウ低地の南方境界をなし、我が露國と支那との國境線をなしてゐる山脈を過ぎて、アルベク河は平野に出でて、チョルヌイ●イルトウイシ河に合するまで延長六〇露里以上露支兩國々境となつてゐる。ベレゼク、カバ、ブウルチユムなどゝ同樣河流全部白楊、ヤマナラシなどの茂つてゐる狹い地帶を以て塡められてゐる。右岸の殆ど全體河口から山麓までキルギスの耕地が展開されてある、これが灌漑のため河流から多くの灌漑渠が設けてある。これで即ちアルカベク河の下流域が夏期著しく水量を減じて、秋には全く涸渇し終る理由が判るのである。（註）

註　イビド、一六。

ベフッオフ氏の言によれば、秋には河水は山間を出でゝ後約二〇露里の間にしかなく、其後は河床所々に相當距離を置いて出來てゐる穴の中にだけしかない。然るに此に最も驚くべき事實は、此の穴の中に魚族の棲息してゐることで、此の事實は、地下に於て水が連絡し、甲の穴より乙の穴に流れて穴中の水を更新してゐることを證するものである。アルカベク河谷は廣くはないが、之には多くのキルギスの天幕がある。アルタベク河とベレゼク河との間、イルトウイシ河とアルタイ山との間の地域は全部不毛の砂漠で、イルトウイシ河に接近した地區には未だ枯れ草が稀には見當るが、北方に進むに從ひ砂は次第に深まり、植物は貧弱となるのである。何一つ生えてゐない鹽澤粘土の地帶は各所に見出される。（註）

註　イビド、一六頁。

（六）、コルヂル。コルヂル河はチヨルヌイ●イルトウイシ河支流の中最も下流にあるもので、全然我が露國領土内を流れてゐる。コルゲル河はマルカ●クリと稱する山間の湖から發出してゐるが、此湖は高さ四、六一一呎の盆地にある。盆地は一方クルチユム連山の支脈に圍まれ、他の一はアズイ●モタバイ、ココタイ●ゲゼニなどの嶺峰によつて取卷かれてゐる。湖水の形狀は卵の最大面を切つたのと同じで、其北東端から南西端までの最大延長は三五露里で、最大の幅は一五露里ある。

湖水の周圍は七五―八〇露里以内である。南東湖岸に聳ゆる嶺峰は湖面より高さ二、九〇〇呎である、故に其絕對高度は七、五〇〇呎である。山嶺は湖水に接近してゐて、濶葉樹林や針葉樹林に埋められた嶮しい斜面を水面に落してゐる。湖水と山との中間地區は甚だ狹く、多くは泥濘の沼地で、倒木に塞がれてゐる。これがためにキルギスは決して此地で遊牧しない。此湖岸に通じてある途は、單獨騎馬用（危險はあるが）の小徑だけである。湖の北西岸を塞いでゐるクルチユム山脈の支脈は、湖水突出してゐる部分は所々で全部ではないが、突出してゐる部分は嶮しく高い。湖の南西端附近に於ては山嶺は稍々後退して席を廣い河谷に讓つてゐる。此には森林は比較的少ない。落葉松とエゾ松林は各所に見當るが、白楊、ヤマナラシ、サルヤナギ、白樺の林は河谷以外にはない。湖岸には好適地を選みてキレエフ種のキルギスの夏期營所がある。

湖には鮎料に屬する各種の魚が極めて豐富で、此魚漁に從事するものは、ブフタルマより秋期此に來る我が露國農民である。マルカ●クリ湖へは四方より多くの遊牧民通路が通じてゐる。其の中北方にアルタイ兵村（カトン●カラガイ低地にあり）からサルイム●サクツイ峠を越へて之に來るものがある。これは更に南に延びてカトン●カラガイとザイサンとの直接連絡路となるものである。（註）

註　イビド、一九—二〇頁。

コルヂル河はマルカ・クリ湖の南西端より發出し、チヨルヌイ・イルトウイシ河各支流と同様最初の間は山間を流れ、其後平原に出る。一八六三年ボタニン、ストルゼ兩氏がコルヂル河を訪れたのも此山間部である。（註）

註　一八六三年夏、カアル・ストルゼ氏並にグリゴリイ・ボタニン氏との、ザイサン湖及チヨルヌイ・イルトウイシ河河流地方への旅行は、マルカ・クリ湖及サルタウ山までのものであつた。帝國ロシヤ地學協會々報、一八六七年第一卷。

コルヂル河はマルカ・クリ湖より發出するが、右方より之に合するバラ・コルヂル（小コルヂルと區別してウリクン・コルヂル（大コルヂル）と呼ばれてゐる。ウリクン・コルヂルは其水源を發して以來恐ろしく狹い隘谷の中を、大石塊を躍り越え、異常な速力を以て流れてゐる。これに反してバラ・コルヂルは合流點の數露里前方に於て溪流の特徴を失ひ、合流點から一露里の地點に於ては爽快な綠に包まれた大草原を擁してゐる。兩コルヂル合流に當り河床は粘著性のものとなり流勢は衰退する。兩コルヂル河岸は楊柳、白楊、スグリ、エゾウハミザクラ、其他灌木が繁茂してゐる。バラ、ウリクン兩コルヂルの間に山は脈があり、其西端はバラ・コルヂル河に向つて低下し、東端はウリクン・コルヂルの上に懸崖を垂れてゐる。

合流河川を以て形成される盆地は、土地乾燥し、稀に低い灌木の生えてゐる平坦地區で、此の北方は右にウリクン・コルヂルを件つてゐる連山の末端で遮られ、二河流の合流點前方には古往耕地用灌漑用水が幾筋となく通ぜられてある。ウリクン・コルヂルには、バラ・コルヂとの合流點より半露里上流にカラ・オトケリと云ふ淺瀨があり、其れより上流は未開の接近し難い狹谷が水源湖まで續いてゐる。ウリクン・コルヂルはバラ・コルヂルと合して後狹隘な狹谷に入り、ボタニン氏の言によれば、此狹谷の後方に深い僅かな盆地があり、其後方に於てコルヂルは再び狹谷に入る。此狹谷を出でゝ初めてチヨルヌイ・イルトヴイシ河盆地に出ることが出來る。案内者の言によれば、コルヂル河は、ブコンバイ山最終の地段に於て瀧を出現するまで溪流を續けてゐる。瀧は相當高さがあり、春期遡行して來る「タイメン」（魚）も之を躍越え得ない、此季節キルギスは此「タイメン」の飛躍する所を捕へる。（註）

註　ボタニン、ストルゼ、帝國ロシヤ地學協會記錄、一八六七年第一卷、三九六—三九九頁。

コルヂルは其上半流の河幅は廣くなく、六—八サージエンである。平野に出づれば東方に、二流の灌漑大水道—現在では相當幅の河流—があり、西方には數流の小堀割がある。淺瀨を渡涉すると水嵩は馬の鞍褥に達する。主要水道は、兩岸に相當幅に密生した葦地帶を持つカラタル水道で、コルゲル河が山を離るゝと同時に始まりて南東に進み、アシ・ドアス小丘附近に於ては大曲線を描いてチヨルヌイ・イルトウイシに合し、此にコルチル山角洲を形成する。カラタルの長さは三〇乃至三五露里である。下流に於てはカラタルに並行して別の堀割があるが、其規模は遙かに小さい。兩岸には全距離に亘つてサルヤナギやロザと稱する蔓草の叢が生ひ茂つてゐる。

三角洲全面と、コルヂル以西の大部分とには、現在も尙ほ多くの耕作地と麥畠とがある。併し耕地の放擲されたもの、水道の涸渇したものは遙かに多く、これは、嘗ては當地に現在より遙かに勝れた穀物栽培が行はれてゐたことを證するものである。當地の農作法が原始的であるに拘らず、當地の收穫は頗る良好である。（註）

註　イビド、一四頁。

二、ウルングウ河

ウルングウ河はウリユンクル湖に注ぐ河の唯一のものである。ウルングウ河は蒙古アルタイの雪峰に源を發し、ブルグウニ河を水源とし全長實に四五〇露里。全體の方向は東北であるが、稍々殊に下流に於て北方に傾いてゐる。ウルングウ河は中流及下流に於ては全然ない。河床は地中深く喰ひ入り、爲にウルングウ河は恰も深い濠の中を流るゝかのやうである。此濠（下流約一五露里に亘る）の底部は附近の土地より約三〇〇—四〇〇呎低下してゐる。附近地帶はウルング下流に於ては際限のない多少高底のある平野で、東方に進むに從つて臺地、小山、巖丘などによつて波紋が描き出され、其より上流に於

ては蒙古アルタイの眞の山岳地方を現出してゐる。（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三旅行、一五頁。

ウルングウ河はチンギリ、ブルグニの二水源を合してなつてゐる。ブルグニも亦二源を合して成り、二源ともに合併後は東方に向つて流れてゐる。其際左より之に入るものにヂョルツイと云ふのがある、此河口に支那哨所エルツ・ベリチルがある。此哨所より下方に於て西方よりブルグニにテメルツイ河が合してゐる。テメルツイ河々口より下流に於てブルグウニ河畔に喇嘛教修道院がある。エルツ・ベリチル以西にアレクツイ・アスと呼ぶチンギリ渓谷に出る峠がある。此峠はテレクツイ河上流に通ずるもので、テレクツイ河はテンギリの中央水源で、東方水源はバガ・チンギリ又はキチ・チンギリ（小チンギリ）と稱せられ、これにウリヤンハイ條道院ダラマがある。大チンギリ又は西方チンギリは、ク・イルツイス上流と並行に東方より西方に流れ、其中間にサルイ・ゲリと云ふ大丘がある。サルイ・ゲリ山より東方のチンギリにチャンカン河が合してゐる。（註）

註　ボタミン、北西蒙古誌、五七—五八頁。

チンギリと合する以前ブルグウニに右方よりツアガン・ゴルと云ふ相當の河が合し（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三旅行、一二二頁。

ブルグウニとチンギリとの合流後はウルングウと稱され、下流部に於てのみはブルン・トホイ・ゴル卽ちブルン・トホイ河と地方人は稱へてゐる。（註）

註　イビド、一二二頁、ペフツオフ、ヂユンガリヤ考、三四頁。

ブルグウニ河とチンギリ河との合流點から河口に至るウルング河の全長は約四〇〇露里で、之を下流中流上流の三部に分ち、下流部は河口より七〇露里に亘つて居り、ウルングウ河の最良且つ最も豐饒な地區である。此間の河幅は三五乃至四〇「サージエン」、流勢は頗る急速、殊に六月七月のアルタイ山上雪融期には最も甚だしい。河底は大部分砂地であるが、時には砂利のこともある。河床の方向は可成り曲折が多い。水深は水量少き場合（春及秋）は著しくなく、淺瀨も多いが、淵も亦少くない。水勢急なるがため下流部に於ける舟行は相當困難である、中流及上流に於ては舟行は全然不可能である。

ウルングウ下流の兩岸には濶葉樹（白楊、サルヤナギ）や灌木（「ヂイダ」、野バラ、エゾイチゴ、スグリ、忍冬「ボヤルカ」）が密生し、丈の高い密生した蘆の叢が廣大地區、殊にウリユングルウ湖に近い土地を占めてゐる。又ウルングウ河谷外廓に接してゐて、土質が鹽澤地であり砂地である地方にはヂンギリ、「サクサウル」と云ふ當地方特產の樹、グレベンシチクと稱するギョウリユウ屬、ハヤガネ草など生長し、森林や叢の中には獸類鳥類共に多く棲息してゐる。（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、一五、一六頁。

ウルングウ河の中流は、下流の大平原が著しく其河幅を縮めて、河流は恰も狹谷中にある如き觀を呈するに至つてゐる場所から初まつてゐる。中流の全長は、ザイサンよりブルン・トホイ峠を越える車輛通路が河流を離れて遠く奇臺に向つてゐる所までの一九〇露里である。中流は其河床大體狹ばまつてゐるに拘らず、河岸は粘土質で岩の多い所は少く、岸崖は河流を離れて、低く綠に包まれたオアジスを形作つてゐる。オアジスには植物は貧弱であるが、大體下流域と同じである河流域には農業は何處にもなく、夏期の遊牧民も居ない。蚊虻が多く居て畜類を惱ます爲である。併し冬期にはウリヤンハイ人及トルゴウツイなどがはる〴〵蒙古アルタイから來て住む。（註）

註　イビド、一八頁。ペフツオフ、ヂユンガリヤ誌、三五頁。

河流中部に於て、ブルン・トホイを發した車輛道路は河岸に沿つて荒野を走つてゐる、此荒野には大砂利小砂利多く忽ちにして荷物を搭載してゐる駱駝の足裏を損ずる。宿泊所は從前通り河岸に設けるが、所用品卽ち水、燃料、畜類食餌には不便はない。

註　ブルジエワリスキイ、第三旅行、二〇頁。

ウルングウ上流は、蒙古アルタイ山脈により兩側より壓迫されてゐるので、純然たる溪流である。河流南側の諸峰は殊に高く、未開であり、岩石が多い。此等諸峰は左右何れの側を問はず頗る水と植物とが不足である。森林は全くなく、狹谷に見出される灌木は隣接荒野特產のサクサウル、グレベンシチク

譯者註、二七二頁參照。

などで、何れもこれに僅少の耕地を伴つてゐる。（註）

註　イビド、二二頁。

河流の水速はブルン・トホイの七五露里上流に於ては、ベフツォフ氏の測定によれば、秒速五・八呎で、更に上流に於ては七呎に達する。（註）

註　ベフツオフ、ヂユガリヤ誌、二八、三五頁。

河流の平均水深（ブルン・トホイの七五露里上流）は約二〇呎、河幅は四〇乃至六〇呎の間で、河中には可成り多く島があるが、其大さは何れも僅かである。（註）

註　イビド、二八頁。

ウルングウ河には魚が夥しく多く棲んでゐる。ブルジエワリスキイ氏は、ゴロウリヤ（最も廣く知られてゐるもの）、峭の一種（普通大きいものは一尺二寸に達する長さがある）、鮹、鯉の類、鱸の五種を捕へた。（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、一六頁。

ウルングウ河の貫流してゐる地域は、北はアルタイ山脈まで、南は天山々脈に至る廣大地區に跨り、全く荒廢してゐる、水のない地域で、植物と云へば僅かに貧弱なウエレスク（Calluna unlgaris）二・三種と、刺ある灌木二・三種に過ぎない。荒野の地面は石多く、尖つた小石が撒き散されてあり、少からざる谷間が各所にあるが、谷底の河床は何れも雨後の一時の流れの乾き上つたものである。下流域に接してゐる荒野は平坦であるが、其後次第に隆起して、アルタイ山附近に於ては漸く山多くなり遂に裸峰に覆はれるに至つてゐる。此死の荒野の中にありて獨りウルングウ河のみ綠の帶を擴げたやうに、初めは狹く、次いで次第に其幅を增し、所によりては五乃至六露里に及び、下流域に於ては一五露里に達してゐる。此の流域こそ植物動物共に豐富で、隣接の死の曠野と實によいコントラストをなしてゐる。

三、エ　ミ　リ　河（註）

註　此河に關する資料は參謀將校ザクルヂエフスキイ氏が、一八八年バルルイの山及エミ河中流を測量して作つた記錄である。

此河はアク・エミリとカラ・エミリと二水源を合して成つてゐる、兩水源の上部は相接近してゐて、コヂユル及ウルカシヤル兩山脈の連接となつてゐる鞍部にある。兩水源とも南西方に向つて流れ、コルヂル及ヂランテイリの二嶺峰を迂廻してゐる。アク・エミリ河は水源より九六露里の地點に於てカラ・エミリ河に合し、其後河勢を加へ、水量を增して南西方に進み、後支那哨所セテル（塔城より烏蘇に至るボグドハン郵便道路上にあり）の一〇露里前方に於て急に西方に方向を轉じ、其まゝ此方向をマニト元支那哨所跡まで持續してゐる。此元支那哨所は現在は國境線上バフトフ要塞の若干西方にある。マニトより河流は再び南西に轉じ、我が露國領土を約六〇露里流れてアラ・クリ湖に達してゐる。セテル哨所から低地アク・タム（此に二ケの支那軍兵舍がある）に至るまでのエミリ河右岸は、若いサルヤナギの密生した、餘り廣くない地帶で蔽はれ、それより以西（三〇露里を距てゝ）アラル・テユベ島までの間兩岸は全く接近出來ない、それは河床が葦の密生してゐる沼地にあるためである、沼の平均副員は約五露里である。

中流に次の三淺瀨がある。第一淺瀨はバツイ堡壘からバルルイク山に通じてゐる車輛連路上、マニト國境城塞から六露里上流にあり、第二淺瀨はトウズ・ウトクリと稱され、アク・タム低地の向側にあり、第三淺瀨はセテル哨所附近、支那郵便

道路上にある。以上各淺瀬に於ける水深、從つて又渡河の便不便は一に季節に支配される、夏は河水少なく水勢も衰へてゐるので渡河に最も好都合である。各淺瀬の河幅は夏期凡七サージエンである。河底は中流域上部に於ては小石を以て、マニト哨所跡附近に於ては一部砂利、一部砂を以て塡められてゐる。エミリ河は滿水時にありては河水は若干鹽辛いが、減水後は全く淡水である。

エミリ河は特に著しい支流を持たない。（註）

註　チフメネフ氏の論文「セミレチエンスク洲東部の年事的檢討」（アジヤ資料集第二卷一九頁）。中に、エミリ河は左岸に、シャルイ・ゴルスンやヤマツなどの支流を持つてゐる。グルルツ河を合せてゐる。オムスク軍管區司令部發行の四〇露里地圖には、ボタスイ、アク・ス、ウシヤトイの三枝流を持つサルイ・フルスインと云ふ支流が示されてある。

河流の中程に於てアク・ス河が接近して而かも合流はしない。アク・ス河はウルカシヤル山脈の北西斜面に源を發し、クルテ哨所（セテル哨所とサルイ・フルスインとの間に在り）から程遠からぬ所に於てウリエテ河と云ふ大支流に合してゐる、ウリエテ河はチヤイル山脈に源を發して、餘り高くないチエリテケレ山を貫流するものである。アク・ス河はクルテ哨所附近に於てボグドハン郵便道路と交叉し、それよりは西方、エミリに向つて流れてゐる。アク・ス河は中流部に於ては水淺く水勢速く嶮しい岸の間を流れ、其後二五露里の間、葦に包まれた低い沼地を過ぎ、多くの分流に分れてゐる。下流部には河底に幾多の深い穴があり、これに河水が停滯し、其後は、エミリの約一二露里前方の、サルイ・カムイシ砂地中に遂に全く姿を消して了ふ。

アク・ス河谷とエミリ中流の露支國境よりセテル支那哨所までの間に、遊牧民の生活に重要意義を持つ平野がある。此平野は北はエミリ河を以て、南はバルルイク山支脈を以て境され、其面積は長さ約八〇露里、幅約二五露里ある。此平野はサルイ・フルスイン隘路によりクブ河（此河に就ては前にバルルイク山に就て述べたる際之を述べた）の河谷に連絡し、大部分ハヤガネ草の繁茂してゐる粘土性鹽澤地で、ハヤガネ草の間の地面は流砂で塡められ、これに雜草が密生してゐる。此平原中エミリ河とアク・ス河以外、飲料に適する水はなく、平野の到る處にある茶腕形の水溜りには鹽分を含んだ腐れ水が滿ちて居り、チエンゴバイ（マニト支那哨所跡の南東にあり）冬營所附近にのみは淡水の井戸がある。此淡水不足こそ夏期此平野に住民のゐない原因である、が併し其代り秋の近づくと共に此地は賑かとなる、それはバルルイク山のキルギズが越年のため山を下りて此に來るからである。彼等は此に靜かな冬、豐富な草類、鹽澤地の植物、多量の葦、燃料用として刺ある灌木等を得て全く氣樂な生活が出來るのである。

四、コ ブ ク 河（註）

註　一八八二年ペフツオフ氏によつて研究され、吾人は其手記を利用した。

コブク河が流れてゐる河谷は高臺で、西は高い山群に境され、北東はサウル山に接し、北はサウル山に、南はハトイン・ウル（セミス・タウ）山脈を以て夫々境されてゐる。コブク河は、ハトイン・ウルとサウル兩山脈の分岐點から發して、東南東の方向に流れ、第一の優勢支流は左岸のダシエン・ゴルで、チヨガン・オボ峠より出でて、マテニ偶像堂を過ぎて流れるものである。ダシエン・ゴル河によりコブク河の水量は著しく増加される。ダシエン・ゴルのコブク河に合する約一五露里下流に於て、矢張り左岸にサウル山より發出した別の支流チンドイン・ゴルがある、此兩岸には（山間に於ても、平原中に於ても同樣に）丈の低い白楊やサルヤナギが密生してゐる。此河から、此に住居するトルゴウト族の耕地を灌漑する長い堀割が南東に向けて設けられてある。平野の南東方、マテニ偶像堂附近に於て、西南西より東北東に一二露里程延びてゐる小さな獨立山脈がある。これより南東方約五露里の地點に、別の矢張り小さな獨立山脈がそれと竝行してゐる、併し其延長は六－七露里以内である。此後者山脈の南方約八露里の地點の、コブク河右岸に之も孤立のバイン・ウンヅウルと云ふ高山が聳えてゐる。

マテニ偶像堂の南東約三五露里の地點から、ハラ●アドルイクと云ふ低い山脈が發起してゐる。此山脈がコブク河北方の境をなし、コブク河南方は依然ハトイン●ウル山脈が境となつてゐる。コブク河の河谷はハラ●アドルイク山脈西端附近に於て幅二〇露里を有してゐる。前記山脈西端より北方へハン●タスツイと云ふ大オアジスが展開してゐる。多くの小流に灌漑されてゐるが、これ等小流は何れも、前記山脈北山麓に沿ひ、次いで同山脈を西方より廻り、遂にコブク河に合する一河流に合するのである。此周圍約二五露里を有する大オアジス中、各河流域には美事な草類を、又各高所にはハヤガネ草を茂らしてゐる。稍々大なる河川流域には白楊、ヤマナラシの若木が茂つてゐる。チンドイン河と此大オアジスとの間には水のない荒野が續いてゐて。石の多い乾燥した曠野で、これにはサウル山脈から發出してゐる水なき河床が幾條となくある。チンドイン●ゴル以東に於てサウル山から南方に流出す河は一もない。

ハン●タスツイ大オアジスの東方二五露里に別の大オアジスエベルツイと云ふのがある。前記のものと同樣ハル●アドルイク山脈北側山麓にあり、前記山脈山麓に連なる肥沃な狹い地帶によつてハン●タスツイの大オアジスに連絡してゐる。エベルツイ大オアジスを灌漑する河流はバイシン●ゴル河で、水源此にあり、若干の水源を合したものである。此河はハラ●アドルイク山脈を兩斷してゐるが、此左岸、ハラ●アドルイク山脈の山麓より北方一露里の地點に甞て隆勢を極めた古都の跡があり又右方より本河に合する一支流の、山を距る約一露里の點にバイシン●クレと稱する偶像大伽藍がある。大オアジスの周圍は約四〇露里、全面良草に埋められて居る、が灌漑木及孤立の白楊以外樹はない。

コブク河はバイシン●ゴル河と合して後間もなく南に方向を轉じ、ハトイン●ウルとアルガルトイとの間にある溪谷を過ぎて、荒野中に消えてゐる。コブク河が其水源を發して山間を脱出するまで百露里以上ある。河谷に遊牧して居るものはトルゴウツイであるが、彼等は全く特殊な首領の支配を受けてゐる。首領の本陣は、ハン●タスツイ大オアジスの北北東、サウル山脈の一狹谷中ウト●ラスツイ低地に在る。トルゴウトは小麥、黍、大麥、燕麥を栽培してゐる。土民の談によれば、春コブク河谷を渡つて强風が吹き、作物を害することがよくある。

五、ナムイン・ゴル（註）

註 此河はベフツオフ氏が土民より聽取したる所を基礎として明かである。

ナムイン●ゴル河の流域はセミス●タウ、ウルカシヤル、ヂヤイル各山脈間にある地域全體に及んで居る。本河流はセミス●タウ山脈とウルカシヤル山脈との分岐附近に源を發して、オルフ湖に注いでゐる。ナムイン●ゴル河の上流はウラン●キヅイル（本流）、アウリエ●テレク、ウラン●チユンクル（別にタルドイ●ブラクとも云ふ）の三溪流からなり、南東に流れ全長約一三〇露里ある。左側にヂユストラルイと云ふ相當な支流がある。此支流の流れてゐる大低地ムクルタイには沼あり灌木あり、草あり、葦がある。此自然の大境界に、ウルカシヤル山脈の南東斜面から發出してゐるカラ●ブラク河が北東から接近し來つてゐる。カラ●ブラク河は、ウルカシヤルから發出してゐるヌウン●ゴル河を左岸に於て合流して後、ムクルタイ沼地に分散する。此沼地に沒するものに、スウルツイと云ふ、ヂヤイル山脈北斜面に發して沼地に南方から接近する河もある。此沼地には各種の野禽が棲息するが就中雉が最も多い。ヂユストラルイ河より下流に於てナムイン●ゴルに合するのはベリ●アガチで、ヂヤイル山脈北斜面に源を發するものである。

ナムイン●ゴル右岸、ヂユストラルイ河口に對應する地點に於てサルキンツイ山脈が發起してゐる、此の山脈は高さ餘り著しくなく、北東に走つてゐる。此山脈はヂヤイル山脈にもセミス●タウ山脈にも接してゐないが、ナムイン●ゴル流域東方の境をなしてゐる。

ナムイン●ゴルと其各支流の兩岸にはトルコウツイの遊牧宿所があるが、只冬期だけで、夏期は空虚である。ナムイン●ゴル下流域には葦の間に虎が棲息してゐる。

六、ボ ロ ト ラ

ボロトラ河はエビ・ノル湖の西方支流で、チユンガリヤ・アラタウとボロホロ兩山脈の分岐點に源を發し、東方に進んでエビ・ノル湖に注いでゐる。ボロトラ河流が形成する河谷は北はチユンガリヤ・アラタウを以て、南はボロホロを以て境され、河谷全面には遊牧生活を十分滿足せしむるに足る優良牧場地がある。縱定を發してサイラム・ノル湖西岸を過ぎ、カブタガイ隘路に通じてゐる直線道路上の天然境界サルブクには淺瀨の渡河點がある。此渡河點附近にクルウルと稱する支那哨所跡及昔滿洲兒童を收容して宗教々師を養成してゐた學校の跡がある。淺瀨の渡河は季節によりては不可能である。馬車の通過は全然出來ない。（註）

註　ラリオノフ氏手記、シチエテイニン氏の所説によれば、淺瀨はテケリ・オボの天然境界にあり、此天然境界に於て河流は二流に分れてゐる。テケリ・オボよりタシ・クブリユク橋までは二〇露里ある（アジヤ資料集第二四卷一〇六―一〇八頁）。ラリオノフ氏のサルブクとシチエテイニン氏のテケリ・オボとは恐らく同一のものと想はれる。

此天然境界の下流二五露里にボロトラ河橋梁があり、タシ・クブイル又はタシ・クブリユクと稱されてゐるが、何れもチユル語で、石橋の意である。併し實は木橋で而かも堅牢性はない、從つて修理を加へずして砲兵の通過は不可能である。橋の長さは二五サージエンである。此邊のボロトラ河は垂直の巖壁の間、深い河床を流れて、河流は深く且つ急で、一秒間六呎半の速さである。

橋梁以下は所謂ボロトラ河の下流で、兩側は灌木鬱蒼として農業には全然適しない。併し中流々域に於てはボグド高地（クルウル支那哨所跡より約五〇露里上流）よりタシ・クブリユクまで約七五露里に亘つて穀類栽培に適してゐる、此區間にありては兩岸約五露里の間耕地を以て塡められ、何れも堀割を通じてボロトラ河の水を引いてゐる。此に耕作されてゐる土地は五〇、〇〇〇「デシヤチン」に及び、最も多く栽培されるものは黍、次いで小麥、燕麥である。灌漑用堀割の整備如何によりては、ボロトラ河畔の耕地は之を二〇〇、〇〇〇「デシヤチン」に達せしむることも容易である。此に各種部落や哨所の破壞されたもの、畑や堀割の使用されてゐないものなど夫々相當多くあるのは、嘗ては之が相當定住者のあつたことを物語るものと云へる。（註）

註　一八七五年ボロトラと其河谷を測量したラリオノフ氏の手記。

一八七五年には此にキルギスが居住したのであるが、現在は、一八八五年ボロトラ河を踏破したシチエテイニン將軍の言によれば、これにカルムイク・ツアハルが遊牧して居り、前記耕地も之に屬してゐる。（註）

註　アジヤ資料集第二四卷一〇六頁。

ボロトラ河は左岸に多くの支流を合してゐるが、何れも小流である。右岸の支流は數こそ少いが何れも相當なもので、就中ウルタク・サラとクイズ・イムチクの二流は代表的である。前者はボロトラ上流部にあり、其大部分は溪流の性質を帶びてゐる、後者はボロトラ下流域を灌漑するものである。クイズ・イムチクはボロ山脈北支脈より發出し、廣い河谷を西より東に流れて、ボロホロ山脈と之に從屬せるクイズ・イムチケ山脈とを分けてゐる。山間を出でゝ後急角度に北に折れ、其まゝ下流に及んでゐる。タキヤンズイ市を離れて以後クイズ・イムチク河は葦と灌木との密生してゐる中に消えてゐる。

七、キイ・トウイン

キイトウイン河は東よりエビ・ノル湖に注いでゐる。其長さは相當あるが、流れてゐる地域が荒野で、一部は沼地、一部は砂地である所から、少しも人の注意を惹かず、又研究もされてゐない。

アヤル・ノル湖に注ぐ河にチン・シユイ・チヤ、マナス・ゴルと云ふのがあるが、何れも全然調査されてゐない。

八、イ　リ　河

イリ河は其大さに於ても亦其經濟的價値に於ても、チユンガリヤに於ける最も著名なものである。イリ河は西部支那領最肥沃地所謂イリ地方を灌漑してゐる。併しイリ河全流域が支那領內にあるのでなく、ホルゴサ河以下の下半流が露國領を流

れてゐる。イリ河は（イ）クンゲス（ロ）テケサの二水源からなつてゐる。

（イ）クンゲス（註）

註　ペトロフ、ラリオノフ兩氏によりて研究された。

クンゲスはアルシャン、ナラト兩山脈を繋いでゐる餘り高くない横斷山脈に源を發してゐる。

クンゲス河は東より西に向ひ、全長約一八〇露里、其中五〇露里は純然たる溪流で、狹隘な巖壁の谷を流れてゐる。其左岸は針葉樹が密生してゐる。水勢は速く、落下も急で、淺瀨渡河點は僅かに一ケ所だけである。

河谷に出でゝ後クンゲスの流れは忽ち靜かとなり、テケスと合する頃は寧ろ極端に緩慢で、辛く其の流れを認むる程度である。河谷の平均廣さは五乃至六露里で、天然境界線シャバツを離れてよりは、河流は鮮、サルヤナギの若木、其他のものの叢と混つて、大部分は濕れ葦が密生してゐる。此葦のためにクンゲスの兩岸殊に左方からは接近し得ない。河幅は平均一〇乃至二〇「サージエン」、水深可成り深く、河底は粘著力ある泥濘である。テケサ河との合流點を去る半露里の點にクンゲス渡河點があり、其深さは減水時（九月）に於て二呎半、滿水時に於ては渡河は危險である。アルシャノ・アウラリ連山はイリ右岸支流カシ河とクンゲス河との分水嶺である。クンゲス河谷の廣さは下流域に於て約二〇露里あるが、上流に遡るに從つて狹ばまつてゐる、故に支那哨所附近（其處に淺瀨のある）に於ては僅かに五露里となる。全長一二〇露里に亙る此河谷は殆ど全部、尠くとも其半ばは農業に適してゐる。最良農耕地及草原はシウヤツイ天然境界から支那哨所までの間である。此主要農産面積は約二〇〇平方露里である。

河谷を圍む連山の南斜面、ツアグマ河よりシウヤツイ天然境まで、それより上流に於ては連山の兩斜面及直接河流に沿つて山林（エゾ松、白楊、ニレ、白樺、ナ、カマド、林檎等）がある。

（ロ）テケス河

テケス河は天山大群山中の最高嶺ハン・テングリに源を發し、天然境カブカクまでは狹谷の深い巖壁の間を流れ、支流カブカクを合して後は其河谷を廣げ、東北東に進み、河谷北方を境してゐる山脈に接して流れてゐる。ビヤン・ゴル河々口よりウルテン・ムザルト河々口に至るまでの間テケス河は所により數流の分流となる。左岸は高く且河水に打たれてゐる個所が多い。兩岸を塡めてゐる草原帶には汁液の多い草類と灌木の叢が密生してゐる。河底は堅く且つ粘土質の砂地で、河水は清く、水速は中位で、河中の島は濶葉樹の藪に包まれてゐる。此地區（ビヤン・ゴル河口よりウルテン・ムザルト河まで）に二ケ所の渡河點がある、一はアクサイリ・ムザルト河々口より約四露里上流にあり、他はビヤン・ゴル河の上流一露里半の點にある。ウルテン・ムザルト河口より下流ハン・ハイ河の合河點までの間には、探聞する所によれば、多くの渡河點がある、其中最も便利なのはサルト・ウトケリと稱せられるもので、其深さは增水の場合三呎ある。河底は細かい砂利である。スムベ河合流點對岸の淺瀨とアルマルイ・ス河對岸の淺瀨とは共に變り易く恃みとはならないが、中邊の水量に於て四呎以下である。テケス河上流部アギアズ河口附近に渡船場がある。テス河は十一月初めに結氷して四月解氷する。

テケス河に右方より次の諸流が合してゐる、ビヤン・ゴル、アクサイリ・ムザルト、ウルテン・ムザルト。（註）

註　ウルテン・ムザルト（ウルテンは「哨所の」の意）は時に大ムザルト、アクサイリ・ムザルトは小ムザルトと稱される。前者は長さに於て勝り、後者は水量に於て優つてゐる。バヤン・ゴル河は我がトル軍管區發行四〇露里圖面にはカラ・コルと示されてある。

アクス・アギアズ、ムイイン・ツイ、スハナイ、チユワク、テレク、コクス、小ヂルギラン、大ヂルギランなどで、其中調査濟のものは初めの三河流である。以上各河川何れも天山山脈北斜面に源を發し、其性質は溪流である。山間を離れて後は深い且狹い河床を流れてゐるが、テケスに接近するに從つて次第に河幅を廣めてゐる。

ビヤン・ゴル、アクサイリ、ウルテン・ムザルトの各河は水量多く、非常な急流（一秒八乃至一〇呎）で、河床は大きな丸石で埋められてゐる。主要山脈の雪融け時機ともなれば此等河流は非常な増水を見る、渡河出來る時機も或る一定の月、否

一日中にても其時間さへ定まつてゐる。夏期諸峰の雪の融ける期節にありては、一日の中最も高い水準は晩の八—九時頃で又低い水準は朝の九—一〇時頃である。朝渡河の得る地點にありて晩は早くも渡河不能となることがよくある。ビヤン・ゴル河、オホトニイチイ村附近の渡河點は變りのない渡河點で、河流は此に於て三流に分れ、本流の幅は二五「サジエン」、深さ四呎ある。アクサイル・ムザルトの不變渡河點はドルブルヂン廢虚の附近にある。

テケス河左岸の支流は國境河川スムベで、カラ・タウ山中ウラン・クタリ峠附近に源を發するものである。スムベ河はスムベ・スとウルヌイン・スとを水源とし、約二五露里は豐富な植物に包まれてゐる河谷により南西方に向つて流れ、カルムイクスキイ修道院(スムベ)の前方五露里の點に達して、相迫る兩岸高地の巖壁—それは前記修道院跡附近に於て再び河流を離る—のために河幅を狹めてゐる。それより河流は方向を南方に、後山間を出でゝは南東方に轉じ、共まゝイリ河に合するまで進んでゐる。水深は最大河幅部に於て二呎以内、最小河幅部に四呎以内、水速は中位である。前記修道院跡より下流に於て、耕地灌漑用堀割に河水が引かれてある。

此に在住する遊牧民の栽培する農作品は黍、燕麥、大麥、小麥である。

スムベ河より下流に於テケス河に入る左岸の支流中、探聞により判明したものは次の通りである、(一)ガシユン・アチク(テケスに達せず)、(二)カラガイテ・ブラク、(三)アルマルイ・ス、(四)コク・テユビンスキイ・カラス、(五)カシヤン(テケスに達するのは五月六月七月のみ)、(六)ウラン・ブラク、(七)シヤルノハイ、(八)バラ・カラガイテ(以上三河流はテケスに達せず)、(九)ハナ・ハイ(四月五月テケスに達す)。

テケス河谷の幅はオホトニイチイ部落の子午線に於て三〇露里、ウルテン・ムザルトの子午線に於て約四〇露里ある。右岸沿岸地帶は左岸沿岸地帶よりも三倍廣く、兩岸に連續せる地域は平坦な開濶地である。テケス河谷には多くの昔の堀割の跡が殘つて居る。これは此地方の農作が昔時現在以上に發達してゐたことを示すものである。此地にありては雪の融け終ると同時に耕作を始むるのであるが、これは夏が比較的短かいので穀物の稔らない恐があるからである。野菜や果實の作柄は餘り香しくない。(註)

註　チフメネフ氏、アジヤ資料集、第二卷、八八—九四頁。

イ　リ　河

テケス河とクンゲス河との合流後之をイリ河と云ふ。イリ河の長さは各水源を合してより河口に至るまで八三〇露里ある河底は上流部に於て石多く、伊寧附近に於ては細かい小石であり、ホルゴス河口附近に於ては砂ばかりである。夫れより下流は砂を交へた粘土質である。イリ河の幅は伊寧附近に於て八〇「サージエン」、イリスキイ村附近に於て一二〇、それより下流の到れば處により一露里にも達してゐる。河の深さは、晩秋上流部及中流部以外には淺瀬は出現しない、と云ふ狀態である。イリ地方に於ける平底舟の渡船場は伊寧附近・アルスタン、カラタム、ヤマツ、コリヂゲル各縣、我が露國領ボロフドヂルスコエ要塞等の各所にある。イリスキイ林附近はウエルフイ林—コバル林間の通路上に一八八四年重要橋樑が架設された。伊寧市附近の渡船は島を狹んで出來てゐる二流の水道と本流とにある。前記水道を過ぎて後淺瀬となつてゐる。右岸の水面への下降路は非常に嶮しい。

ボロフドヂルスカヤ渡河點には左岸に水中遠く突出てゐる砂洲がある。これがため本流を渡つて後、岸までの間に此砂洲を渡り、其後に水道を一つ越さねばならない。渡河點の下流約二露里の點に、土民の言によれば渡河點がある、此渡河點は晩秋に限り現はれるもので、駱駝以外には通過出來ない。以上記載せる各渡河點に在る平底舟は全部で一五隻以内である。

イリ河の水速は一定してゐない、早春解水と同時に增水し始めて、河谷の雪の融け終るまで續き、其後河水は著しく減退する、併し五月山中の雪が融け始まると同時に再び增水し始め七月に至つて最大量に達する。平年に於ける河水高底の差は四「アルシン」に達してゐる。河流の水量に順じて水速は變化する、中流部は於て實測の結果、水速は一秒間 四・六六呎であ

る。

イリ河の一般方向は西方に向つてゐる、併しイリイスキイ村を離れて後は急に北西方に轉じて、其まバルカシ湖に注ぐまで續いてゐる。全流域を通じてイリ河は曲折が極めて多く、河床は各所に於て細かく分れて島を形成する。水路の變化は數へ盡せない。河岸や淺瀬から洗ひ落される砂や耕土は河流に流され沈澱して、從來淺瀬や砂洲のなかつた處に新たに之を形成する。又從來存在したものは洗ひ流される。河水は粘土と砂との混合であるために濁つて黄ばんだ色合を見せてゐるが、味は軟かで優良である。

右岸はホルゴス河口よりチャルイン河口まで砂地で、濶葉樹や蘆の密生地で塡まつてゐる。高く隆起してゐる荒野の砂丘は或は河岸に接近し、或は之と離れて、砂丘の麓と河岸との間に鹽澤地を出現させてゐるが、之れには蘆、早鐘草、刺ある植物、中央アジヤ特産のサクサウル、檉抑属、其他の濶葉樹が生茂つてゐる。河岸は絶壁で、大抵は一方が高く一方が低い此の高低は左右絶へず交代してゐる。

ボロホロ山脈の支脈とウヅンタウ連山との間のイリ河谷の幅は、ホルゴス―コルヂャトの線に於て約八五露里、ボロフッドヂト―ボドゴルノエの線に於て約一〇〇露里ある。而して右岸の平野は西方に向つて若干狹まり、之に反して左岸の平野は廣がつてゐる。

ホルゴス下半流とチャルイン河々口との間の地域は砂で塡まつてゐる。此の砂地はホルゴス河附近に於て幅四五露里を持つのが、チャルイン河口に近づくに從つて狹ばまり三露里となつてゐる。此砂地は槪して移動するものよりも遙かに堅い。砂地にはサクサウル、グレベンシチク、其他の荒野の灌木で埋められてゐる。

ボロフドヂルスキイ村のキルギスは常に此に來つて冬營する。彼等は此に多くの井戸を堀り、四方に遊牧道路を切開いた、サクサウルやグレベンシチクなどの若木を伐採して始めて、固定した砂漠の砂丘を軟かい移動砂の性質を帶びさせ得るのである。舊支那市街トルゲニの跡(此跡はボロフドゲル東方約二露里の點にある)から郵便道路の兩側に沿つて人工的に植林したニレ林が連續してゐる。道路に沿つた長さは約三〇露里、アク・ケント廢墟附近の最大の幅は一五露里に達してゐる(チフメネフ、アジヤ資料集第二卷五二―五八頁)。

前記の砂地と關係なくホルゴス河とチャルイン河との間に、イリ河に沿つてゐる砂地が他にも各所にある。就中イリ河下流の兩岸に沿つて、イリスキイ村を出でゝ間もない點から、バルカシ湖まで連續してゐるものゝ如きは特に大きい。一般にイリ河が移住者の居住し又開墾された土地を流れるのは僅かに其最上流域(六〇―七〇露里)だけで、其後は未開のそして移住者のゐない土地を流れてゐる。イリ河には魚類は多い。「オスマン」と「マリンカ」とが主である。然るに魚漁は發達してゐない。沿岸地帶の蘆の中には野猪、虎、豹などが居り、又砂地には兎、狼、狐などが棲息してゐる。野猪や虎は主にイリ河の下流及中流(ボロフドヂルより南方)に群がつてゐる。鳥類ではペリカン、雁、鴨、白鳥、山鷸、雉などが居り、又蘆の中の飛翔する昆虫、砂地及乾燥してゐる沿岸各地の毒蜘蛛は非常に多い。(註)

註 ゴステンコ氏、トルケスタン地方、第一卷、二七六頁。

イリ河は舟の航行には餘り適しない。テケスとクシゲスとの合流點より伊寧に至るまで(一〇〇露里)の地區は、水量の少いのと水勢の速いことゝで舟航は不可能で、伊寧より滿洲伊寧の遺跡まで(四〇露里)は、滿水時に限り舟航が可能である、これよりイリスキイ村に至る三八二露里の間は減水時に於ても航行可能である。一八七一年小舟の試驗流下が行はれたが、前記區間の通過に八日間を要してゐる。又十人で小舟を上流に綱で曳き上げたのであるが、イリスキイ村よりボロフドヂに至る二二〇露里の距離を四〇日費した。曳舟の際困難したのは河床各所に淺瀬があつたことである。イリイスキイ村からバルカシ湖までの距離は約三五〇露里と謂はれてゐる。一八五六年クズネッオフ氏がバルカシ湖上で造つた船で此の距離を航行した。船はカルカラリンスクで購入した小麥粉を搭載して出發、イリ河口よりイリイスキイ村までは曳綱で曳上げた。併

し麵麭を前述の如き方法で手に入れることは爾來之を中止した、それは此方法では非常な高價につく（四分の一に對して一五留宛）からである。（註）

註　イビド、二七四頁。

一八八三年イリ河に汽船を浮べる計畫が樹てられ、汽船は小型の、三五馬力のものが造られ、最初伊寧―チャルケント間の貨物輸送に從事したのであるが、其後下流バルカシ湖に向けての航行が試られた。併し實驗の結果就航相當困難なことが判明した。即ち船は小型の吃水の淺いものであるに拘らず、絕えず淺瀨に乘上けては推進機を破損するので遂に就航中止の餘儀なきに至つた。

イリ河の支流。

（イ）右側支流

（一）カシ河。カシ河はイリ上流の最大支流の一で、カツン高脈より發し、西方に向つて直線的に流れ、イリ河に合する頃（伊寧を去る四五露里）に至つて南方に急轉し、その全長は二四〇露里である。河谷中穀類の栽培に適するものは僅かに河口よりチルギルツイ天然境（マザル村を去る六五露里にある炭坑）までゞ、現在穀類栽培に使用してゐる土地は僅かに約四〇平方露里に過ぎない。穀類栽培に從事してゐるタランチン族は、兩ウラスタイ、兩ニルカの四部落に分れ住んでゐる。チルギルツイの天然境を過ぎて後のカシ河谷は、一八〇露里の全面に亘りて遊牧生活以外何ものにも適しない。カシ河兩側山嶺の斜面及カシ河流域には各種の山林があり、エゾ松、白樺、ナナカマド、林檎、其他多くの濶葉樹及灌木が茂つてゐる。河谷と其れを圍む山嶺の各斜面とには優良な牧草が繁茂してゐる。（註）

註　イビド、二七七―二七八頁。

（二）ホルゴス河。ホルゴス河は一八八一年以東其上流より河口に至るまで、我がセミレチエンスク洲と西部支部イリ地方との國境線となつて居る。ホルゴス河上流は未だ調査が遂げられてゐない。探聞する所によれば上流からオイ・ヂエラウ支流の河口までは溪流としての諸性を悉く具備し、其上流河底には大石散在し、水速は早い、從つて雪融け時の渡河は不可能である。河水は白色を呈し、上流はアルマルイ河々口までの距離は約五〇露里である。アルマルイ河口よりは右岸に接近して、高さ約一五〇呎の殆ど垂直の巖壁に添つて流れてゐる。中流域のホルゴスは深い河床を流れ、若干の分流に分れる、本流は左岸寄りに流れてゐる。ホルゴス郵便驛までは右岸が高く絕壁をなし、左岸を見下してゐる。郵便驛への下り口と、マザル街道上の淺瀨への下り途とが造られてある。左岸は狹谷近くに至つて始めて斷崖の岸壁を見せてゐる。狹谷入口から郵便驛に至るまで右岸は全部耕地に埋められてゐる、此耕地はアルマルイ河の河々より下流に於てホルゴス河の水を引いて灌漑してゐる。バシ・クンチャン及ウトラ・クンチャンの二用水はホルゴス河に殆ど竝行して四露里を進み、其後河岸に現はれ、第二流用水を分ち、本用水は其まゝ其終點であるアク・ケントの廢墟に達してゐる。ホルゴス郵便驛より下流に於ては右岸は一露里の間だけ堅固な粘土性で、農作物もある。それよりは砂丘となり其まゝ下流域に及んでゐる。ホルゴス河は山間を離れて後は多くの分流に分れ、各分流の間の土地は石地であるが、何れも珍らしい各種の灌木に覆はれてゐる。本流の幅は平均約一二「サジエニ」で、渡河點は多くの場所にある、渡河能否は季節と一日中の時間によつて定まる。ホルゴス河の最大水量と水速とは他の一般溪流に於けると同樣、夏期各月の中にある。夏期は河水が最高度に達するのは午後八時頃である。ホルゴス河口附近は濶葉樹林に包まれ、河底はダウル高地までは石地であるが、それより下流は粘著力ある砂地である。水速は中流部に於て一秒間六―七呎以內、下流部に於て三尺乃至四呎である。河水の色合は白色が不潔な黃色に變ずるのは下流域たけである。河水は良好の味を有し、濁つてはゐるが間もなく澄む。河流の長さはアルマルイ河口よりイリ河に注ぐまで六五露里である（チフメネフ、アジヤ資料集第二卷、五九―六一頁）。

（三）ウツセク河。ウツセク河は我が露國領土內を流れ、ホルゴス河に竝行して北より南に走つてゐる。ウツセク河はボ

ロホロ山脈中に源を發する二水源を合したものである。雨水源の合流點よりはウッセク河は深い峽谷の底を流れてゐる。此峽谷はボロホロ山脈の支脈で南方に進むに從つて低くなつてゐるものよつて形成されてゐる。これ等支脈は一方に於てはウッセク河と其左岸の支流ブルハンとの境となり、他方ウッセリ河とボルフドヂルカ河との境となつてゐる。

西マザルに通ずる道路上に於て峽谷の兩岸は三段の臺地を成して河面に降下してゐる。ヂャルケント市附近に於ては右岸の臺地は附近の平野と合し、左岸は河水に洗はれ且つ隆起してゐる。其斷崖は次第に低下しつゝ砂丘地帶まで續いてゐる。處によりては河流が之に密著してゐる。河流の離れてゐる所には必ず丘陵が形成され、これに刺ある灌木やサルヤナギの若木林、時には「ニレ」など茂つてゐる。左岸は遙かに傾斜が緩くあり又低い。ヂャルケント以南左岸には幅數里に及ぶ濡れ草地帶が續いてゐる。河水が數流かに分れて流れゐる峽谷の底部は平坦で、河床と傾斜の脚部との間にキルギスが耕地を作つてゐる程廣い。各分流の間に形成せられてゐる島々には雜草茂り、サルヤナギの若木や「ニレ」など密生して居る。河底はヂャルケントの上流に於ては大石であり、ヂャルケント附近に於ては細かい砂利であり、アリムヂャン多營所近くの淺瀨に於ては砂利で、其より下流は砂地である。水速は增水時に於て一秒間六呎以上である。水深は中流域に於て約三呎、河口に於ては馬が游ぐ程度である。夏期は一日中或時間に限り渡河出來る場所が多い。河流の長さは各水源合流點から河口に至るまで約七〇露里である。ヂャルケントの上流に於てウッセグ河に注ぐものはブルハンで、右同下流に於てチヂカン河が合してゐる。左方にはウッセク河よりカメンカと稱する分流が分れてゐる。以上各流より耕地灌漑用堀割を造つてゐる。

註　イビド、第二卷、六一―六二頁。

(四)　ボロフドヂル河。ボロフドヂル河もボロホロ山脈より發出し、ホルゴス、ウッセクと同樣北より南に流れる。併しイリ河に達せず沼地と蘆の中に消失する。河流の長さ約四五露里、廣くなく又深くもない、が水勢は速い。到る處渡渉が出來る。粘土質の河床を流れるので、河水は大抵濁つてゐる(殊に雨後)、が使用には差支へない。ボロフドヂル河谷の土地は特に肥えてゐる。一八七二年小俄壘援護の下に此に露西亞部落ゴルベフスコエが創設された。部落には美麗な官立公園まで施設されたのであるが、遺憾ながら氣候が非常に惡く、夏の暑氣は迚も堪えられない。降雨は非常に少く、從つて空氣は息詰るやうである。加ふるに、蜉蝣、蠅、蚊など腹立たしいまで居り、之に喰はれて家畜類は血の出るまで搔き、皮膚を損じて遂に衰弱の極斃れる有樣である。(註)

註　コステンコ氏、トルケスタン地方　第一卷二七六、二七七頁。

(ロ)　イリ河左岸の支流

(一)　チャルイン河。チャルイン河は國境を遠く離れたセミレチエンスク領域内を流れてゐる。チャルイン河は其上流はチャルカドイ・スと稱されてゐる。チャルカドイ・スはウズン・タウ山より發出する三小流を合したもので、チャルイン右岸の支流ケゲンとの合流點までは西方及南西方に流れてゐる。此河谷の東方はアイガイタス山脈、北方はウヅン・タウ山、南方はイシガルチン山とも稱されてゐるカラ・ツウ山脈によつて夫々境されてゐる。此河谷は高地をなし、良草に包まれ、周圍の諸山より發出する諸小流によつて灌漑されてゐる。河底は砂利によつて埋まり、河幅は著しく廣からず、水も深くはなく到る處渡渉出來る。左方よりウルン・ブラク、ベリ・ブラク、カラガイリ・ス、イシガルツイ・ブラクの四小流、又右方よりは僅かに一泉が夫々合してゐる。夏期は前記各河谷にキルギズが遊牧してゐる。チャルイン河はテメルリク支流の河口より伊寧―ウエルヌイ間の古い車輛道路の交叉點にある淺瀨に至るまでを地方人はサルイ・トガエムと呼んでゐる。此サルイ・タガイ河は深い粘土の斷崖の底を、一河床により、ミヤマナナカマド、白楊、若サルヤナギなどの若林の間を流れてゐる。斷崖右岸は大體左岸よりも高く、河幅は一二乃至二〇「サージエン」、河底は砂利及び砂交りの小石に填められ、兩岸には濶葉樹密生し、川中の島や河岸附近の氾濫原は何れも增水時には水中に沒する。水速は一秒四呎で、到る處に渡河點がある。一八八四年チユンヂ―チリク間通路のサルイ・タガイ河交叉點に木橋(サルイ・トガイ橋)が架設された。河水は濁水なるも、

程なく澄んでゐる。ウエルネンー伊寧街道より以下の河流がチャルインと云はれるものである。チャルイン河はイリ河に合する際二流の分流に分れ、其河には非常に高い蘆を交へた通過不可能な山林に覆はれてゐる。只僅かな開濶地にキルギスが黍を播いてゐる。蘆の間には虎や野猪が棲んでゐる。併し大體に於て本河の研究は目下頗る不十分なものである。（註）

註　テイフメネフ、アジヤ資料集第二卷六三―六五頁。

（二）　チリク河。　チリク河は外イリ地方アラ・タウ山の雪線集合點に源を發し、最初は西方より東方に流れて、外イリ地方アラタウ山脈とクンゲイ・アラタウ山脈との境をなし、次いで北方に鋭く折れて其まゝイリ河に注いでゐる。本河の中流域は外イリ河地方アラタウ山とウズン・タウ山脈極西支脈との境をなしてゐる。チリク河上流及中流部は渓流の性質を帶びてゐるが、山間を離れて平野に出でゝ後は土著民竝に遊牧民の耕地を等しく灌漑してゐる。ザイツエフスコエ村附近に於て此河に木橋が架設されある。河流の全長は約一六〇露里ある。チャルイン河同様本河流も未だ其研究は概して不十分である。

第五章　ヂュンガリヤの氣候

上部イリ河々谷の氣候。テケス河々谷。ヂュンガリヤ曠野に於ける氣候。

氣候に關しては本地方は著しく相異りたる二地帶に區別される。一は南部地帶にして支那イリ地方を含み、他の一は天山々脈と蒙古アラ・タウとの間にあるヂュンガリヤ曠野其ものである。

イリ地方の氣候は大陸的であるが、北部ヂュンガリヤ地方の如く激しい變化はない。上部イリ河々谷の氣候は概して溫和な健康に適する氣持ちのよい氣候であると云へる。夏期物蔭にて烈氏三三度の暑さに達するとは云へ、第一夏期多量の降雨と、第二豐富な植物（農作物）が伊寧のオアジス一帶を覆つてゐることゝにより暑さは非常に緩和される。春期降雨により伊寧のオアジス一帶の穀物は特に給水を要せずして稔り、當地の冬は平穩で、雪は一ヶ月半存續する。冬の寒さは烈氏の零下二四度に達する。

伊寧河谷は西方を除く他の三方が悉く高嶺に圍まれてゐる、これ卽ち此地方の氣候の溫和である所以であるが、それのみならず此地方の位置が南方にあるために氣候は柔軟植物や果實の生長に適する所以なのである。從つて伊寧地方オアジスの農園に栽培されてゐるものは桃、杏、柘榴、葡萄、林檎、梨、桑などで、伊寧地方には、企業經營ではないので極めて小量ではあるが、綿をさへ栽培出來る。伊寧地方に於ては杏が六月後半に、桃が七月下旬より八月上旬にかけて成熟する。伊寧地方一年の平均氣溫は烈氏七・三度、一月の平均氣溫は烈氏冷下七・六度、七月平均氣溫は一九・九度である。イリ河はオアジス領内に於ては一年中十二月下旬より二月下旬に至る六十日間結氷し、イリイスキイ村附近にありては、イリ河の結氷は十二月中旬で、解氷は三月十二日頃である。

卓越風は西風で、イリ河下流より吹來るものである。此風によりて雨が運ばれるのである。（註）

註　コステンコ、トルケスタン地方、第一卷、四二八頁。

イリ地方の南部卽ちテケス河沿岸地方は、テケス河谷が總體に隆起してゐて、冬は荒天が續き夏は夜間寒冷である結果、氣候は前記伊寧地方のオアジス程農耕に適しない。これ卽ち本地方が土著生活よりも遊牧生活に遙かに適當する所以なのである。何れにしても農耕の行はれてゐるのはテケス河々谷で、これに從事するものは遊牧民、カルムイク族、キルギスと國境地帶の露國人部落―ナルイン・コルとビヤン・ゴルとの合流點附近にある獵人部落（二五戶）―の住民とである。穀類は短期の夏期間に收穫し得るやう耕作する。カルムイク族は小麥、燕麥、大麥を、又キルギスは黍を作つてゐる。テケス河谷を繞る諸嶺の斜面は何れも山林に覆はれてゐるが、此等山林は氣候の濕潤性を保たしむる上に少からず效果のあるものである。

ヂュンガリヤ本土の氣候の重要特質は、一ヶ年全部を通じて降水量極めて少く自然空氣が乾燥してゐること、夏期の暑さ

と冬期の寒さとの激しいコントラストと、暴風雨の殊に春期に多いことゝである。チユンガリヤ氣象觀測に關する資料は、ブルジエワリスキイ氏（氏は一八七七年十月十一月及十二月の半ばまで、及び一八七九年四月五月前半に夫々觀測を行つた）と、一八七六年の七ケ月間に亘りて觀測を行つたベフツオフ氏とによりて作られたもの丈けである。（註）

註　ブルジエワリスキイ、ベフツオフ兩氏は自身親しく觀測を行つた外に、尙ほ地方人に就き夫々聽取したことをも蒐集してゐる。

ブルジエワリスキイ氏の觀測によれば、チユンガリヤに於ては秋が最も善い季節で、炎暑もなく亦極寒もない、天氣は快晴の靜かな日が續いてゐる。一八七七年十月中曇天日數は僅かに二日、荒天亦二日、降雨は只一回、降雪は四回あつた、併し量は極めて少い。十月初旬の最高氣溫（午後一時の觀測）は物蔭にて一五度、併し十月二十三日日の出時の降雪前後零下二三度に及んだ。十一月の最低氣溫は零下二六・二度、十二月五日より十日までは寒暖計の水銀每夜凍結したのを以て見れば寒氣は恐らく攝氏四〇度を越えたに違ひない。觀測所の絕對高度は二、五〇〇呎を超えてゐない。十一月中暴風雨は全然なく、十二月には二回之を見た。天候は大部分快晴が續き、降雪は十一月中九回、十二月前半に四回あつた。が何れも其量は僅少であつた。荒野の南部に於ては降雪は辛く地面を覆ふ程度であるが、北部殊にサウル山に近づくに從ひ積雪は二乃至四吋に達する。キルギスの言によればチユンガリヤに於ては夏の間降雨が多い、これは降水量の極めて多い西伯利に接近してゐる結果である。

ブルジエワリスキイ氏の推定によれば、チユンガリヤに於ては露出地表殊に砂地は、二月には可なり高く太陽が昇るので自然其熱を受け易く、從つて春の到來も早いと云ふのである。四月の最高氣溫は二七・二度である、然るにも拘らず四月下旬朝の寒さは七度八分。（註）

註　觀測を行ひたる地點の絕對高度は三九〇〇呎で、ガシユン・ノル湖畔である。

に達した。五月初旬東部の比較的隆起してゐる地區に於て零下二度五分の寒さが三回もあつた、而して十一日は午後一時寒暖計は僅かに七度七分を示したに過ぎなかつた。氣溫の變化の激しいのにも拘らず空中は常に乾燥してゐる。四月には實際雨の日が九日あり、五月の前半には三日あつた、併し雨は連續降つたのでなく殆ど空氣を潤し盡すことさへ出來ない程度で、天候は大部分快晴で、四月中は曇天日數九日、五月の前半には六日あつた。

チユンガリヤ春季氣候の最も著しい特徵は、全中央アジヤと同樣に、屢々而かも強烈な風の吹くことで、而かもそれが殆ど常に西又は北西方より吹くことである。此强風は冬期も相當屢々吹くが、夏殊に秋には稀である。風は朝九乃至一〇時に吹き出すのが普通で、正午乃至其れ以後に吹出すことは殆どなく、大抵日沒頃には鎭まる。風は非常に强烈で、大氣はために砂塵の雲に滿され、それで全く太陽を隱して了ふのである。ブルジエワリスキイ氏は斯かる强風を四月に一〇回、五月前半に七回實驗した。此の期間には西風乃至西北風は、眞正の暴風雨にこそならないが、著しい强さに達するのである。（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三旅行、三一、三二頁。

ベフウオフ氏の觀測によれば、春及夏は雲は南西及西方より現はれ、秋には西方及北西方より、而して冬は北西より及極めて稀には北方より現はれる。其他の方位より雲の現はれることは四季を通じて頗る稀である。ベフツオフ氏自身も只一回東方より吹く風（バラシキ）に逢ふたことがある。（註）

註　ベフツオフ、蒙古旅行記、オムスク、一八八〇年、一二四頁。

チユンガリヤの此地方は氣候の比較的荒れてゐる結果、上部イリ河谷に見られるやうな軟質植物は此地方にはなく、此地方に生長する植物は、それも甚だ僅少ではあるが、歐羅巴ロシヤ中部地方に見られる樹木や灌木である。果樹は、天山及ボロホロ兩山脈北麓に添つて散在する山麓都市及部落に限つて栽培されてゐる。エゾ松林及其他濶葉樹は山岳北斜面と狹谷とに生長してゐるが、時に山間の溪流に沿つても生長してゐる。

山林の植物中に林檎樹が見受けられるが、これはウルカシヤル山脈より先きにはない。故に北緯四七度が此種樹木の北方

境界であると考へられる。（註）

註　マツソフスキイ、帝國ロシヤ地學協會々報、一八七二年、第八卷、第五號、一八六頁。

第二篇　住民

第一章　ヂュンガリヤ移住民の種類別

ヂュンガヤ史的概要、前世紀に於ける支那人のヂュンガリヤ征服。東干族蜂起。タランチン國。離反省に於ける支那主權囘復に對する露國の支援。一八八一年ペテルブルグ條約。上部イリ地方の住民。タランチン族、東干族、カルムイキ族、シボ族、トルゴウト族、キルギズ。ボロホロ、天山兩山脈以北に於ける住民。タルバガタイ地方住民。キルギズ（タルバガタイ地方の）の區分ト其居住地。トルゴウツイ、カラ、カルムイキ、チヤハル、オリシヤ、モンゴル等の蒙古種族。土著民。タルバガタイ地方總人口。蒙古アルタイ南斜面の蒙古族。北路（帝室道）沿線の土著民。全ヂュンガリヤ住民總計。

ヂュンガリヤ國の國名は、嘗ては廣大な國家を成し、短期とは云へ歴史上可なり重要役割を演じた國民の名稱から取つたものである。ヂュンガリヤ人（左國種族の意）は蒙古出身種族で、支那に於ける蒙古王朝「ガニ」の衰微に乘じ、一七世紀の初め同盟國を組織し、此盟主となつたのが後のチョロス族の「汗」ガルダン・ボコシツである。彼は多數の同族「オリヨト」を併合した、斯くてヂュンガリヤ人は其後數時の間「オリヨト」と稱せられ、其の「汗」は「オイラト」と呼ばれてゐた。ガルダン・ボロシツ汗の時代にはヂュンガリヤ國は宏大な領土を占め、北は西伯利、東はハルハス族の蒙古汗領土、西はバルカシ湖、南は東トルケスタンを以て夫々境される一大地區であつた。此時代ヂュンガリヤ人はチョロス、トルゴウト、ホシヨト、ドルバトの四種族から成り、各族夫々自己の汗の統制を受け、最高主權はチョロス汗に歸してゐた。（註）

註　クロパトキン、カシガリヤ、八六頁。

チユンガリヤ國は獨立國として存在する間支那との間に戰爭が絕えなかつた、然るにも拘らず他方に於ては大に國威を張り、一六七八年には東トルケスタンを（註）又一七一七年には西藏をさへ併せたのである。（註）

註　イビド、八六、八七頁。

註　レクリユ、土地と人、第七卷、一三七頁。

チヨロス汗殊にガルダン・ボコシツがチユンガリヤ統制に當つてゐた時代、チユンガリヤ國は非常に富み、駱駝、馬、羊などの畜群が東部天山の各溪谷にある優良牧場を塡めてゐた。國家統治の中心は上部イリ河の右岸に置かれ、これより汗は遊牧非遊牧兩民族に號令してゐた。チユンガリヤ國の首府―と云つても厚手の生地の天幕住宅で出來上つてゐる―は現在タランチの伊寧のある所にあつた。チユンガリヤ各汗の總本營所在地は、カルムイク人の權力旺盛なりし頃之に仕へてゐた瑞典將校レナト編纂の地圖には明瞭に示されてある。（註）

註　レナトは一七一六年より一七三三年まで幽囚の身となつてゐた。ガルダン・ボコシツは一七二〇年に沒し、其後繼者はツアナン・ラブタンであつた。レナトの地圖とア・イ・マクシエエフのこれに對する解說とは第一編第二章に既に述べた。

然るに此蒙古系國家は內部の不和と國內戰とのために一致結束して支那に當ることが出來なかつた。支那との戰爭は初めの程はチユンガリヤ側に利があり、ボグドハンの二ケ軍はチユンガリヤ軍のために粉碎された。併し一七五七年支那の第三軍は美事勝利を納めて、チユンガリヤ人の占有しゐた領土は悉くボグドハンのテヤニ・ルンの權力下に入れられ、西伯利、キルギス曠野さては西トルケスタンに逃走を企圖して果さなかつた蒙古族は此に容赦なく殺害された。此大虐殺の際滅ぼされたものは男子、女子、少兒合せて約百萬と云はれてゐる。これと共にチユンガリヤと云ふ名稱其ものも滅びた、チユンガリヤ種の後裔として今日殘つてゐるのは僅かに山國人カルムイクの間だけである、これは言語と宗教とが同一な所からカルムイクが彼等に隱家を提供し、之と忽ち混血して了たからである。（註）

註　レクリユ、土地と人、第七卷、一三七頁。

チユンガリヤ領土占領後支那は之を七地方に小分した。イリ、タルバガタイ、クリ・カラ・ウスの三地をイリ代官地區とし、鎭西、廸化の二地方は甘肅省に併合され、殘餘の科布多、ウリヤスタイ地方は個別統治とされた。チユンガリヤ汗の營所跡には都會伊寧を建て、國內には、滿洲國境に住むシボ、ソロン、ダウル等の蒙古族より成る軍人部落（綠色旗兵）を設け、尙ほ支那國內に土地を所有せざる貧民及犯罪人を之に送つた。支那政府が甘肅、山西などの西方諸地方から、東干と云ふ名稱で有名な回教徒をチユンガリヤに移住せしめたのも多分此時代である。此外一七七一年には、ホ・ウルルク汗と共に十七世紀の初め露國に入國したカルムイク、トルゴウトの大部分が、チユンガリヤに歸國してゐる。（註）

註　トルゴウト族はチユンガリヤと境を接して住居したのであるが、間斷なく相爭つた結果、一六二八年露國に移り、ウオルガ河、ウラル河などの沿岸に置かれたものである。

支那政府はチユンガリヤ國と同時に東トルケスタンをも占領し、其住民の一部をチユシガリヤに移して其農業の發達を企圖した。此東トルケスタンよりの移住民はタランチヤと稱へられて有名になつた。（註）

註　クロホトキン、カシガリヤ、九三―九五頁。

併し新占領各地に於ける支那主權は鞏固ではなかつた。回教徒移民の間には暴動が絕えず繰返され、其都度支那政府は之を鎭定するのに大苦心をした。一八五六年支那南西地方―雲南に勃發した回教徒の暴動は從來の暴動中例を見ない程兇暴を極めたもので、忽ち西部支那各地に波及した。これが有名な東干暴動で、チユンガリ全土と共に東トルケスタン領土をも荒廢其極に陷入れた。此暴動に直ちに合同したのは、同一宗教を奉じてゐた、チユンガリヤ及イリ河谷に於てタランチと稱されてゐたサルト族であつた。先づ支那人、滿洲人、其他東方より移住した軍事移民大虐殺が行はれたが、若年婦人は殺害を

逃れて奴隷にされた。一八六五年チユンガリヤ及カシガリヤに於ける支那主權は完全に打倒された。此時死滅した支那人の數はチユンガリヤのみでも五〇萬に達し、多數人口を有する大都市、殊に上部イリ河谷に在つたものは悉く廢墟に極し、其間を猛獸が横行するに至つた。渠溝（灌漑用水）は放棄された結果、以前の耕作地は荒野と化した。支那人虐殺は誠に前古未聞のもので、東干暴動の結果支那の蒙つた損害は果して幾何か想像もつかない。

支那の束縛を脱して後イリ河谷の東干はタランチ族のために蹂躙され、遂にこれに覇權を讓らねばならなくなつた。六〇年代の末期伊寧にはアビリ・オグリヤなるものを首領として、タランチ族の回教王朝が出現した。回教王朝の存在は極めて短いものであつた。アビリ・オグリヤの對露關係に示した傲慢不遜な態度、我が露國と如何なる協定にも應じようとしないこと、露國よりの脫走者を隱匿すること、これ等が一八七一年我が露國が前記王朝を征討するに至つた原因である。併し我露國の目的は領土占領ではなく、此に合法的な支那政權を再興せしめて、之と通商上政治上正當な國交を開かんとするにあつた。回教徒が支那人に對して行つた大虐殺當時我が露國は何れにも加擔せず中立的態度を持してゐた、併し虐殺後は、堅實な而して正當に組織された國家を持つことが、統治者なき國民又は忽然として現はれた國家の首班に偶然起こられた果敢ない政府を戴く國民を隣國に持つに勝ることを看取するに至つた。玆に於て我が露國政府は離叛せる支那西部各地方に支那主權回復のため、支那の回教徒暴動彈壓に援助することに決し、先づ支那軍をして我が露國の實力に依據し、容易に西方に進出せしめんがため、ウルガに小部隊を派遣し、又支那軍隊に對して糧食の供給も行つた。蓋し我が露國の糧食供給なかりせば恐らく支那軍隊は、城外地方と謀反地方との間に介在する砂漠を通過し得なかつたに相違ない。尙ほ我が露國の糧食供給隊は常に自國軍隊護衛の下に前進した。斯くの如く我が露國積極的援助を與へたればこそ支那軍隊は萬里長城よりチユガリヤ、カシカリヤに進出して、動亂を鎭定し得たのである。カシガリヤに於ては統治者ヤクブ・ベクの死（註）

註　一八七七年五月十七日。

により、支那軍の同地方占領は頗る容易となつた、ヤクブの死によつて生じた內訌のため自潰したからである。而してイリ地方は、前に一八七一年伊寧回教王國占領後支那との間に、支那がイリに達すると同時に之を引渡すべき協定が成立してゐるので、露國は自發的に支那に引渡した。イリ地方返還は一八八一年支那との間に締結されたペテルブルグ條約に準據して行はれたものであるが、同條約によれば支那の舊イリ省の一部、卽ちボロフドヂルー・ホルゴス兩河間及其以南は我が露國側に屬してゐた、それは支那國籍を享けることを欲しない土著民に我が露國領への移住權を與へんとする目的であつた。斯くして支那の舊イリ省より我が露國領に編入された土地は約二二〇・〇七平方哩で、支那に返還した土地は一〇八二・二九平方哩である。以上の外支那は返還した伊寧地方の代償として、チヨルヌイ・イルトウイシ河に沿ふコルヂル河よりアルカベク河に至る地區、二一九・九七平方哩を我が露國に讓渡した。支那政府はペテルブルグ條約により、住民を虐待せず、二年間（自一八八一年三月十日至一八八三年三月十日）希望の我が露國領移住を妨害せざる義務がある、尙ほ伊寧地方土著民の我が露國領移住を容易ならしめんがため、伊寧には露國の占領軍隊が殘留した。此軍隊護衛の下に二ケ年間に我が露國領內に移住したるものは六萬（タランチ及ドンガン）以內であつた。此移住民に許容された土地はセミンレチエンスク洲のチヤルン河沿岸、ケゲニ河沿岸、チリク河沿岸各地で、尙之が耕作に便ずる爲め政府は灌漑渠溝開鑿につき考慮する所があつた。

絕間なき國內紛爭、各種の民族鬪爭、民族支配權の變動と云ふやうなことは何れもチユンガリヤ人口を漸次減少せしむる原因であつた。敗戰民族は彼れ是れ二ケ年の間に何萬何十萬と滅ぼされた。現在、チユンガリヤに起つた最近の支那主權謀反事件後、チユンガリヤ人口の總數を確定することは勿論、之に移住せる各民族の居住地を確認することすら出來ない狀態である。吾人は當面の問題解說の便宜上目的の國土を、イリ河上流地方と、ボロホロ、天山兩山脈以北の他の地方との二地方に分ける。

イリ河上流地方は一〇ヶ年間も我が露國主權下に在つたもので、既に詳細研究も遂げられ、又これに關する統計的資料も十分蒐集されてゐる。之に反してボロホロ、天山兩山脈以北の地域に關しては研究が頗る少い。先づイリ上流地域に就いて述べよう。

イリ上流地方は支那領となる以前六三、〇二九・四平方露里卽ち一、三〇二・三六平方哩（ストレリビッキイ將軍の計算による）を有し人口は男女合計一三〇、二四〇人（註）

註　一八八五年トルケスタン總督府報告案三二頁。

であつた。總人口の中遊牧民四九、七七〇人で、土著民は各都會に一〇、九五〇人、各村落に六九、五二〇人（註）

註　イビド、三二頁。

である。之を種族別に看れば、人口の多數を占むるものは、伊寧地方に於てタランチン（テユルク出身）と稱されてゐるサルト族で、五一、八九一人に達し、總人口の約四〇%を占めてゐる。（註）

註　コステンコ、トルケスタン地方、第一卷三三〇頁。

これに次いで多數を占むるものはシボ及ソロンの二〇、〇〇〇人、カラ・キタイツイの三、五〇〇人。（註）

註　トルケスタン總督府報告案二九頁。

東干の五、〇〇〇人（註）

註　一八八四年度セミレチエンスク洲軍事總督報告、六六頁。

である。其他の四九、八四九人はキルギズとカルムイク人とである。

伊寧地方を支那主權下に聯合して後人口の大部分は我が露國領に移つてゐる。移住者はタランチ及ドンガンで、其數は五六、七二〇人（男三一、〇四〇人、女二五、五八〇人（註）

註　セミレチエンスク洲軍事總督一八八四年度報告、六六頁。

に達した。タランチン及東干の出國の後伊寧に殘つた人口は七三、五二〇人であつたが、支那政府は人民の露國移住の埋め合せとして、タランチン八、〇〇〇戸（四〇、〇〇〇人）をカシガリヤよりイリ地方に移住せしめて、國家の勞働力喪失を防がうとした。恰も此當時支那政府は伊寧地方へ、其他ヂユンガリヤ地方同樣に、主權民族たる支那人の殖民を行ひ、將來之より軍隊召集をも行はうとした。伊寧駐在の我が露國領事ウスペンスキイ氏の言によれば、此時の入國支那人の數は我が露領への出國者と同數であるとのことである。若し此計算を正當とすれば、支那イリ地方の人口は元の男女合計一三〇、〇〇〇となる。而して此總人口中優勢を占むるものは依然としてタランチンである。

タランチン族はチユルク族出身で、タシケント、チムケント、其他西部トルケスタン各都市に居住せるものと同じサルト族である。言語は同じくチユルク語であるが、西部トルケスタンで使用されてゐるものとは若干の相異がある。此相異は主として支那語と混じた結果である。タランチ族が始めてイリ河谷に現はれたのは前世紀中頃で、支那政府がヂユンガリヤ國を征服して後、其荒廢せる國土に殖民の目的で無數の勞働者を東部トルケスタン（カシガリヤ）より移住せしめた時代である。此の移民を支那人はタランチと呼んでゐたが勞働者の意である。併し移民自身は自己を此名を以て呼んだことは決してない。此タランチ族は名都市及クリッヂ地方の各部落に居住し、農業の外尚ほ産業及商業にも從事した。

東干。我が露國領に出國した者を除いて、イリ地方に殘留した東干族は甚だ微々たるもので、總數僅かに數百と云ふ有樣であつた。伊寧の支那政府に合せらるゝ以前彼等は綏定の四千人を始めとして、チン・チヤ・ホ・ヂ及びタルヂの各都市に居住してゐた。併し伊寧の支那に渡さるゝと同時に、彼等は支那人大虐殺の主謀者として、其まゝ殘留し得ず何れも國外に退去した。東干の都綏定は一八八一年市民撤去後、支那軍により特に破壞され、此に新に新都市を建設、之を新領土統治の中心とし、ヂヤン・ヂユニの所在地とした、伊寧地方に殘留した數名の東干は住居は勿論何一つ所有せず其上是と云つて定

まつた營業は何もない。これは支那政府に取つて最も不安な分子であり將來動亂の根源である。伊寧地方に殘留した東干族は我が露國領土に移住した同族と常に緊密な連絡を保ち、露領在留者中より勇士を選び、之をして漸次國境を越えてさせ、鄕土に於て同族と合し、支那人掠奪、殺殺を目的とする徒黨を作つてゐる。我が露國官憲は支那との間に締結されたペテルブルグ條約に準據して、露國々籍を有する東干族の伊寧領侵入を阻止することに極力努めて來た。イリ省よりも遙かに多數の東干族がボロホロ、天山兩山脈以北の地區に居り、彼等は山麓地帶の郵便（帝室）道路上に居住した。東干族の出生は非常に不可解なもので、彼等自身の傳ふる所によると、彼等の祖先は回教徒で、武力を以て支那を征服したのであるが、後次第に被征服者に服從し、何時しか其言語風俗、衣服を享受するに至つた。東干族は結婚により著しく支那人と混じたのではあるが、種族的特性殊に宗教は之を保持し、支那人に對する怨恨は何時解けやうとも見えず、今日東干族は支那官憲に取り依然として最も恐るべき分子である。

東干は中背で、肥滿してゐるのが特徵で、其額部は高く隆起し、眉は濃く灣曲し、眼は眼尻稍上り、顴骨は非常に低く、顏面は楕圓形、口の大さは中邊、唇は厚く、齒並は中位、顎は圓く、耳は小さく頭部に密著し、頭髮は黑く滑かで、鬚髯は薄く剛い。皮膚は滑かで、頸は大夫、四肢は中邊である。東干は支那語を使用し支那服を著用してゐる。併し宗教は回教で、剃髮を尙ぶ。農業、牧畜、其他各種產業に從事してゐる。家庭の風習は親權非常に强く、父は常に其家の絕對者である。婦人も其顏面を掩はない。住民は道義心に富み、勞苦を厭はず、而かも親切である。（註）

註　コステンコ、トルケスタン地方、第一卷、三三一、三三二頁。

我が露國に入つた東干族は露國に取りては實は好固の獲物で、我が國境移民は爲に一層强化された感がある、それのみか一朝支那と事ある場合には、彼等の中より信賴の出來る民兵を組織し、我が軍隊に助力せしめることが出來る。現在セミレチエンスク洲內に居る東干族は總計八、八〇九人內男子四、八七六人、女子三、九三三人である。（註）

註　一八八四年度セミレチエンスク洲軍事總督報告。

カルムイク族。カルムイクは蒙古種で、伊寧地方に於てテケス河沿線に住居し、主として牧畜に從事し、農業は頗る僅少である。カルムイクの當地に遊牧し始めたのは久しい以前のことで、往時は農業が現在よりも遙かに盛んであつた。それはテケス河から開設された灌漑用渠溝の多數の痕跡から察せられる。テケス河のカルムイク人の數はペテルブルグ條約締結後著しく增加した、それは同條約締結前セミレチエンスク洲內に居住してゐたカルムイク（イッスイク、クリスキイ郡及ウエルヌイ市附近に居住してゐた者）の支那領返還を支那が要求したためである。支那がカルムイク返還を要求した根據はカルムイク族は他の蒙古族同樣ダイッ國に於て軍務に服して居たもので、恰も露國のカザックの如きもので、之が他國に移住することは脫走に等しい、と云ふにある。長い間の外交文書交換の末、一八八五年九月遂にセミレチエンスク洲在住の全カルムイクに對して支那歸還を許された。これにより同年十月二日七四八家族が支那全權に引渡され、テケス河畔に移住せしめられた。（註）

註　參謀本部アジヤ課報第六五號一八八五年。

イリ地方在住の蒙古種の中には以上カルムイク族の外に尙ほシボ、ソロン、カラキタイツイなどがある。これ等は何れも軍事移民で、前世紀の中頃ヂユンガリヤ國崩潰後イリ上流域に定住せしめられたものである。彼等は城壁を繞らされた別々の城街に住み、其數は各城街とも男女合計二乃至三千で、各城街とも獨立のスムン（聯隊）を構成してゐた。シボ族のスムンはイリ河左岸、伊寧の上流約四〇露里の點に於てイリ河より水を惹き、イリ河に殆ど並行して約六〇露里延びてゐる灌漑渠溝に沿つて配置されてゐる。シボ族のスムンは、ソロン族のと同樣に純軍隊組織で、其任務はイリ省民を能く服從せしむ

ることであつた。シボ族のスムンは何れも方形の城壁を以て圍まれ、正しい計畫の下に建設されたものである。直線的な幅の廣い主要街路一城門から反對側の城門に十文字に通じてゐる。居住地は貧弱であるが不潔ではない。支那風建築の木造又は土造家屋が方形の邸の奥に建てられてある、これは街路通行者をして門外から家内の樣子を窺かせない爲でもある。門の内側には横墻卽衝立を設けて門外からの不作法な視線を避けてゐる。家の前面の壁は半ばまでは格子で紙が貼つてある。夏期には此格子は脫づされる、後方部の壁の格子も夏期には除去され、此に通風孔が出來、ために室内の空氣は新鮮なることが出來る。

各スムンに一又は二ケ所の禮拜堂があり、これに人間大の神體が安置してある。神體には極めて鮮明な色彩に染め出された衣服が著せてある。本尊は常に最上席に据へられ、其兩脇に多くの隨神（兇暴な表情をした軍神、傍神等）が竝立してゐる。禮拜所には必ず鐘があり又大きな鑄造品の獻納物がある。

禮拜所によつては大像神體の代りに金屬製の小神體を竝べてゐる、斯の場合には人形を竝べたやうである。

各城街内に教區所屬の學校があり、此に全城街兒童を集めて、誦讀、習字、孔子の教文を教授する。シボ族の文字は滿洲語である。何となればシボ、ソロン兩族は滿洲種族に屬するからである。學校には壁上成可く人眼に附き易い場所を選びて、延べ曲げられた棒、小板を懸け竝べ、之に罪科と年齡とに應じた棒型の種別が記されてある。

シボ族の家庭生活は嚴格な家族主義で、妻女及子女は父に絕對服徒である。

禮儀としては常に威嚴を保ち沈默を守るべきことが要求され、客となりては寡言を旨とし、坐席に關しては寡慾無關心、感情を顏色に表はざるを以て美點とされてゐる。

禮儀は家庭の重要事であるばかりではなく、家庭外にありても重んぜられて、街上に於ては完全に靜肅が保たれた。男子女子共に一樣に閑暇の場合口に運管を咬へて悠然と街路を歩行してゐる。談話は靜肅に、大聲を上げず、稍、鼻にかけた僅かなアクセントを附けて行はれる。シボ族の特徵は勤勉にして道義心厚く、彼等の間には竊盜强盜は勿論、喧嘩及其他輕微な犯罪が何一ないことである。貞操問題は特に嚴重に守られてゐる。（註）

註　コステンコ、セミレチエンスリ地方概要。軍事資料集、一八七二年第一二號、三七八―三八〇頁。

一八七〇年の末期、從つてタランチ回教王朝が未だ存在してゐた年、ウリヤスタイ山麓よりカルムイク種の蒙古人トルゴウト族がイリ上流地方に遊牧し來つた。トルゴウト族は汗の妃（汗自身はウリヤスタイに殘留）を主導者として來り、クンゲス河谷に居を定めた。一八七一年露國が伊寧回教王國を占領するに及び、トルゴウト族も自然我が露國々籍を享けたのである。次いで一八七三年課稅の必要上其戸口調査を施行した。調査の結果トルゴウトの總戸數は一、二五二戸、人口は六、一五一人（男子三、七六五人、女子二、三八六名）と判明した。（註）

註　一八七六年度トルケスタン年報、第四卷、一四六頁。

トルゴウト族の財產である家畜は、駱駝三〇〇頭、馬一、八二六頭、有角獸一、五二九頭、羊及山羊九、六五三頭。であつた。結局一戸宛家畜六頭以内となる、併し大多數のものは一頭も所有しなかつた。人民の大部分破れ小屋に住み、小屋持ちと云つても決して自慢にはならない、それは小屋は大抵襤褸で出來てゐるからである。斯の如くトルゴウトは極端な貧困者であるから、彼等から徵集する稅も之を最小限に止むることゝし。各戸三留宛を廢して二留宛とした。而かも小屋所有者の過半數が稅金免除されねばならない狀況である。（註）

註　イビト、一四九頁。

然るに其後間もなくクンゲス河畔を捨て、一八七八及一八七九の兩年カシガリヤ領に移動遊牧し、ユルドヅ及カラシヤル附近に居を定めた。我が露國政府は彼等の遊牧移動を放任した。現今、伊寧の我が露國領事の報告によれば、トルゴウト指導者たる汗の妃は一八八六年其息子をカラシヤルよりイリのヂヤニ・チヤニに遣はし、贈呈品竝書面を献ぜしめ、テケス下

流域とクンゲス河畔とに再び移動の許可を與へられんことを乞はしめた。噂によれば、此の願意は容れられて、彼等は再び元の居所に移住せんとしつゝあるとのことである。（註）

註　一八八六年アジア課第二三號。

伊寧地方のキルギスは大遊牧民の一分派で、アトバン族に屬し、更にアイト、ブズム、アリチヤン、コヌルブルキなどの民族に分れてゐた。此キルギスは、大遊牧民の露國に併合された後は露國々籍を享けて居たのであるが、其後再び支那領内に移り同地に於て東干及タランチによつて支那人に行つた大虐殺に參加した。一八六六年彼等はタランチ回教王朝に服從した、此キルギスはタランチ族と同一宗教を奉じて居たので非常な特權を與へられ、彼等はウズン・タウ山脈南斜面の地所を占領してゐた。然るに此等キルギスが畜群放牧のため屢々我が露國々境地區に侵入して、遂に露國をして伊寧回教王朝に對し、キルギス處罰竝に彼等の國境に於ける不法行爲禁止を要求せしむるに至つた。伊寧回教王朝は一面には我が露國の威嚇を恐れ、一面には此奸惡なる勇士、換言すれば掠奪者を服從させる力はないので、之を山脈の北方に移住せしめた、同地に於て彼等は回教王朝直割の下にタランチ族の部落の間に挾まれて遊牧するの已むなきに至つた。

此地方は草類に惠まれてゐないので、アトバン族は畜群飼料に不足を來たし、ために次第に貧窮に落ちていつた。一八七一年露國軍隊が伊寧地方を占領した當時、此キルギズは露軍の復讐を恐れて、ウズン・タウ山を越えてカシガリヤ領内に遁竄しようと企てた。此遁走を如何に彼等が取急いでゐたかは、彼等が途中目星しい家財、天幕用品、衣類など捨てながら逃走したことによつても知れる。此の遁走を追跡した露軍將校は遂に之に追著き、之を說得引返へさせ、アトバンには畜群飼料の豐富な從前の遊牧地に居住することを許可した。イリ上流域のキルギスは溫和で氣立よく而かも親切なのが特徵である。家庭內の德卽各家族間の情愛は彼等の間によく發達してゐる。此意味に於てキルギスは家長主義に立脚せる家族制度及種族制度の代表者と云へる。イリ上流域在住の各種族の中キルギスは最も物質的に惠まれてゐる。（註）

註　コステンコ、セミレチエンスク地方、軍事資料集一八七二年第一二號三八二―三八四頁。

一八八五年アトバン・キルギスに、約三、〇八〇名のキレエフ人がボロトル地方より來り合した。キレエフ人はテケス河下流域及クンゲス河沿岸に居を構へ、同地のカルムイク種のドルブン・スムン族を蹂躪し、其耕作地を荒し、其牧草を荒し盡した。（註）

註　アジヤ課、一八八五年、第六五號。

一八八五年、我が露國チヤルケンスキイ郡より約二〇〇戶のキルギス種のチヤジ族がテケス河谷に遊牧し去つた。追跡はしたが彼等を歸鄕せしむることは遂に出來なかつた。思ふに支那官憲は逃走者に保護を與へたものゝ如く、其後外交文書を以て之が引渡しを要求したが、今日に至るまで何等の效果もない。

轉じて、ボロホロ山脈及東部天山々脈以北に居住せる民族の檢討に移らう。當地住民はテユルク、蒙古、支那の三民族で、テユルク民族に屬するのは遊牧生活のみのキルギスと、ボロホロ、天山兩山脈北斜面の都市村落に居住せる土著生活のみのサルト（又はタランチ）族とである。

キルギスはチヨルヌイ・イルトウイシ河谷の曠野部、タルバガタイ及サウル兩山脈北斜面、蒙古アルタイの南斜面を占領した。これはキルギス種族中最東方居住者である、然るに一八六〇年代の末期蒙古アルタイ山の難を越えて其北斜面に移り、現在に至るまで科布多河の各支流沿岸に遊牧を營んでゐる。（註）

註　ボタニン、北西蒙古梗槪、第二卷、一頁。

蒙古アルタイ山脈南斜面の土地は、キルギスの土地と、蒙古種の遊牧民ウリヤンハイの土地とが互に相交錯してゐた、ウリヤンハイはキルギスよりも遙かに小數であつた。

チヨルヌイ・イルトウイシ河河谷の曠野に居住したキルギスはアバク・キリ族に屬するものであるが、（一）チヤンツイケイ、

(二)ヂャヅイク、(三)チエレウチ、(四)イテリ、(五)カラカス、(六)ムルク、(七)チユバル・アイグイリ、(八)メルキト、(九)イテングメン、(十)ヂャス・タバン、(十一)サルバス、(十二)チイモインの十二支派に分れてゐる。此中最も多人數のものは初めの二支派チャンツイケイ及ヂャヅイクで、アバク・キリ民族全體の半數を占めてゐる。彼等は蒙古アルタイ山脈南斜面に遊牧し、夏は其高原に過し、冬はチョルヌイ・イルチシ河及ウルング河の野に暮してゐる。チエレウチ、イテリ、カラカス、ムルクなどの各支派が彼等と混じて遊牧し、最後の二支派はアルタイ南斜面に遊牧してゐるが、これがギルギス種族分布の最極(東)端である。チャバル、アイグイル、イテングメン、ヂャス・タバン、メルキトの各支派はチョルヌイ・イルチシ河の左岸に遊牧し、夏はサウル山の高峰又はコクスン山中に過してゐる。(註)

註 イビド、二一六頁。

チョルヌイ・イルチシ河、ウルング河、蒙古アルタイ山の各地に居住せるアバク・キリ族のキルギスは、塔城駐在の我が露國領事バルカシン氏の言によれば、一二、〇〇〇戸卽ち六〇、〇〇〇人に達してゐる。彼等の居住地はタルバガタイ地方に屬してゐないのに拘らず、彼等はタルバガタイのヘベイ・アムバニに服屬した。現在彼等の統治に當つてゐるのはカスイム汗(アブルヂエライの後裔)で「グン」の稱號と兩眼附きの孔雀羽とを有する人である。

他の一部のキルギス卽ちタルバガタイ本領土卽ちタルバガタイ、サウル、ヂャイル、マイリの各山脈に沿つて遊牧してゐる種族は、アバク・キリ、ウワク、ナイマンの三民族で、其合計はバルカシン氏の計算によれば、五、六〇〇戸卽ち二八、〇〇〇人である。故に北部ヂュンガリヤのキルギス總數は男女併せて八八、〇〇〇人である。

以上示したるもの以外のタルバガタイ地方遊牧民と云へば、佛教を奉信する蒙古民族カラカルムイク、チャハル、オリシヤモンゴル、トルゴウトである。彼等の總勢は(バルカシンに沿ひ)五、〇〇〇戸卽ち二五・〇〇〇人である。前記四蒙古民族中其運命の最興味深きものはトルゴウト族である。トルゴウト族はヂュンガリヤ人と互に隣接してゐたのであるが其後互に絶えず爭鬪を繰返へし、一六二八年遂にトルゴウトは露領に移り、ウオルがとウラルとの間に居住した。然るに其後一七七一年トルゴウトの大部分は汗ウバシを先頭に、バルカシ湖方面に、後更にイリ地方に遊牧移動した。支那側の資料によれば、歸還トルゴウトの總數は四六〇、〇〇〇戸であると云ふ。(註)

註 ヤキンフ氏著、一八二九年のヂュンガリヤ誌第一、第二卷一八八頁。

併し途之の疲勞、途中の遊牧民との衝突などのため大多數は滅びて、イリ河畔に達し得たるものは二八〇、〇〇〇人に過ぎない。(註)

註 イビド、一九二頁。

一八六〇年代ドンガン暴動時代トルゴウトはイリ地方を出でゝ北部ヂュンガリヤに移り、同地のタルバガタイ南斜面を占領した。

現今北部ヂュンガリヤに居住してゐるトルゴウトは二地區に分れ、一部はチンギリ、ブルグニ兩河水源(蒙古アルタイ南斜面)地區を占めてゐるが、これは本國土の最古參住民である。他の一部はタルバガタイ南斜面を占むるもので、既に述べたるが如く六〇年代イリ地方より移動して來たものである。此兩トルゴウトを區別する爲、ブルグン地方トルゴウトを「タブイン・スムイントルゴウト」(五ケ城人の意)と稱しタルバガタイ地方のトルゴウトを「ツオフル・トルゴウト」と呼んだ。

前者はコブド總督に隸屬して、五「スムン」に分たれ、各スムンを治めてゐる首長には諸種の等級があつた。首長最年長者は「ワアン」と稱へられ、其營はシャラ・フルスン(ブルグン河畔)に、又夏期營所はコク・ヂュレク山中、チョガン・ゴル河の水源にあつた。(註)

註 ボタニン、北西蒙古概要、第二卷、四三頁。

後者卽ちタルバガタイ地方のトルゴウトはタルバガタイ以南に住居して、三首長に治められ、三首長中の最年長者がワア

ン（卽ち君王）となつた。ワァンの所在地はチユヅル●チトイルガン天然境、ハンツイクメツイ河畔のフウチン●スメ廟にあつた。（註）

註　イビド、四四頁。

トルゴウトの外貌は本家本元の蒙古種ハルハ族とは著しい相異がある。彼等の身長は中位寧ろ小さい方で、躰軀は强健とは云へない、瘦せて骨ばつた躰（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、一二五頁。

である。顏面の特徵としては肥つて肉の多い鼻、顏面の粗野な點、兩顳顬の强く壓縮された頭髏骨（註）

註　チユンガリヤ誌、一六頁。

を揚げねばならない。トルゴウトの道義心に關しては、其觀察が未だ不十分で積極的斷定は下されない。トルゴウトの言語は特別な蒙古語で、ハルハ蒙古語とは僅かな相違なので、彼等は共一族で、ブルグニ河とチンギリ河各水源に住居してる小數のウリヤンハイ人の言葉同樣、自由に之を解する。テユルク語の解るトルゴウトは、隣接のキルギスと親密な交際をしてゐる者丈けである。（註）

註　イビド、一六頁。

トルゴウトの服裝は長上衣一枚を纏つてゐるが、其型は我が露國敎會勤務者の下服に似たもので、服地は薄靑色の南京木綿、小さな立襟を附け、緣廻りには圓い金屬性ボタンを附けてある。上衣の上に革帶を締め、之には革袋に入れた火打道具と短劍とが吊してある。履物は黑又は黃色の革靴。短い而し幅廣の脛當の附いたものである。男子の頭髮は一束に編み、前頭部のみ僅か剃り上げ、口髭及顎髯は毟り落してゐる。髮飾りの帽子は低い、圓錐形の頭を切落したやうな形の、厚地の羅紗製で、緣の折返しの少いものである。冬は長上衣を防寒服と換へ、帽子も毛皮の耳隱し後頭隱し共に幅廣のものに換へる。

女子服も靑色南京木綿製のもので、男子用長上衣に酷似したものである。トルゴウトの女子は黑く剛い頭髮に堅油を用ひて、頭髮の光澤を出し、風變りな結髮の形の崩れを防いでゐる。耳には直徑一吋にも達する銀製耳飾りを著けてゐる。（註）

註　イビド、一六―一七頁、ブルジエワリスキイ、第三旅行、一二五―一二六頁。

トルゴウトは佛敎を奉じてゐるが、西藏と間斷なく親密な交際を續けてゐる他の蒙古族程の純潔さは持たない。彼等の堂祠は圓錐形大形假舍で粗朶葺家根である。

住家は蒙古式厚羅紗幕舍で、キルギスのものに比べると厚羅紗を張る木組が違つてゐる。幕舍共物も內部施設も其貧弱なのに驚く。富祐者は僅少である。一般にトルゴウトは支那官憲の苛稅壓制に苦しめられだ民族で、驚くべき貧窮と虐待とに喘いで居る、幕舍は大抵孤立して居て、キルギスの如く部落に集まらない。トルゴウトの生活は流浪の牧者生活で、彼等の全財產は家畜、殊に羊（牡羊）で、農業に從事するのは少數の極貧者に限られてゐる。耕作地の最も多く見られるのはブルグニ、チンギリ兩河の下流域である。

畠はソシニクと云ふシヤベルに似た獨特の鍬で耕し、灌漑水道によつて之を灌漑する。多く蒔かれるのは大麥と小麥で、黍とタバコは稀である。（註）

註　チユンガリヤ誌、一七、一八頁。ブルジエワリスキイ、第三旅行。一二六頁。

タルバガタイ地方在住のトルゴウト總人口は二、四〇〇戶、一二、〇〇〇人である。

カラ●カルムイクは八スムン（聯隊）に分れて住んでゐるが、共數は一、六〇〇戶、八、〇〇〇人で、共遊牧地はウチ●クルスタイ、ヂヤイル、ウルカシヤルの各地である。チヤハルとオリシヤ●モンゴルの兩族は各々一千戶五千人宛の一スムンを構成、前者はクルスタイに、後者はカラ●ブラク及ムクルダイに遊牧してゐる。（註）

註　參謀本部アジヤ課報、一八八五年第六五號。

カルムイク族は全部軍隊組織を造り、全員兵役に服す義務がある。

キルギスは支那官憲により馬匹及羊を夫々徵集され、其上牧草及燃料を軍隊に供給し、官有耕地の耕作補助に當るべき義務を負はされてゐる。（註）

註　バルカシン、手記。

タルバカタイ地方在住の種族で、數に於て優勢な前記二種族（キルギス及各派カルムイク）の外に、當地には尙ほ土著民として支那人、滿洲族、シボ、ソロン、ドンガン、テユルク族のサルツイ（商人）及ドブルヂン、チユグチヤンに住む韃靼族が居住してゐる、これ等各族の總數は一萬一千に達してゐる。タルバガタイ地方全人口の總計を示せば次の通りである。

種別	人口
キルギズ	二八、〇〇〇
カラカルムイク	
チヤハル	
オリシヤモンゴル	二五、〇〇〇
トルゴウト	
支那人	
ドンガン	
ソロン	
シボ	一一、〇〇〇
サルト	
韃靼	
合計	六四、〇〇〇

これに尙ほ、蒙古アルタイ南斜面に遊牧してゐるキルギス種アバク・キリ六〇、〇〇〇を合すれば、北部ヂユンガリヤ人口の總數は一二萬四千となり、其中一一萬三千は遊牧民である。

ヂユンガリヤのタルバガタイ地方以南、北緯四六度以南の住民の數を確定することは遙かに困難である。此地方の住民は二グルウプに分れ、一は蒙古アルタイに沿ふ一帶を占め、遊牧のみを業とする蒙古種族であり、他のグルウプは土著民で、ボロホロ、天山兩山脈北山麓の豐饒地區を占めてゐる。此豐饒地區の中心は北緯四四度にある。以上二地帶の中間には。エビ・ノル湖よりアヤル・ノル湖及更にグルブン、トングウト砂地に沿ひ、ヂユンガリヤ荒野のゴビ大砂漠に接する地點に向つて延びてゐる廣大な、砂地の、住民の居ない地域が横はつてゐる。

第一グルウプに屬するのは若干旗の蒙古種で、蒙古アルタイ兩斜面に跨りて遊牧し、コブド知事の管下にも屬し、ウリヤスタイ總督の監督下にもありて、而かも新疆省總長の支配を受けてゐない。

此等種族の遊牧舍は、蒙古アルタイに竝行し、バイツイク・ボグド、ハイツイク、ココ・ウンヅル、シヤルイヌルなどと各地各様の稱呼を持つ低い第一線山脊以南にはない。

蒙古種全體は東西兩蒙古族に分たれ、前者に屬するものは純蒙古種で、後者に屬するものは雜種族で、言語から云へばデユクに近い、トルゴウト、デユルビユト、ハルト、ウランハなどがそれである。西方蒙古族は科布多地方に居住し、東方へ純

正）蒙古族は更に南北兩族に分れ北族はハルハ族と呼はれるもので、全部ウリヤスタイ總督府治下にあり、（一）ツエツエン汗、（二）ツシエツ汗、（三）サイン・ノイオン、（四）ザサカツ汗の四族系統に分たれ、各族系統は又夫々若干族に分たれる。

今吾人が問題としてゐるヂユンガリヤ領（蒙古アルタイ南斜面地區）土は三西方蒙古種族と三ハルハ種族とが占領してゐる。

西方蒙古種族中、ブルダニ、チンギリ兩河上流域に遊牧してゐるトルゴウト族と、前記各河最上流域に遊牧するウランガ又はウリヤンハイ族とに關しては既に述べた通りであるが、尙ほ之に補足すべきことは、トルゴウト族遊牧地は東方が彼等と血緣のツアハチン族と境を接してゐることである。此族の住民は自己を「オレト」と呼んでゐる。此族は蒙古アルタイのウラン・ダバ峠よりボルヂヨン峠まで、北斜面には南斜面にもある。（註）

註　ボタニン氏論說に添附されたる地圖參照。

此族を統割してゐるグン侯はアルタイ本脈南斜面に居住し、冬はウリヤス河畔に過してゐる。ツアハチン族は廣く農業に從事し、南斜面ウリヤス河流谷の地區を耕し小麥大麥を作つてゐる、之に反して北斜面に於ては大麥のみを耕作してゐる。（註）

註　ボタニン、北西蒙古、第二卷、四二頁。

アルタイのツヤハチン族の後方のチユンガリヤ領内には、エンケ・ザスイケ、タヂヂン・ウリヤンハイ、マニ・ザスイク又はダグヂン・ザスイクの三ハルハ系種族があり、何れもザサクツ汗族系に屬するものである。第一「旗」は最西方ハルハ「旗」で、其領土は蒙古アルタイ北斜面のチチク・ノル湖附近に最も多く横はり、各族の南方發展狀況は不明である。（註）

註　イビド、一一〇頁。

住民は農業を營むものなく、穀類は之を隣接の地區より購入してゐる。

ダツヂン、ウリヤンハイの「旗」は前記の各族の東方、蒙古アルタイの南北兩側にある。エンケ・ザスイク各族の領土と此等の旗との境界はフルム湖畔にある。又タツヂン・ウリヤンハイの東方にはシヤルグイ・ゴル河岸に至るまで、ノハンチ河下流に、タツヂン・ウリヤンハイとマニ・ザスイク各旗領土との境界がある。蒙古アルタイ山脈南側に於てタツヂン・ウリヤンハイは西方ツアハチン族と、又東方マニ・ザスイク族と夫々境を接し、南方はゴビと接してゐる。住民はツアガン・ゴル河沿岸に於て農業を營んでゐる。（註）

註　イビド、一一〇頁。

マニ・ザスイク族はタツヂン・ウリヤンハイ以東にあつて、ヂユンガリヤ砂漠に接してゐる「旗」の最後のものである。これより以東には他のハルハの各族があるが、其領土は全然ゴビ大砂漠中に存在する。（註）

註　蒙古族全部に就いて詳述することは吾人の目的ではない、以上は只ヂユンガリヤ國内に領土を持つ種族に就いて略記したものである。

ボタニン氏は各蒙古種族の遊牧地を確認することは出來たが、住民の數を明かにすることは遂に不成功であつた。

蒙古アルタイ山南側に居住する蒙古種族に關する我が露國側資料は不確實を免れないが。天山北麓一帶に住局する種族に關する我が露國側硏究は更に不確實なものである。更に角土著民の住居してゐる地帶がヂユンガリヤに於ける支那主權の大動脈なのである。此地の移住地は北（帝室）路の西方極點である小都市タキアンズザに起り、鎖の如く（各所に於て斷絶して）東に延び、天山々脈最東端まで連續してゐる。廸化より鎭西までの地區は、タキアンザより廸化に至る間の地區よりも移住者が多い。此區間に於ける移住者を有する山麓地帶の幅は所により約五〇露里ある。何れにしても伊寧－奇臺間の北路オアジスは、南路の同等地區オアジスよりも移住者が多い、それは天山北斜面は、非常に濕度に富み、農耕に必要な河流を無數に發出せしめてゐるからである。一千露里以上に亙る北路全延長に居住してゐる種族は何れも土著民のみで、サルト（タランチ）、支那人、東干、滿洲族、シボ、ソロンである。オアジスと部落との連鎖は遠く鎭西を越え、多山々脈最東端附近に達して辛やく盡きてゐる。これに、ナルイン・カラ、ツルクリ、ツグルク、アダクの諸村落から成るサルト族の大オア

ジスがあり、此オアジスの最北點はノム●トロゴイと云ふ、大ゴビの入口にありて、所謂チュンガリヤの東を塞いでゐる村落である。村落は戸數辛く四〇、村民の住む粘土小屋は支那式建築である。ノム●トロゴイの南東、天山最東端（ウムイル●ウンドル山ツエガン●ドブスイク山と稱するもの）附近、華美な公園地區の間に僅ほ一つサルト族の部落バイ●トロゴイと云ふのがある、これは住民數から云へばノム●トロゴイの二倍である。更にバイの南方にサルト族の部落で、タル、ホドン●タムの二部落が、北路終極オアジスの東部を塞いでゐる。住民（サラト）の談によればノムよりホツン●タムを越えて、大高山を横斷することなく、平坦な道路により哈密に達することが出來る。（註）

註　イビド、一七三、一七五、一七八、一七九頁。

北路沿道各オアジス住民總計は目下全然不明である、これは各地が平定され、支那主權が新たに制定さるゝと共に更に移民が行はれたからである。商人の實驗者の談によれば當地へ新移住民が間斷なく送られ、一部は支那奧地から、一部はカシガリヤからの移民である。ドンガン暴動のため荒廢した各地も其後年を經ると共に住民を増し、破壞された都市村邑も次第に再建され、放棄されてゐた灌漑水路も順次修築された。次章に於て吾人は北（ボグドハン）路沿道の各重要都市に就て記載するから、此には只豫測の意味で、北路沿道の住民は一五〇、〇〇〇人と述べて置く。蒙古アルタイの南側、ブルグニ以東の蒙古種族は約五〇、〇〇〇と見られる、斯くしてチュンガリヤ各移住地の人口總計は概略次の通りと考へられる。

一、イリ地方	一三〇、〇〇〇人
二、タルバガタイ地方	六四、〇〇〇人
三、アバク●キリのキルギス	六〇、〇〇〇人
四、アルタイ南側の遊牧蒙古種族	五〇、〇〇〇人
五、北路沿道の土著民	一五〇、〇〇〇人
合計	四五四、〇〇〇人

第二章　主要都市

（イ）イリ地方。

綏定。

此城街は現在ではイリ地方統治の中心であり、統治者（チャニ●ヂュニ）の居城で、北京を距ること四、五七五露里。

註　マツソフスキイ、手記。

我が露國々境ホルゴスより四五露里である。（註）

註　アジヤ資料集第二四卷、一一九頁。

城街の周圍は高い土塀を繞らして防禦に備へてゐる。城門は西門―普通は閉鎖してある、―南門及東門の三門である。城街の南東二方には夫々市場があり、南方のはサルト族市場で、高く薄い土塀が繞されてあり、東方のは東干族市場である。城街の西方には露國領事館附屬地がある。此附屬地よりサルト族市場に通じてゐる道路は更に延びて、哨兵の居る南門にまで達してゐる、南門哨兵の居る天幕は練兵場にあり、練兵場は、城廓本門（南門）の衞りとして、壁で半圓形に取圍んだ地區である。此南門より北門に向けて主要大街路が突抜けて居り、大街路の兩側には支那市場と小店とが連なつてゐる。此大街路は途中、東西兩城門の間の大街路と交叉して、これによつて城街を四區に分けてゐる。此の南東區にはヂャニ●ヂュンの陣邸、役人事務所、演劇場などがあり、北東區にはカルムイク族統治者（同時にイリ地方會計官）邸宅、其其警護隊宿舍、事務所の外、糧秣廠、兵器製作所、火藥庫等がある。北西區には、市場に使用してゐる土地以外は空地となつてゐるが、これは將來兵舍建設を豫定されてゐる。南西區は、警察署及スイドン城街長所屬の建物で塡められてゐる。

城街禮拜所は、南門から貫通してゐる街路の終點、北側城壁附近にあるが、之とは別に城廓の東干族市場附近に、スイド

ン城街の靈を祀つた大廟がある。ヂャニ・ヂュン自身毎月一日及十五日の兩日隨員を從へて嚴かに參拜する。大廟堂の反對側に若干の國民小劇場があり、其後方一小丘上に砲兵兵舍が設けてある。此の兵舍と城街内兵舍（地方長警衛兵舍）の外に九兵舍があり、其中八兵舍は城街の東及南の兩方面を圍み、殘一兵舍は綏定よりホルゴスに向ふ低い道路上、綏定より四露里にあるタルチにある。此兵舍は、通路を橫斷してゐる沼澤性河流の合岸高地にあるが、彈藥庫を有し、火藥製造所を有する點に於て特に重要性がある。（註）

註　シチエテイニン、アジヤ資料集、第二四卷、八五、八六頁。

綏定の東六露里の、伊寧街道上に支那政府は新綏定建設中であるが、之に軍隊及ヂャニ・チュン陣邸を移す豫定である。其外壁は一八八五年既は完成したが、内部建築は何も未だない。（註）

註　イビド、一一七頁。

伊寧。

此城街を露西亞人は「舊」又は「タランチの」と云ふ形容詞を附けて呼び、之より西方三五露里にありて、一八六六年東干族のために破壞された新伊寧又は支那伊寧と區別してゐる。タランチの伊寧は廣いイリ河谷の右岸、河流を去る三露里の點にある。綏定からは山上の高い道路では三二露里、山麓の低い道路（利用者の多い）では三八露里を離れてゐる。伊寧の多數を占むる種族はタランチで、これが、此城街の支那臭味を帶びてゐない所以である。併し市内最優秀建築である回敎々會の二建築は全然支那式である。（註）

註　之に反して支那靈廟は何れも貧弱で不體裁なものである。
が、各個人住宅はサルト族の式で建てられ、蘆葺屋根の泥小屋で、橫太の、薄暗い、不體裁なものである。形のよい裝飾のある、瓦屋根の、煉瓦造りの建築は伊寧には餘澤山はない。

市内に市場は二ケ所で、タランチ族市場（城壁内）と支那市場（街外れ）とである。市場は、各店の構へが廣く、其内には入口の突き當りに長い賣臺を設けて、客人と室の内部との境としてゐる點が、中央アジヤ各地の場と異なる所である。市場街には屋根がなく、從つて商人も客人も共に雨や陽光に晒されたまゝである。支那市場には婦人の商賣してゐる店がよくある、これは回敎徒の都市に於ては勿論見られない。市場の支那部には數軒の飲食店がある、出される皿數が夥しく多いのに其價の低廉なのに驚かされる。飲食店に入るのには、直接街路に面してゐる料理場を通らねばならない。此料理場の臭氣は遙か遠方から感じられ、恐ろしく臭覺を害する。

市内の主要街は小石を以て補裝され、兩側には煉瓦で土留めをした溝が設けてある。市街は一般に見すぼらしく且つ不潔であるが、支那人部は殊に不潔である。併し支那人部の民衆の往來は、回敎徒街とは比較にならぬ程多い。

城街の外觀は見榮のしない又何等魅力のないものであるが、其内部は邸内室内共に更に一層不潔である。邸は不潔一杯、室内の塵芥と亂雜とは正に想像以上である。居室は富者や資産家のものでも採光、通風、淸潔を缺いてゐる上に、支那家屋以外にはない全く獨特の臭氣がある。伊寧の唯一の裝飾は城街を取卷いてゐる無數の庭園である、夏期は之に市民が移轉する。此等庭園は伊寧が露國主權の下にあつた當時特に多く造設された、露西亞人は特別地區に居住して、家の周圍に庭園を造る外、街路にも樹木を植え廻したのである。伊寧の支那に引渡されると共に露西亞人は家屋、庭園、建物を全部其まゝ殘して去つたのである。一八七二年伊寧の住民は七、六九〇人で、其中露國人（軍隊を含み）一、〇〇〇人であつた。（註）

註　コステンコ、トルケスタン地方、第一卷、四二七―四三七頁。

現在に於ても伊寧には同數の露國人が居ると見て差支へない。現在伊寧には我が領事と其事務所とがあり、五〇名内外のカザクが警備員として駐在する。尙ほ領事館には現地語通譯養成の學校が附屬し、之に郵便支局があつて電信局が附屬して

ゐる。伊寧には定住してゐる露國商人はない。

伊寧在住支那人中基督教を奉じ、自らカトリックと稱へてゐる者約八〇名ある。彼等は街端れに假禮拜所式の石造小教會堂を建立してゐる。伊寧の基督教は北京より佛國宣教師が傳道したものである。宣教師は今日も尚ほ此に傳道に來てゐる。

伊寧に居る支那軍隊は全部で二〇名である。

チン・チヤ・ホ・ヂ。

城街は規模餘り大きくはなく、綏定の北西一八露里にあり、周圍に厚い城壁を繞らし、外敵の防禦に備へてある。城壁の四隅、城内に兵舍を建て、城外、南東隅チン・シユイ・ヘ河の河畔には更に第五兵舍がある。(註)

註　シチエテイニン、アジア資料集、第二四卷、二五頁。

ルツツグン。

ルツツグン城街は規模小にして、チン・チヤ・ホ・ヂの近くにあり、周圍は厚い城壁を繞らして、外敵の防ぎとしてゐる。城外城内何れにも兵舍はない。住民は支那人、ドンガン、サルト族で、何れも農業を營んでゐる。(註)

註　イビド、八四―八五頁。

(ロ)　タルバガタイ地方。

ドルブルヂン。

此城街は、塔城及びザイサン兩地より烏蘇城街に達する通路の交叉點にあるを以て、其位置の戰略的重要性のために僅か數年前に建設されたものである。伊寧の支那に引渡さるゝ以前、タルバガタイ地方統治の中心は塔城に在つた、然るに支那政府は、一朝露國と兵を交ゆるに至れば、露軍は直ちに伊寧に進出して綏定し塔城枝隊の後部を脅威するは明かであるので、塔城の位置は戰略的に不利であるとなし、遂に七〇年代の末期に至りドルブルヂン要塞を設築し、之にタルバガタイ地方統治の中心とし、之を統治者(アムバニ)の居城とした。

城内主要物件はアムバニの陣屋、兵舍、市場、カルムイク修道院である。兵舍はドルブルヂン及其附近に合計七兵舍があり、其中三兵舍はザイサンよりドルブルヂン入口附近、道路の右側にあり、第四公舍は市場附近、第五兵舍は塔城方向への出口附近、道路の右側にあり、第六兵舍はエミリ河右岸城街南西端にあり、第七兵舍はエミリ河左岸、アムバニ寓舍の南にある。アムバニ居所は三邸から成り、何れも高い壁を以て圍み、其中には諸種の建物が建て連ねてある。兵舍からアネバニ寓舍に通じてある並木路の兩側には裁縫所、蒙古及滿洲兒童教育の圖書館附き學校、藥局がある。兵舍脇には警察署と警察長官舍宅とがあり、警察長官舍宅脇には市場があり一部は支那人市場で、一部はサルト族市場である。

ドルブルヂン兵舍は合計七ケもあるが、防禦力から云へば無に等しい、只市場附近のものが若干注意すべきものであるがそれとて此に金庫、兵器庫、糧秣廠があるために過ぎない。市場附近の兵舍の正面は約五〇「サージエン」、各隅には堡藍、稜堡の如きものを突出し、濠は涸渇し、其深さは一「サジエニ」以下、其幅は三「サージエン」以下である。(註)

註　イビド、八〇―八一頁。

バルカシン氏の報道によれば、ドルブルヂン住民は五、〇〇〇以内で、内三千は軍隊が占めてゐる。ドルブルヂンはエミリ河に跨り、タルバガタイ地方の中心に位し、之より北東七〇露里の間車輛を通じ得る道路がブルガスタイ方向に延び、更に科布多地方に通ずる駄馬道がある。ドルブルヂン―シホ間は車輛道路を以て連絡し、塔城―烏蘇間の道路とドルブルヂンとは、クルテ及サルイ・フルスイン哨所に通ずる三〇露里と四〇露里の枝道を以て連絡してゐる。イリ地方とドルブルヂンとの間は、サルイ・フルスイン哨所の先きはクブ河谷によりエビ・ノル湖に向つてゐる駄馬路によつて連絡してゐる。

官有畑に適する土地はドルブルヂン附近には塔城附近に比べて遙かに多い。

露國々籍を有してゐる韃靼人及サルト族はドルブルヂンに市場の店を借入れて商賣してゐるが、露國商品を價額五〇、〇〇〇留まで置いている。勿論露國商品以外にも倘乾果、「マタ」（木棉織物）、「シャイ」（絹織物）等を販賣し、支那商人は陶器、各種細工品、「ヂユンシユン」（現地釀造酒）、阿片、野菜等を商ひ、カシガリヤ人は肉類及麵麭を販賣してゐる。城街外には官營煉瓦工場があり、蘆を使用して煉瓦の外、下水用樋を燒いてゐる。（註）

註 バルカシン、手記。

塔城。

此城街を支那人はタルバガタイと稱してゐた。城街は一七五五年チャニ●ルン帝の時以、天然境チユフチャに建てられたもので、海拔一、四七〇尺にあつた。東干暴動勃發以前は商業都市として相當に榮え、人口二萬を有してゐた。一八六四年東干のため破壞されて後數年間其まゝに放任されてゐたが、一八七一年支那政府がイリ地方併合のため派遣した、ヂャニ●ヂユン●ジユンの來著してより、城街には各種民族が廢墟の跡に假小屋を建てたのを手始めに、漸次建て增されて遂に城街が再び完備するに至つた。新設タルバガタイ地方統治の中心を此ドルブルヂンに移したことは、此城街の發達と澎張とを阻止する原因となつた。我が露國領事バルカシン氏の證する所によれば、現今同地の人口は四、五〇〇に達し、中露國々籍を有するもの（サルト、キルギス）一、〇〇〇人である。城街所在地點は我が國境堡壘バフツイの東方二〇露里、砂漠中の低地、チユフチャ及カラス兩河合流點附近である。倘同地は長城（ヂャ●ユイ●グアニ附近）より天山地方、同地より更にタルバガタイに通ずる所謂ボグドハン車輛道の終點である。

塔城城街は一般の型を破りて、他の支那各都市の如く周圍に城壁を繞らしてゐない。塔城の防備は市の南東部に在る兵舍が唯一である。同兵舍中には塔城市長、同事務所、市長特別護衛兵約二〇名が居る。市の南方部には住民が稱して要塞としてゐる古い、宏大な併し空虛な、半ば破壞してゐる兵營がある。これに例の東干事變の際はヘベイアンバニを初めとして共他塔城守備隊が立籠つたのである。叛徒は幾度か突擊に失敗した後遂に之が封鎖を敢行した。然るに守備軍側は遂に要塞を支ゑる能はずして、城壁東南方に設けた拔け道により夜間脫走の止むなきに至つた。併し東干人が之を占領するに至つたのは、城內に一名の守備軍も居らざるに至つた時であつた。一八七一年、ミエリ河流谷に滿洲國主權の興隆して後、本市は再建され、伊寧の支那に引渡さるゝまで、ヂャニ●ヂユン親ら共邸宅及手兵と共に之に據つた。（註）

註 シチエテイニン、アジヤ資料集、第二四卷、八一、八二頁。

塔城の住民は頗る多種族で、各種族毎に纏まりて各地區に配分されてゐた。支那區街には支那市場、支那人禮拜所、支那警察があり、人家の數は二〇〇に達してゐる。特に障壁を繞らしたシホ及ソロン族街は人家四〇〇戸を有してゐる我が露國人に對しては、ペテルブルグ條約に基き特別地區を配當してあるが、之には一般人家の外領事館建物及サルト族市場があり、市場に於ては我が露國々籍を持つ韃靼、サルト族の外倘カシガリヤ人も商業に從事してゐる。露國人街の戸數は一〇〇戸、住民は一七五名、隊商納屋四棟、回教々會堂二ケがある。塔城に出稼ぎに來るキルギスは露國及支那國民の邸內に幕舍を張つて生活する。ドンガン暴動前塔城は可なり重要な商業都市であつたので、露國商店代理店及領事館があつた。塔城の貿易額は年二、〇〇〇、〇〇〇留に達し、露國商品は主に紅茶と交換された。現在塔城の商取引は年額辛く百萬留程度である。

支那內地より塔城及ドルブルヂンに送られる商品及軍隊供給品は、多くは、クイ●フア●チエン別名ククホトを經由して駄馬道路によつて送られる、此の駄馬道は蒙古砂漠によつてコブド、ホルン●トホイに通じ、更にチヤガン●オボ、バイムルザ、ブルガスタイなどの通路を經て露領にまで通じてゐるものである。露國領土よりの支那駄馬輸送はドルブルヂン、或は

之を過ぎてタルバガタイ地方南端によりシベツイ哨所を越えて塔城に抜けてゐる。露國商品（主にモスクワ綿織物、鐵、鐵製品、ステアリン蠟燭、砂糖）は、イルビツ、クレストフなどの各移動市場及び、セルギオポリ、ウルヂャル、バフツイなどに通ずる郵便道路によりセミパラチンスクから搬入される。露國商品は入荷便利にして一部は汽船を利用し得る（テユメニ—セミパラチンスク間）ことゝ、低廉な卸賣値とのため塔城に於て、支那製同一品よりて遙かに廉價を以て販賣されてゐる。塔城に移入される露國商品（トルケスタン及中央アジヤ地方産物を含む）は年總計五〇萬留である。露國産物及製品の大部分はボグドハン郵便道路を或に駱駝に載せ、或は荷車に積みて、烏蘇、綏來、廸化、ツルハンの各地に更に移送される。露國商品はドルブルヂンへて、砂漠地方遊牧民（チョルヌイ・イルチシ河、クラン河等の）にも賣込まれてゐる。露國商品の交換品として支那人より受領するものは銀（ヤムブイ）で、此銀はキャフタに持込まれて、同地に於て茶代及茶をカルガンよりウルガを經てキャフタまでの運搬料として、支那人及蒙古人に支拂はれるのである。尙タルバガタイ遊牧民より露國商品と交換に提供される畜獸（主に羊）は或は露國領、或は天山地方（伊寧、烏蘇、綏來、廸化）に誘導されて轉賣される、皮革、獸毛等はセミパラチンスクに移入される。セシパラチンスク洲の露國農民及カザク等は穀類、木材等を塔城に搬入するが、時にはそれが年額二萬留に達する。韃靼人、サルト、キルギスは商取引の外、塔城に於て各種の製造業を營み、畠を借入れて農業に從事する者さへある。野菜類の栽培はサルト族と支那人とである。果樹園は塔城には見當らない。（註）

註　バルカシン氏の手記。

塔城の南方一二露里の地點、アク、タム河の河畔、平坦な開濶地に二兵舍が建設されてあるが、何れも烏蘇—塔城街道を逸脫してゐるので軍事的には何等意味のないものである。（註）

註　シチエテイニン、アジヤ資料集、第二四卷、八二頁。

（八）　北方（帝國）郵便路上の都市。

タキヤンザ。

タキヤンザは、帝室郵便路上を、綏定よりタルキン狹谷を越えてゐる道路に向つて進む途中第一の都市で、之を取圍んでゐる城壁は薄い粘土造りのもので、西方入口には二兵舍がある。其中西方兵舍は土丘上に建てられ、正面の幅は三三「サージエン」である。兵舍の濠は深さはないが水の多い濠である。大市場、禮拜所、二軒の宿場これが都市の全體である。住民の大部分は商賣を營み、農業の發達は極めて微弱である。近郊耕地に產するものは玉蜀黍と阿片製造の罌粟である。一八五五年六月タキヤンザは附近キルギスをも混じた支那脫走兵暴徒の襲擊を受け、市街は燒かれ、店舖は掠奪され、商人は殺害された。

精河。

精河の位置はキヤンザの東、エビ・ノル湖の南、精河の右方、本流を去る一露里の點に在る。都市西方の備へには兵舍がある。道路の左方、河岸に大兵舍が聳え、道路の右方には三兵舍が設けてある。大兵舍を去る八〇步の點から都會となるのであるが、初めの百步程の間は高さ二尺の土塀を繞らした、街端れ獨特の建物が續き、次いで支那式城門を過ぎると都市の大街路に出る、其兩側には市場が開かれてゐるが、何れも土塀が續らしてある。城門の近くに祠が建てゝあり。市場の延長は四〇〇步に及び、其間にタランチン（サルト族の）及支那店舖が間歇を置いて並び、市場の東端に近く、主要街路より北に向ひ橫斷街路があるが、これは都市北方の護である特別兵舍に通じてゐるものである。市場の東端には別々の土塀を繞らした建物があり、都市東方城門附近には街路の右方に劇場があり、左方には祠がある。城壁を出でゝ一、二〇〇步の點、耕地の間に、道路を挾んで兩側に兵舍があるが、これは都市東方の備へである。以上の如く精河は三方面よりの攻擊に對して防備があり、就中西方にある障碍は最も多く、北方の警備は最も薄い。

註　オムスク軍管區司令部報告第五五號、一八八〇年。

都市人口は、レゲリ氏によれば、約八〇〇名である。（註）

註　帝國ロシヤ地學協會々報、一八八一年、第四卷、二〇一頁。

烏蘇。

烏蘇はカラス河畔、可成り有名な支那都市クル・カラ・ウスの廢墟より北方八露里の地點にある。一八八〇年シホを訪れた我がチフメネフ氏の言によれば、シホは土塀を以て圍まれ、タランチン及支那の兩市場を有し、タランチン市場は西方部にありて、これには警察署及市長舍宅がある。支那市場は市の南方及東方部にあるが、建物は蘆葺屋根の粘土家屋で而かも密集してゐる。街路は狹く補裝されてない。市中には軍隊は駐屯せず、軍隊の集結してゐる防備ある兵營は近郊各所にある先づ北方には都市を去る二五〇歩の地點東方には都市より九〇〇歩の點に二兵舍があり。都市の南方約八露里にはクル・カラ・ウス市跡には又別の堅固な兵營があり、其近くに同名河畔には歩兵一、〇〇〇名を容るゝ兵舍がある。（註）

註　オムスク軍管區司令部報第五五號、一八八〇年。

一八七九年烏蘇を訪れたレゲリ氏の言によれば、烏蘇市は互に遠く相離れてゐる二部分から成つてゐる、即ち周圍に六兵舍を有する要塞と、二兵舍と糧秣廠とを附近に有するタランチン市場とである。本市の人には約一萬人である。（註）

註　帝國ロシヤ地學協會々報、一八八一年、第四卷、二〇一頁。

綏來。

綏來は共同隔壁を以て圍まれてゐる南方、中央、北方の三部からなり。郊外部は東干暴動の際破壞された。一八七九年レゲリ氏の綏來訪問の當時同市人口は三千人（支那人及タランチ族）であつた。（註）

註　イビド、二〇九頁。

都市附近に三兵舍があり、其中二兵舍は烏蘇街道に、他の一兵舍は廸化街道にある。各兵舍には歩兵一千名が收容されてゐる。（註）

註　オムスク軍管區司令部報、第五五號、一八八〇年。

廸化。

嘗ては可なり大都市であつたが、東干叛亂後は著しく寂れた。現今再び人口を增し漸次澎張の徵を見せ、殊に一八八五年、新疆省軍司令官が哈密より兵七千を卒ひて來り、之を其居城と定めて以來一層さうである。（註）

註　參謀本部アジヤ課報、第六五號、一八八五年。

廸化はウランベ、アルツインチ兩河の合流點附近にあり、東方はボグド・オル山脈最終支脈に圍まれ、西方は優良な石炭を藏する、アルツインチ山に接し、此の山に突出してゐる岩上に古塔が聳えてゐる。現在の都市は長さ數露里に及び、土地人の言によれば、此人口は支那人及びドンガン族合せて三萬人と云ふことである。近郊に居住して農業を營むドンガンの數は七千人に上つてゐる。都市の南端には一小要塞がある、古くヤクブ・ベクの建設に係るものである。ウランベ河西岸には、ドンガン暴動の際に破壞された滿洲都市の跡が殘つてゐる。（註）

註　レゲリ、帝國ロシヤ地學協會々報、一八八一年版、第一七卷、二〇九頁。

奇臺。

奇臺は廸化を離るゝこと一二〇露里

註　一八七六年軍事資料、第一一號、二四五頁。

にある。奇臺は平野、ハバ河の左岸にありて、周圍約五露里を有してゐる。市內三ケ所に城砦、正確に云へば內城があり、其一に、ベフツオフ氏往訪の當時は、軍政署があり、又これに豫備軍用品が保管されてあり、他の二城には主として商業及

產業機關が集められてあつた。

市内最良且つ繁華な街路は大内城の中にありて、同時にこれが市場でもある。此街路の兩側には約半露里の間小店舗が連續し、店は何れも主家の内に設けて幅廣の目に著き易い扉を街路に突出してゐる。市中は一般に言語に絕した不潔さで、街路と云はず家屋内と云はず全般的に不潔であるために、市民の間には各種の病氣が猛威を振つてゐる。

奇臺の人口は一八七六年八、〇〇〇を數へ、其中支那人が六、〇〇〇を占め、殘餘はタランチ族と東干族とであつた。市中の商賣は軍隊大部隊（五千名に達する）の駐屯した當時は頗る賑ひ、商店の數は二〇〇、卸食庫二〇に及び、僅かなりとは云へ英國の金屬製品、雜貨類、さてはシャツ地に至るまで而かも非常な高値で販賣されてゐた。我が露國產物も或る物は非常に良好な賣れ行きで而かも其價額は頗る高値を示した、例へば羊六留、乾葡萄一「プード」四〇留、乾杏子一「プード」二〇留、普通鼠色石鹼一「プード」二〇留、ステアリン蠟燭一「プード」四〇留、砂糖一「プード」四〇留、鐵一「プード」一五留、燐寸一箱一二哥と云ふ値段である。ズウテエンに於ては鐵と金屬製品との需要が非常に多く、これ等は全部露國品であるが常に非常によい賣行であつた。（註）

註　ペフツオフ、チユンガリヤ概要、四八―五〇頁。

鎭西。

鎭西は北（帝室）路に在る都市中最東方のもので、當地より郵便路は南路に移り哈密に向つてゐる。鎭西は奇臺を離るゝこと三〇二・五露里である。（註）

註　一八七六年軍事資料、第一一號、二二五頁。

當市は一七三一年支那人の建設せるもので、一七七三年洲廳所在都市となり、チエン・シ・フと命名された。（註）

註　イアキンフ、チユンガリヤ其他の概要、一八二九年、六一頁、レナトの地圖には鎭西は山脈の南側、コムラ（ハミ）の西方に記入されてゐるが、これは誤りである。

現在の都市は東部と西部の二部から成り、東部は軍隊街又は滿洲人街で、西部は支那人街卽ち商業街である。各部とも土塀を繞らしだ四邊形である、軍隊街はチエン・シニ・フと云はれ、商業街はバリコンと稱されてゐる。（註）

註　「バルクリ」の支那發音では「ル」は響かないのが普通である。

以上二街間の間地は幅約五〇「サージエン」ある。外見では商業街は軍隊街よりも廣大に感じられる、併し隔壁内に地區は空地が多く、爲に市街地區と都市外廓との間に廣大な空地が殘されてある。市民居住地の中央に高塔が聳えて居り、其下には都市南部に通ずる交通門がある。都市南部には市公署及總督邸がある。中央高塔からは三大市街路が、一は北方卽ち市の北門、一は東方、一は西方の三方に夫々通じて居り、其中東方街路が最も長く、小店舖が間斷なく連續し、市中最も繁華な個所―市場を出現してゐる。ボタニン氏の言によれば、鎭西は、氏の訪問した支那都市中商業の最も盛んな都市で、鎭西の如く多數の而かも活氣ある店舖は、科布多、哈密、ウリヤスタイ何れにも見られない。建築物も鎭西のものは比較的美しく又富裕である。例へば當地には市街に多くの高塔がある外、塑像細工又は怪物の彫刻を飾りにした門で、祠堂の門と云つた風の、何時も閉つてゐる門がある。塑像細工の飾りのある大家屋は時には淋しい町にもある。市街の活況を以て科布多、ウリヤスタイ、哈密の各都市に勝つてゐる鎭西は、其不潔に於ても亦驚くべきものがある。市内建築物と城廓との間は勿論、市内各横丁は何れも蕪芥に埋もれ、時には水の溜まつた泥濘を現出し、乾燥してゐるのは市場だけで、中央高塔より北門に通じてゐる大市街路も不潔で常に蕪芥の山があり、塔門の下は乾いたことのない泥濘である。商業街と云はず要塞街と云はず樹木は一本もない、之に反して廓外に於ては市の西方も南方も庭園に包まれた支那人小屋が無數に撒き散らされてあり、小屋の間の土地は悉く菜園で、何れも入念に耕されてある。軍隊街の南と東との大空地は全部墓所であるが、其廣さは一露里にも及び、其中央に祠堂が設けてある。

市の外郭には北、東、西の三門があり、通常北及東の二門を開いて西門は閉塞したまゝである。外郭の周圍には淺い水の涸れた濠を繞らしてある。北門は二重で、前門は、郭壁から前方に突出されて、郭壁に直接に穿たれてゐる第二門の防備となつてゐる側防部に設けてある。（註）

註　ボタニン、北西蒙古概要、第一巻、一五二―一五四頁。

一八七五年鎭西の人口は、ソスノフスキイ氏の證明する所によれば、六、〇〇〇を數へた。商業は北京及天津より來る小商人によつて營まれ、外國品は頗る少量で、それも哈密よりも二〇％高く販賣されてゐる。最も驚くべきことは、あれ程支那各地に普及してゐる「チョフ」と稱する銅貨が鎭西市場に全然姿を現はしてゐないことである。（註）

註　ソスノフスキイ、一八七四―七五年、支那に於ける露國學術通商探險隊、一八七六年軍事資料、第一一巻、二二四、二二五頁。

（二）　科布多領に於ける都市。

ブルント・ホイ。

前述の各都市とは全く別に、北方チュンガリヤ、科布多洲領内に一小定住地ブルン・トホイと云ふのが、ザイサンから奇臺、鎭西、科布多の各地に通ずる道路にある。此都市は、前記各都市に比較して其位置が稍中央にあると云ふ一事だけで若干注意に價するものである。

ブルン・トホイはウルング河の左岸、同河のウルングル湖に注ぐ地點の近くに在る。此都市は極めて最近、一八二年に創設されたばかりで、其以前同地には逃走者や各種の出稼人が千人も住んで居たのである。最初此の移住地は現在の都市の西方四〇〇「サージェン」の地點に設けられたのであるが、其後市民の増加すると共に現在の都市の地點に家が建てられるやうになり、遂に外壁を繞らすことになつたのである、が此頃から此地方に東干賊徒が出沒するに至るや舊市民は安心の出來る障壁を持たない所から、何れも新居地に逃れ込むに至つた。

一八七二年支那政府は、此小部落を都市に創り上げ、其南方に小要塞を築いて、之に百名の守備隊を駐屯せしめたのである。

都市の輪郭は、未成品煉瓦を以て築かれ、長さ約二〇〇「サージェン」、幅七〇「サージェン」の方形で、郭壁の高さは三「サージェン」ある。都市内部に通ずる城門は二ヶ所で、市内には二、〇〇の人家があるが、何れも未成品煉瓦を以て隣家と密接して作られた小家屋で、僅少の庭が附屬してゐる。

ブルン・トホイは幾度かドンガン族の襲撃を受けたのであるが、ドンガンはこれに格別危害を與へなかつた、彼等の暴力を振つたのは市の西方に在る舊居住地に限られてゐた。

市の南方約一二〇「サージェン」の地點に小要塞が築かれてある、其郭壁は市の郭壁と同樣未成品煉瓦を以て築き、方形の一方は約四〇「サージェン」である。郭壁の高さは一三呎を越えてゐない、郭壁の前方には濠があり、濠の土は直接郭壁に向けて投擲されてあるので、壁際に傾斜のある土手が築かれ、自由に障壁に上ることが出來る。郭壁には銃眼が設けられ、郭壁の内側には踏埃が築かれてゐる。

註　ペフツオフ、チュンガリヤ誌、一九―二一頁。

一八七六年支那政府は、塔城、奇臺兩都市近郊の農業振興の目的を以て、ブルン・トホイ住民の多數を前記兩都市に移住せしめた。其結果、ブルン・トホイの人口一、二〇〇名は、守備隊を除いて僅か二〇〇名に過ぎないことゝなつた。（註）

市の郊外各所に、支那人及トルゴウトの耕作した畠が眼を惹く。夏期當地住民は想像も出來ない多くの蚊軍のために甚しく惱まされてゐる。

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、一五頁。

第三篇　チュンガリヤの産業

第一章　植　物

チュンガリヤ砂漠の特殊植物。「サクサウル」。「ドイリスン」(旱鐘草)。山岳植物。農作物。園藝。チュンガリヤに於ける農村土地區分表、穀類播種及收穫表。支那人に對する伊寧地方の農業價値。北チュンガリヤ地方の生產力。

チュンガリヤ領土は、之に生ずる植物の特質から押して、吾人の旣に熟知せるアラロ・バルカシ地方の曠野と全く同樣である。樹木と云ふものは曠野には何處にもなく、僅かに山中にだけ見當るが、それも北斜面、溪流が流れて濕氣を與へてゐる狹谷の出口附近に限られてゐる。併し平野には植物は點々として存在してゐるが、これは全く土質に左右されてゐるのである。例へば鹽澤地は殆ど無條件に不毛で、又砂地か、黃土の混じてゐる砂で覆はれた土地は、砂漠獨持の植物に包まれてゐるのが多い。チュンガリヤ砂漠に於て最も特色のある植物は、トルケスタン砂漠と同樣サクサウル(Halaxylon ammodendlon)と稱する、灌木の稍大きいの位の植物で、之に次いでは小灌木のやうな發育をする「麻黃」Ephedla と云ふのがあり、更に背の底い、遠方からは雜草のやうに見える(Reaumura songarica)と云ふのがある。砂漠の砂地以外の所には「ハルムイカ」(Nitraria schoberia)、「ムレスヾメ」(荳科)(Caragana pygmaea)などの灌木が有り、草類では「オカヒジキ」(Kalidium, suaeda, kochia)のが多く、稀にある泉の傍には(Lasiagzostis splendens)があるが、これはトルケスタン地方に於てケイヤと云はれてゐるものである。尙ほ春には(Zygophylum macropterum, Phelipaea, salsa, Cynomorium coccineum:)なども見當る。丘陵の鞍部には大黃、チュリップなどさへありて曠野の旅行者の眼を驚かせてゐる。

此外、砂地の大部分を蔽つてゐる曠野植物の中では、場合によりては畜類の飼料ともなり、燃料として役立つヨモギ屬を擧げねばならない。

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、三四、三五頁。

サクサウルは、外形は頗る見窄らしいものであるが、燃料として誠に貴重な材料である。高さ二「サージエン」位まで育ち、砂地にのみ生長する。サクサウルの木は、外見から云へば、幹が著しく不正且つ彎曲し、葉は細かい鱗形であるのが特徴である。此木の幹は一様な、年毎に生長する年輪から成つてゐるのでなく、極めて不齊な生長の胚葉を寄せ合はせたやうな觀を呈してゐる。斯の如く幹の各片の發育の不齊なことはやがて、十分發育した胚葉が自然他を押除けて延び、其結果此木の特徴である不均齊、空虚、瘤などを生ぜしむる原因となるのである。サクサウルは生長極めて遲い、併し其丈夫は驚くべきもので、一度水に浸さんか、鋸も斧も齒は立たない。然るに脆弱な性で碎け易く細かくなり易い。此の非常に丈夫なこと、脆いこと、幹の不正なためにサクサウルは建築用材としても、細工にも役に立たないが、他面燃料としては屈强なものである。サクサウルは燃燒の際火力の强い火焔を發し、燃燒した後にも火力の强い火を殘す。サクサウルの加熱材料としての性能を確めんがために行つた實驗の結果は、大きさ中邊の部屋に据えられた和蘭式煖爐に對しては、一「プウド」半のサクサウルで一日十分である。卽ち一ヶ月約四五「プード」で足りる譯であるが、此量は一立方サージエンの樺薪に相當する。アラル海小艦隊(スイル・ダリヤ河上)の存在當時汽船燃料として、サクサウル二「プード」は祐に石炭一プードに匹敵すると認められてゐた。(註)

註　コステンコ、トルケスタン地方、第三卷、一五六、一五七頁。

ヂュンガリヤに於けるサクサウルの北方分布限界は、ブルヂエワリスキイ氏の認定によれば、北緯四七度二分ノ一(ウリユングル湖)である。

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、三六頁。

サクサウル林は日蔭は作らないが、遊牧民に取りては冬期に於ける貴重な援護物である。サクサウルの林中には砂漠固有の諸動物も其隱家を持つてゐる、狼、狐、兎、野鼠、鳥類ではサクサウル雀、サクサウルの「カケス」などである。野生の駱駝はトルケスタン地方には棲息してゐないが、ヂュンガリヤ地方には非常に多く、何れもサクサウルの林を好み、植物の若芽を食して棲息してゐる。(註)

註　イビド、三六、三七頁。

ドイリスン(とは蒙古語で、ギルギス語では「チイ」)は草本類に屬するもので、ヂュンガリヤに於ては北緯四八度まで擴がり、土地は粘土質の鹽澤地で多少濕氣のある所を好む。ドイリスンの莖は非常に細い蘆の莖の如き形を持ち、丈夫であるが脆い。高さは六乃至八呎時には九呎に達することもある。一塊の藪に生長し、藪の根許は大抵直徑一乃至三呎である。此藪から春新芽を吹出すのであるが、古い莖は大抵は畜獸に喰ひ取られるのであるが、其他は枯れて風に吹飛ばされて了ふ。ドイリスンの藪の間の土地は粘土の露出してゐるのが普通である。此植物の生長してゐる土地は陰氣な景色である、靑味が少く影は更に少いからである。

ドイリスンの茂味には雉、シヤコ、鶉、雲雀などの鳥類、兎、狐、狼、貛などの獸も棲んでゐる。尙ほ此植物は家畜に對しても魅力を持つ飼料である。キルギスは此植物の莖で筵を作り、之を幕舍の四方に張廻はし、入口に垂れて扉の代用としてゐる。又支那人は縁廣の縁ある帽子を作り、箒を作つてゐる。(註)

註　イビド、三七、三八頁。

木本類(非培養)はヂュンガリヤに於ては山中にのみある。空氣が乾燥してゐるために森林をなしてゐるのは、山の北斜面と溪流ある狹谷に限られて居り、エゾ松(トド松)が主で、蒙古アルタイに於ては落葉松(Larix sibirica)が主である。山

中植物の詳細に關しては既に前に山脈の記事中に述べてある。（註）

註　第一編、第二章。

從つて此にはチュンガリヤの栽培植物に就いて一言するに止める。栽培植物及一般に草木はチュンガリヤに於ては、人工灌漑の施し得るオアジスに丈け生長する。伊寧のオアジス（上流イリ河の）は栽培植物、灌木、野菜、草本類等に對してトルケスタン曠野のオアジスと全然同一條件にある、故に伊寧のオアジスに於ける土地灌漑法は、トルケスタンに於けるものと同樣である。伊寧のオアジス庭園に生長するものは白楊及サルヤナギであるが、何れも中部アジア全部に最も普及してゐる植物である。之に次いではカラガチと稱するニレ屬（庭園の裝飾となると同時に、特に堅牢を要する細工に使用される）、鈴懸け、ミヤマナナカマド、林檎、李、櫻、杏子、桃、桑などてある。葡萄はタシケントよりも成績が惡く、タシケントよりも南にあるトルケスタン●オアジス種の種類がない。綿は、主としてイリ河左岸に住むシボ人によつて僅かばかり栽培されてゐる。小麥は伊寧地方に於ては正に三〇倍の收穫がある。小麥の外、米、黍、大麥などが作られる。大麥は馬の飼料として燕麥の代りに使用されてゐる。馬の飼料として、畠、庭園、菜園などに紫ウマゴヤシが作られる、これは年三四回刈入れが出來る。蔬菜はタシケントと殆ど同樣に作られる。伊寧地方に於ては野菜栽培は、此栽培の熟練家である東干人のために非常に良好な成績を擧げてゐる。次に掲げた二統計表は伊寧地方に於ける農業上の土地區分と穀種及收穫を示したものである。本表は一八七三年我が露國のセミレチエンスク官憲の蒐集した資料を基礎として作製し、一八七六年度トルケスタン年報（第四卷）に掲載したものである。（註）

註　一八七六年トルケスタン地方年報第四卷。

一八七三年度伊寧地方に於ける農耕地區分。

	地區名	伊寧地方第一地區	同第二地區	同第三地區シボ族	同タランチ族	同カルムイク族	同キルギス族	第三地區合計	以上合計中カルムイク族中トルブン・スムン種族
デシヤチナを單位とす	屋敷地	一、一〇〇	二、四五〇	六〇〇	一、〇〇〇	—	—	一、六〇〇	—
	庭園菜園其他	六〇〇	八〇〇	二、四〇〇	二、〇〇〇	—	—	四、四〇〇	—
	耕地	一九、五九五	三五、〇〇〇	一五、〇〇〇	三七、〇〇〇	八、〇〇〇	二、〇〇〇	六二、〇〇〇	五、〇〇〇
	草原及牧草地	—	二六、九五〇	—	—	—	—	—	—
	好適なれども未だ耕作されざる土地	五、〇〇〇	九、三〇〇	八、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇五、〇〇〇	八〇、〇〇〇	二九三、〇〇〇	六〇、〇〇〇
	森林	—	二、〇〇〇	—	四〇、〇〇〇	六三、〇〇〇	八、〇〇〇	一一一、〇〇〇	三、〇〇〇
	可耕地全面積	二六、二九五	九八、八〇〇	二六、〇〇〇	一八〇、〇〇〇	一七六、〇〇〇	九〇、〇〇〇	四七二、〇〇〇	六八、〇〇〇
	不可耕地	九、七〇五	二、〇〇〇	二四、〇〇〇	四二〇、〇〇〇	五七四、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	一、一七八、〇〇〇	二四〇、〇〇〇
耕地百デシヤチンに對する播種地の割合	秋蒔小麥	—	—	四分ノ一	四分ノ一	—	—	三分ノ一	—
	黍	九・三分ノ一	二、七六九	二・三分ノ一	三分ノ一	一一、〇〇〇	四九、〇〇〇	六三、〇〇〇	一四、〇〇〇
	春蒔小麥	二五・三分ノ一	五、三五〇	二八、〇〇〇	九、〇〇〇	八、〇〇〇	一九、〇〇〇	六四、〇〇〇	九、〇〇〇
	大麥	一五、〇〇〇	二、〇三二	四分ノ一	四、〇〇〇	一、〇〇〇	—	五・四分ノ一	二、〇〇〇
	米	六、〇〇〇	—	四、〇〇〇	—	—	—	四、〇〇〇	—
	其他穀類	四四、〇〇〇	五九、〇〇〇	六五、〇〇〇	二・四分ノ一	一三、〇〇〇	—	八〇・四分ノ一	三五、〇〇〇

註　「耕地百デシヤチンに對する播種地の割合」の欄中の數字は％にあらずして、各實際播種面積を示す。屋敷地の中には庭及建物用地だけを計算した。『庭園、菜園』の項中シボ族所屬地として掲げたるものの内譯は、綿栽培地八〇〇「デシヤチン」、タバコ二〇〇「デシヤチン」、瓜畑二〇〇「デシヤチン」、庭園約一〇〇「デシヤチン」、ウマゴヤシ畑約一、一〇〇「デシヤチン」である。又タランチ族所屬地の内譯は、庭園六〇〇「デシヤチン」、其大部分は田舍邸に附屬してゐる、瓜畑二〇〇「デシヤチン」、ウマゴヤシ畑一、二〇〇「デシヤチ

ン」である。耕作地の中には、一八七三年に播種を見たる土地のみならず、灌漑用溝渠を有する土地全部を算入した。『草原と牧草地』の項に於ては、第一及第三兩地區所屬のものを掲げなかつたが、これは土著民は野生の草類刈入れを營まない爲である。『好適地』とは穀類の栽培に適するものと、牧草刈に適するものの意である。『不可耕地』の中には牧畜に適する地區と、全然何の用にも適しないものとを含めてある。

伊寧地方各地區に於ける一八七三年度の播種及收獲量。

註　一八七六年トルケスタン年報第四卷。

地區名	伊寧地方第一地區	同第二地區	同第三地區シホ族	同タランチ族	同キルギス族	同カルムイク族	第三地區合計	以上合計中カルムイク族のドルブン・スムン族
播種（單位チエトウエルチ）								
秋蒔小麥	—	—	六七	七二	—	—	一三九	—
黍	二四一	六二〇	七二	二四	一五〇	八七	三三三	六〇
春蒔小麥	三、〇七九	九、三四一	三、九九五	二、八九二	四一六	四八三	七、七八六	二六八
大麥	二、九八四	六、〇六三	四二	一、二七五	—	五〇	一、三六七	五〇
米	一、一七五	四七	七六	—	—	—	七六	—
其他春蒔穀類	一、一八五	四八二	一、六六二	三三六	—	七三	二、〇九九	七三
馬鈴薯	二五	—	—	—	—	—	—	—
收獲（單位チエトウエルチ）								
黍	一〇、八四五	一八、六〇〇	三四一	九四八	三、九一九	二、一三〇	七、三三八	九六八
春蒔小麥	八六、三四三	二六〇、二五〇	三七、三〇四	四六、〇三四	三二、八四八	三七、七七六	九四、八九二	三五、三四四
大麥	四二、七七六	一八二、八六〇	二九六	二〇、四六六	—	五二三	二一、二八五	五二三
米	三三、五〇〇	二一、五五〇	一〇、八七七	—	—	—	一〇、八七六	—
其他春蒔穀類	一四、三三〇	三三、五八九	三〇、八九三	三五、六六五	—	一、三五〇	五七、九〇八	一、三五〇
馬鈴薯	二五〇	—	—	—	—	—	—	—

播種量は勞力の數に左右されるものであり、勞力の數は地方政治情勢によりて增減するものであることに疑はない。支那政府は此勞働力の不足を、我が露國より讓渡された地方に、讓渡の當時旣に之を發見した、此に於て支那政府は東部トルクスタンのタランチ族を新領土に移住せしめようと百法手段を講じたのである。支那軍隊はヂュンガリヤとカシガリヤとの隷屬確保のため必要ではあるが、現地の穀物に餘裕のない限り存在出來ない、何となれば何千里を離れた支那內地から大砂漠を越えて軍隊を移動させることは此上ない不便を伴ふからである。さりとて現地の穀類が缺乏してゐては軍隊は餓死する外はない。是れ卽ち支那政府が、新領土の支那移民安住のために、伊寧地方の穀物增產策を講じ、以て同地方を、支那西方諸洲駐屯の全支那軍隊の穀倉たらしむる必要ある所以である。以上の外支那政府は規模稍小さい穀倉を、穀物耕作に適する土地のあるボロトラ河畔に開設する計畫を持つてゐる。一八七五年ボロトラ河を測量したラリオノフ氏の證言によれば、同河畔の農耕可能地は二〇〇、〇〇〇「デシャチン」に及んでゐる。現在放棄されてある灌漑渠溝の跡から判斷するに、ボロトラ河畔の灌漑地の總面積は五〇、〇〇〇「デシャチン」に達してゐる。此の地に支那政府は支那內地の農民三、〇〇〇名を移住せしむる計畫を懷いてゐるのである。

タキアンザより鎭西に通じてゐる北帝室路沿道の各オアジスの氣候は、伊寧地方に比して若干荒れてゐる。當地の生產能力の歐羅巴露西亞南方地方の生產力に似てゐる。當オアジスに生長する草本類の分量は、勞働力缺乏のため、住民の要求を辛く滿たす程度である。

タルバガタイ地方に於ては、土地が砂漠性であり、氣候も亦荒れてゐる關係で農產は更に不良である。是れ卽ち支那が當地の軍隊を極減してゐる所以である。

北部ヂュンガリヤのチヨルヌイ・イルトゥイシ河各支流沿岸中最も多く穀物耕作の行はれてゐるのは、クラン、カメルチク兩河の(ツルト天然境界附近)沿岸である。當地の農耕從事者は支那人、オリヨト(バルルイク)、キルギスである。前二族

はクラン河沿岸の天然境シャラ・スメよりクラン河の南方に折れる地點までの土地を耕し、キルギス(アバク・キリ族)クラン河の南に折れて以降の土地を耕作してゐる。農作物は小麥、大麥、黍、煙草、ケシ(可なり多量)、西瓜、胡瓜、瓜、玉蜀黍、大根等で、何れも八月下旬に成熟する。煙草とケシとはオリヨト人が作り、西瓜、瓜、其他野菜は主として支那人が作つてゐる。ケシは勿論主として阿片のために之を作るのであるが、尙ほ油を搾りて科布多、塔城、サザンズなどの各地へ送り出してゐる。剩餘穀物は科布多に輸出される。小麥粉は現地に於て(一八七六年)長さ七「チエトウエルチ」の袋が五「ラン」宛で賣買されてゐた。(註)

註　ボタニン、北西蒙古誌、第一卷、二七、二八頁。

然るにクラン河畔に於ける農業は、ボタニン氏の言によれば、地方鎭定と同時に多數のオリヨト(バルルイク)族が共舊居住地タルバガタイに續々歸還したので、次第に減少した。(註)

註　イビド、二八頁。

第二章　動　物　界

ヂュンガリヤ動物は其種類僅少である。ヂュンガリヤ獨特の代表動物。野生馬(ケルタグ)。野生駱駝。野驢馬、野生驢馬、其他ヂンガクヤに棲息する野獸類。ヂュンガリヤに於て飼養せらるゝ家畜。伊寧地方の牧畜情況。ヂュンガリヤに於ける牧畜發達の障害、羊の飼養。有角畜類。馬。駱駝。

ヂュンガリヤは植物に惠まれてゐない丈け、又動物にも惠まれてゐない。ブルジエワリスキイ氏は二回のジュンガリヤ旅行(一八七六年及一八七八年)に於て、家畜を除いた哺乳動物は僅か二七種を見出したに過ぎなかつた。此二七種中大部分は、山岳地方及ウルグン河流域に棲むもので、砂漠地帶のものは僅か一三種に過ぎない。ヂュンガリヤ砂漠の最も勝れた代表動物としては羚羊、ハラ・スリツイ、西部西伯利地方特產の羚羊、野鼠二種、野生駱駝、野驢馬、(Asinus hemionus)、野生驢馬(Asinus onager)、野生馬(Equus Trzeualskii n. sp.)である。(註)

註　ブルジエワリスキイ、第三回旅行、三九頁。

ヂュンガリヤの鳥類ではブルジエワリスキイ氏の蒐集せるもの一六〇種類に及んでゐるが、其中の多數は山中に棲息するものと、ウルグン河流域に棲むものとである。砂漠定住のものとしては辛く十種類位のもので、其中比較的多いものを擧ければ、サクサウル地帶の懸巢、砂漠鶯、烏、有角雲雀などで、稀に腨毛のある木莵、サクサウル地帶の雀を見ることがある。此所には渡り鳥も甚だ少い。ブルジエワリスキイ氏の說明によれば、ヂュンガリヤ地方は鳥類の定住は勿論渡り鳥の長距離飛翔の場合の休息所にもならない、何となれば接壤地方が何れも餌のない砂漠地方なためである。例へば南には天山山脈の高峰が聳え、續いて水の少い未開のタリム砂漠である。此等の原因により渡鳥は北方南西伯利より南方地方に飛翔する際、ヂュンガリヤを逃避する。(註)

註　イビド、三九、四〇頁。支那官邊地理學者は、ヂンガリヤ及東部トルケスタン地方に棲息する鳥獸類を列記してゐる中に、彼等が脂肪島と稱して次のやうな島を擧げてゐる。『イリと廸化との間に脂肪島と云ふのが居る、體軀の大さは殼を拔け出た雛の雛程で、色は黑く脂肪の多い島である。人家の屋根や庭上に降りて啼いてゐる時、之を誘へは肩なり腕なりに來て留まる。之を捕へて押け附けると其肛門から脂肪が飛出る。斯く脂肪を搾つて後之を逃がしてやる。此島が即ち古代支那に於て、石で押へ附け脂を採り、脂を採つて後之を放つと云はれてゐる島である』(イアキンフ、ヂュンガリヤ記、第一、第二卷、サンクトペテルブルグ、一八二九年、二二一頁。

ヂュンガリヤ砂漠の爬虫類の中では蜥蜴二種が(Thrynocephalus, Todarees)多い。(註)

註　イビド、四〇頁。

ヂュンガリヤ及イリ地方に棲む毒蜘蛛はフクロ蜘蛛、蠍、盲目蜘蛛、カラ・クウトなどで、就中カラクウトは最も恐るべきものである。

ヂュンガリヤ砂漠の大哺乳動物の中で重要なのは野生の馬と野生の駱駝とである。

野生馬、キルギス語ではケルタグは、ブルジエワリスキイ氏の新發見に係るもので、從て其も (Equus Przevalskii) と氏の姓を冠してゐる。（註）

註　一一八一年帝國ロシヤ地學協會々報第一八卷第一章中ポリヤコフ氏の論說參照、同論說に挿繪がある。

此野生馬は特にヂュンガリヤにのみ棲息し、他には何地にもない。我が露國旅行者の新たに發見した馬は、動物學上驢馬と家畜の馬との中間に屬するもので、身長は餘り大きくはなく、頭は其胴に比して大きく、耳は驢馬の耳よりは短い。鬣は短かく直立したもので、色は暗褐色である。前髮はない、背上の帶狀の縞はない、尾は上半毛深くはあるが長い毛はなく、下半部に於て始めて馬のと同じ長い毛がある。胴の毛色は糟毛であるが、頭部は稍赤毛である。躰毛は可なり長く而かも幾分縮れがある。脚は比較的太い。野生馬は普通小さな群(五—一〇頭)をなし、老練な牡馬の監視の中に護られてゐる。野生馬は頗る用心深い性で、普通は砂漠の最も未開の部分に棲息し、水飲には非常に遠い距離を通つてゐる。

此野生馬の捕獲は非常に困難である、夏は暖氣と干水のため、冬は寒氣と吹雪に妨げられるからである。（註）

註　ブルジエワリスキイ、第三囘旅行、四〇—四二頁。

野生の駱駝は中央アジヤに於て、野生馬よりも遙かに廣大な地域に棲息してゐる。

野生駱駝は、ブルジエワリスキイ氏の證する所によれば、南方ヂュンガリヤ(奇臺、綏來各都市以北)のみならずタリム河の下流、ロブ・ノル湖及哈密沃地附近にも相當に棲息し、更に西藏高原(ツアイダム北西方)の、天然境スイルツイン附近の砂地や、フイトン・ノル湖附近の砂地にも棲息してゐる。（註）

註　イビド、四四頁。

野生駱駝の生存に關しては歐羅巴に於ては既に早くより知られ、マルコ・ポーロの旅行以來傳へられてゐる所である。併し實際に之を目擊し之を蒐集し得たのは我が露國旅行家のブルジエワリスキイ氏を以て嚆矢とする。氏の手に入れた數頭は今日尙ほ帝室學士院の動物博物館に陳列してある。ブルジエワリスキイ氏の捕へた數頭は何れも雙瘤のものである。

ポリヤコフ氏の研究によれば、野生駱駝と飼養駱駝(同じく雙瘤)との動物學的差異は甚だ僅かで、最も著しい相異點は其背瘤の大さにあり、前者の背瘤は後者に比して遙かに小さい、又野生駱駝にありては前脚膝部の胼胝がない。（註）

註　イビド、四三頁。

野生駱駝は概して全然遮蔽物のない、近づき難い砂地に棲んで居る。飼養駱駝と同樣に野生駱駝は食物にも飲料水にも撰り好みをしない。併し野生駱駝は飼養駱駝よりも遙かに怜悧であり、又五感に於ても飼養駱駝を凌いでゐる。野生駱駝の視覺は非常に鋭敏であり、聽覺は微細を極め、更に臭覺に至つては驚くべき完全さを持つてゐる。土民獵師の言によれば、野生駱駝は人間を數露里前方に於て早くも感知し、危險と知るや直ちに逃走する、其逃走も數十露里、否時には數百露里の間を休まず走る。其脚は非常に速く、平素が既に速足なのである。野生駱駝は負傷には非常に弱い。此獸の交尾期は冬、一月半ばより二月下旬までで、此時期には老年牡駱駝が牝駱駝を數十頭宛集めて、若き牡駱駝の襲擊を防いでやるが、時には老駱駝の間に物凄い格鬪を演じ、一方が斃るまで爭ふのである。牝駱駝は第三年目に交尾期に入り、飼養駱駝同樣に姙娠十三ケ月にして、仔は一頭宛、春三月分娩する。幼時捕へた野生駱駝は之を手訓らむこと極めて容易で、極めて確實に荷物を運搬する。野生駱駝は飼養駱駝よりも聲を發することが少く、發しても極めて鈍い。而して聲を發するものは主として姙娠してゐる牝駱駝で、牡駱駝は交尾期にも聲を發せず、牝は其跡を感覺によつて追ふのである。（註）

註　ブルジエワリスキイ、伊寧より天山を經てロブ・ノルへ、一八七七年帝國ロシヤ地學協會々報、第十三卷、三〇二—三〇三頁。

野生駱駝の狩獵は一般に非常な困難とされてゐる。春の交尾期には牡は非常な兇暴性を現はしてゐるので、此期間中に若し人影を認めんか、啻に逃走を企てざるのみか、寧ろ反對に人に襲ひ掛るのが普通である、此場合不幸逃け後れんか、死の

不幸を見ることさへある。（註）

註　ペフツオフ、ヂユンガリヤ概要、三一頁。

飼養駱駝も其交尾期には牡は同樣兇暴性を發揮し、時には飼養主にさへ之を殺害せんとして襲ひ掛ることあるは注意すべき一事である。

ヂユンガリヤ砂漠の哺乳動物中、野生駱駝と野生馬の外に屢々見當るものは、野驢馬（Asinus hemionus）と當地方特產の野生驢馬（Asinus onager）とで、兩者とも群棲、時には大群をなす習性がある。又餘り臆病でなく、殊に野生驢馬は一層然りである。野生驢馬は其外に尙ほ外傷に強い動物である。此等を捕へることは困難である、優秀な新馬を以てしても尙ほ野驢馬にも野生驢馬も追附けないからである。從つて何かの理由で體力の衰へたものに非ざれば捕へられない。キルギスは之を捕獲するに投繩（毛製繩）と槍とを使用する、槍の穗先きは鈎をなしてゐて、動物の逃走の際岩に掛からせんがためである。

註　イビド、三一―三二。ペフツオフ氏の證する所によれば、ヂユンガリヤ砂漠には野驢馬の群は非常に多い。又野生驢馬の多いことはエビ湖やアヤル湖を實測した測量師が證明してゐる。

湖畔や河邊に密生してゐる蘆の中には虎、豹、野猪などが棲んでゐる。

山中には熊、狼、山猫、狐、韃靼狐、野猫、蝦夷鼬、モルモツト、貂、山山羊、山間の羊（野羊―Ovis Tolii）、鹿などが棲んでゐる。鹿は天山々脈と其支脈とに特に多く棲息し、之が狩獵は其角を目的として行はれる。角は支那人に取りては醫料藥として特に大效力があると云はれてゐる。

次にヂユンガリヤに飼育されてゐる家畜に就て述べよう。當地も中央アジヤ地方と同樣に最も數多く飼はれるのは羊で、次いで馬、有角獸、駱駝の順である。此外に數は少いが伊寧地方には騾、家畜騾が飼養され、支那人、シボ族、滿洲族の住居する都市には豚が飼はれてゐる。遊牧民は羊、馬、有角獸、駱駝の外に數頭の山羊を飼つて、之を羊群に附けて道案内の役を負はしめる、恰も我がノチロシイスク曠野に於ける牧羊犬と同じである。

露國々籍を有する土著民が幾何の家畜を有するかを正確に決定することは全然不可能である。これは土著民が課稅を恐れて其財產を隱蔽する習慣があるがためである。

一八七一年より一八八一年まで伊寧地方が我が露國の治下にありたる時代は、同地方の家畜に就いて可なり正確な資料を蒐集し得たのである。一八八〇年に於ける伊寧地方の官邊資料によれば次の通りである。

種別	頭數	價格（留）	一人に對する所有畜類の割合
駱駝	八、四一九	三三六、七六〇	〇・一
馬	九八、九三〇	一、九七八、六〇〇	〇・七
有角獸	七二、九六九	一、〇九四、五三五	〇・六
羊	六九七、五八一	二、〇九二、七四三	五・四
合計	八七七、八九九	五、五〇三、六三八	六・八

（註）以上の外一八七三年度報告によれば豚三六一頭あり、其中一七三頭はシボ族に屬し、其殘餘は全部支那人の所有である。（トルケスタン年報第四卷一六一頁）。伊寧地方の支那領に編入さるゝと同時に同地方の豚は斷然增加した筈である、支那人は回々教徒とは反對に豚を愛好する種族で、豚は支那人の最も貴び且好む食料である。支那人の豚を尊敬すること非常なもので彼等は豚を以て同族の元祖と認めてゐる（一八八三年歐羅巴報知に於けらスカチコフ氏の所論參照、第七、第八號）。

前述の表により上部イリ地方に飼育せらる畜類の狀況と、其住民數に對する割合とが伺はれる。要するに中央アジヤ民族の富源（勿論比較的）は土著民と遊牧民とを問はず、牧畜に依存するものであり、牧畜は勿論羊の

飼育が首位を占めてゐると云へる。羊によりて肉、乳、乾酪を得るは勿論、其毛を刈りて衣服、敷物を織り、遊牧民は更に居所(幕舍、旅車)を作り、遂に羊は商賣の目的物ともなるのである。故に遊牧民所有の羊群は時に夥しい數に達して、所有者自身其所有頭數を知らないことさへある程である。

然るにも拘らずチユンガリヤ牧畜は、一般中央ジヤに於けると同樣、依然として原始的狀態を續けてゐる。

遊牧民は一年中其家畜を野天に曝らすは勿論、其飼料も足下の牧草以外には何も知らない。冬は雪を搔分けて飼料を求むると云ふ狀態である。唯土著民だけは家畜のために何なり斯うなり圍を建てゝ、冬の寒氣と荒天とを防いでやり、ウマゴヤシや大麥を僅かばかり貯へてやる。併し遊牧民は其畜群を冬の荒天と寒さとより防がんために、其假小屋をサクサウルの茂味か、蘆の中か、砂漠の砂丘の中に建てようとする。冬期家畜飼育のため遊牧民は次の如き手段に出てゐる。先づ最初何頭かの馬を放つて、其蹄を以て雪を搔分け、昨年の草を露出させ、次いで此雪を掘り除けた場所に有角獸を放つて雪下の草を一層露出させる、而して後初めて羊を放ち、草の根だけを食さしめる。唯駱駝にだけは遊牧民も牧草や蘆を僅かばかり貯へる、駱駝は蹄を持たないために自身雪下の草を採り出し得ないからである。冬の困難なのは遊牧民の家畜ばかりではない、中央アジヤの土著民の家畜も全部同樣である。冬期中央アジヤ地方の畜類に取りては二大苦難がある。これは氷皮と烈風とである。氷皮は緩んだ時候の後に酷烈な寒氣の襲來る際に生ずる現象で、此場合畜類は表面の氷を碎き、更に其下の雪を搔き除ける力なく、遂に飢餓と寒氣とに堪え兼ねて何千となく斃れる。今一つの苦難は烈風で、烈風は吹雪を伴ふ强風の吹く際に生ずるもので、此場合畜類は向ふ見ずに所かまわず疾走して、大群のまゝ幽谷に陷入り其まゝ雪に埋もれて死するのである。中央アジヤの家畜は曠野に於ても山間にありても以上の如き過酷の試練を受くる結果、遊牧民が多數の所有畜類を一時に失ふことはよくある現象である。

チユンガリヤの羊は、中部アジヤ各地に行き渡つてゐる。太尾の羊一種類である。此羊の特徵は圓形の躰、垂れ下つた耳、隆起した鼻、太く脂肪腫れのした而かも先きが二つに分れてゐる尾、半プート以上の體重があることなどである。此羊は非常に强健で忍耐力が强い。伊寧地方の羊の總數が他の畜類の殆ど四倍にも達してゐるのは、チユンガリヤの曠野部には遊牧民が多いので、前記の事情が一層よく示されたものである。チユンガリヤの羊は通例の家計用途に充てられる外に交換上の單位とされてゐる。此羊は隣接各地卽ち我が露國や東部トルケスタンなどに販賣のために追込まれる。羊の毛は外國輸出の重要品である。羊の價額は季節によりて上下する、冬及早春の候は飼料兎角不足の結果、羊は瘦せてゐるので價額は低下するが秋季羊の健康が恢復すると共に其價額は上りて五倍六倍となる。(註)

註　中央アジ牧畜狀況の詳細は、羊、有角獸、馬、駱駝などに關する專門的研究と共に、『トルケスタン地方』第三卷、第六、第八、第九章に述べてある。

有角獸の飼養は其數僅かで、之が飼育の目的は土地の耕作と穀束の蒐集とにある。當地の牛は我が小ロシヤ(チエルカッス)のものに酷似してゐるが、只體は遙かに小さい。イリ河上流地方の牛は大型で、體軀はチエルカッスのものに劣らない。當地に於てはカルムイク族、東干族、タランチ族何れも牛を移動の機關としてゐる。荷物輸送のために牛に二輪車を引かしむる丈けではなく、牛に荷物を負はしめる。車を引かせる場合には車に積込む荷物は三〇「プード」以内であるが。直接負はしめる場合は約一二「プード」である。荷物三〇「プド」を積んだ車を引く牛は、一晝夜に平坦道路なれば二〇乃至二五露里を、又山道なれば七又は六露里以內を進む、荷を直接背に負ふ牛は一晝夜に三〇乃至三五露里を行き、旅人を乘せる(馬と同樣鞍を置き)場合は四〇露里を行くことさへある。

荷物運搬に使役する牛には、二枚の寄せ木で出來てゐる桎梏を著ける。此桎梏を著けるために牛を引倒し、繩で縛して置く。牛を乘用とする場合には、其鼻に通してある環に手綱を附けて御してゐる。乘用に充てられる牛の中には、其步き方が跑足馬に似たものが可なり多い。タランチ族は牛を三歲四歲の時に去勢して、其れより次第に各種の勞役に馴らしてゐる、

始めは鞍を置き或は補助牛として使用するなど容易な勞役に充て、後漸次或は直接梶棒に著け或は荷物を背負はしめる。荷物を背負はしめるのは牛の八歲に達した時に始めて行はれ、二〇歲位まで續けられる。老衰した牛は水に浸した豌豆其他之に類するもので飼育し、食肉として賣却する、其價額は約三〇留位である。勞役牛はヂュンガリヤが支那に讓渡される以前同地方に於て四〇留乃至五五留で賣買された。四月五月六月の三ケ月タランチ族は其畜類を原野に放牧する、併し七月以降は全然之を中止する、七月以降は刈入れが濟み、穀打に畜類が必要となるからである。一八八〇年伊寧地方に於ける牝牛一頭の價は高いものではなく、良質牝牛仔牛附きで一二留乃至一五留と云ふ相場であつた、現今同地の相場は著しく高騰してゐる。

全ヂュンガリヤに勢力を占めてゐるのはキルギス產の馬で、これはトルケスタン全土にも多い。此馬は健康と忍耐力とが驚く程よいことが特徵で、身長は平均二「アルシン」あり、頭部は其身長に比して稍々大きく、總體は垂直である、耳は中庸の大きさで正しく立ち、兩眼は大い方ではなく表情に富んでゐる。馬に稍々鈎鼻で、鼻腔は大きく、全體に頭は瘦せてゐて表情に富んでゐる。下唇は其中程に脹がある、馬が休息狀態にある場合には下唇は上唇よりも指一本だけ垂下し、步行中は兩唇揃つてゐる。首は垂直で可なり瘦せてゐて稍々短い。肩胛の隆起は高く、背は身長に比して長く伸び過ぎた感はあるが尻との附き具合は頗る良い。尻は背に比較して短い、が幅があり丈夫で形が良い。胸は幅廣く隆起した骨(膺の)の附いたのがよくある。腹は圓く長い、故にキルギス馬は非常に底力を持ち從つて疾走のため瘦せた姿勢をしてゐるとか、特に疾走を仕込んだ長身瘦軀のものはない。前脚は非常に正しく稍し瘦せ氣味で骨ばつてゐる（上膊は脛よりも長く、膝も、脛で分れてゐる腱もよく發達してゐる）。骹は短く格好も良い。蹄は圓く非常に丈夫である。腿の肉もよく發達してゐる。後脚の附き方も正しく、疾走關節の發達もよい。筋肉は驚くべき强堅さを持つてゐる。臀部は幅廣で時には著しい隆起のあるのもある要するに、瘦せ形、底力ある體格、正しい脚、よい骨組、よく發達した筋肉これがキルギス馬の著しい特徵で、一見直ちに其强力と忍耐强さとが首肯出來る。（註）

註　ベリンスキイ、セミレチエンスク洲產馬研究、一八八六年軍事資料集、第二號二七一―二七二頁。

キルギス馬の並足は形よく落著いて居るが速度は速く、一時間八露里はキルギス馬の普通である、少し步度を延ばせば一時間十露里は容易である。時によると並足の代りに一種の跑足をすることがある、此場合には同一側の足は殆ど同時に（嚴密には矢張り後脚は前脚よりも早く）地面に著く此足取を「ホド」と云ふ。キルギス馬の速走は速く落著きがある。併し襲步に於ては特に速いと云ふ方ではない、只因苦缺乏に堪ゆる力は驚くべきものがある、飼料もなく水もなく而も休息も採らず平氣で長距離を走り拔ける。此種の馬には飮まず食はず又休みもせず百露里を疾走して尙ほ斃れないと云ふ例は決して少くない。實にキルギス馬は百露里宛を六日又は七日間否十日間走り續けても尙ほ疲れ果てることはない。キルギス產の馬には跑足馬が可なり多い、これは遊牧民に取りては可なり貴重なもので、キルギス語で「ヂュルガ」と云ふてゐる。此種の馬の固有の步度は一露里が一・五分である。遊牧民は此跑足馬に對し一〇〇乃至四〇〇留の値を附けるが、普通馬に對しては三〇乃至四〇留に過ぎない。

馬は土著民の間に於ては其輸送機關として利用されるは勿論、更に食料にも供される。馬乳は支那人の間に最も愛好され最も廣く用ひられてゐる飮料―馬乳酒の原料である。馬耕に關しては贅言を要しない、アジヤ人は遊牧民と土著民とを問はず馬肉を以て常食とするからである。ヂュンガリヤ及殊にイリ省に於ては、駱駝の通る得ない山兵地帶の輸送機關として馬を利用する。

例へば伊寧、アクス間の商業輸送は以上の如くして行はれる。此輸送に於ける馬一頭の積荷物量は八「プード」で、駱駝の約半分である。其代り馬は前記兩商業都市間を駱駝よりも二倍早く輸送する。

駱駝は遊牧民たると土著民たるとを問はず中央アジヤ民の生活上頗る貴重な動物である。第一駱駝は水の少い不毛の砂漠

に於ける最も確實な輸送機關である、アラビヤ人が古くより駱駝を砂漠の船と稱したのは蓋し至言である。土著民は其商品輸送のために遊牧民から駱駝を購入する。遊牧民が遊牧地を變更して移動する場合にも、其世帶道具は悉く駱駝に積む關係上、矢張り駱駝が重要位置を占める。駱駝の肉は、剛くはあるが食料に使用される。毛は百姓用外套、敷物(薄手の敷物)などの製作に用ゐられる外、布團綿の代用品となり、縄(紐)の材料ともなる。我が露軍は、中央アジヤに行軍した際、駱駝の價値を認めて其輜重隊は全部駱駝を以て組織した。砂漠の行軍に於ては特種戰法による結果、輸送材料の數量は彌が上に增大する。砂漠地帶に於ては活動部隊の必需品を購入し度くとも徵發し度くともない、故に軍事行動の最初から糧食及必需品一切を相當長期間分携行する必要がある。軍用貨物(糧食、砲彈等)の大量輸送には駱駝の數も亦莫大な數が必要である。水の少い不毛の砂漠を苦なしに通過すると云ふ、何にも變へ難い貴重な特性を有する駱駝こそ最良輸送機關である。

アジヤ出兵は何れも駱駝輜重隊によりて行はれてゐる。例へば一八三九年—四〇年ペロフスキイのヒワ出兵の際には、集められた駱駝の數は一萬頭に達し、一八七三年のヒワ出兵の際には、タシケント、カザリンスク、ペロフスクの各地より進出したトルケスタン部隊だけに殆ど一萬頭を徵集した。一八八〇年—八一年のアハル•テク出兵の際には二萬頭の駱駝を要求してゐる。ヂュンガリヤ砂漠に於ける作戰のためには我が露軍も駱駝の輜重隊を必要とすること勿論であるから、駱駝の特性及其の取扱法に關して若干の資料を述ぶることも強ち無用ではあるまい。

ヂュンガリヤ及イリ省に於ける駱駝の種類は雙峰、單峰の二種で、前者は數に於て遙かに優つてゐる。單峰の駱駝と雙峰の駱駝とを交尾せしめると繁殖となる、故にキルギスは屢々此方法を以て增殖改良を謀つてゐる。單峰駱駝と雙峰駱駝との交配は通常冬期に行ふ。此時期には牡は痩せて陰鬱となり、激し易く又兇暴性を發揮して、飼主を咬み又は踏み殺さんとして襲ひ掛るのである。交尾期に於ける牡の兇暴性は、彼等が、傍より助力せざる限り、其情慾を滿し得ざるために、一層甚しくなる。此助力をなすものはキルギス婦人であるが、彼等は斯くして騾馱の混種をも行ふのである。其時期は二月が普通であるが、これは、牝の姙娠期間が一ケ年、多くは十三ケ月なるを以て、生れ出づる仔が春の到來以前に此世に現はれ、直ちに酷しい冬の試練を受け凍死の危險にも逢はしめるやうに謀る。

三月の曠野は未だ寒いので、仔駱駝は頭と頸部とを殘して、他は全部敷物に包み夜間は室內に入れて置く。仔駱駝は四週間以內は未だ立ち得ないので、哺乳のためには一々之を持ち運んでやる。生後二、三ケ月を經て溫暖の到來すると共に、覆ひ物を解き親駱駝に附かしめる、親駱駝は一ケ年、時には二ケ年間哺乳を續け、此間に足下の食餌を漁る術を敎へる。生活の第一年中に躰軀の十分力づくのを待ち、鼻孔に穴を明け、之に滑かに削り上げた角又は細い棒(鼻縄)を通し、之に綱を結び附けて、駱駝を御する手綱とする。此手綱を附けると同時に、「チョク」と云ふ言によりて地上に座し、「チュウ」と云ふ言で起ち上る訓練を開始する、其際駱駝の起坐、何れへなりとも其欲する所に從つて手綱を上下するのである。此訓練は將來荷物の積み卸しに便ならしめんがために行ふものである。若い駱駝の勞役訓練は徐々に之を行ひ、五歲に達して始めて一頭分を滿載するやう訓練する。駱駝の壽命は二五歲であるが、過勞又は取扱ひ不良の場合には其よりも早く死亡する。勞役適度の場合には駱駝は祐に四〇、否四五歲までも其命を全うする。

駱駝一頭の荷物定量は、商業隊商移動の場合、一六乃至一八「プード」である。此量は、同じ樣に八乃至九「プード」宛に造られた棉花の荷物を積む際に定められたものである。軍隊が駱駝に荷を積む場合、其左右の荷物の重量を平均せしむることは殆ど不可能である、併し左右不平均な荷物位駱駝を苦しめるものはない、そこで我が軍隊に於ては古往より駱駝の荷物は一二「プード」(片側六「プード」宛)と定められてゐる。此數字は軍隊貨物積載の場合、駱駝の所要頭數計算の規準となるものである。キルギスは近年、駱駝の前峰に綱を著け、其綱の端に束の梶棒を結びて、駱駝に車を牽かせることを露國人から學んだ。堅牢な車であれば祐に六〇「プード」搭載し得るのであるが、キルギスは一車約二〇「プード」を通例とし、荷物の一部を車を牽いてゐる駱駝の背に積んでゐる。荷物を滿載(一六乃至一八「プード」)した駱駝の步度は一時間約三露里四分の三で

あるが、其荷物の減ぜられるに從ひ駱駝の速度は早められ、一時間四露里半、否五露里まで伸びる。駱駝隊商の一日行程は三〇乃至四〇露里であるが、遊牧換への場合は通常二五露里とされてゐる、此行程をキルギスは「コチ」と稱してゐる。駱駝は速走では一時間よく一〇露里を走る、速度は早いが、並足や跑足とは違い、動揺が激しく平靜ではない。曠野で若い駱駝の群を見ることがよくあるが、彼等が疾走して居る際には駿馬と雖よく之に追附くことは出來ない。

隊商が宿泊地に著いた後は直ちに荷を卸し、一時間半乃至二時間横臥休息せしめ、然る後始めて飼料を與へる。宿泊所に於て駱駝に食事を給するのに通常二時間を要する。其後夜暗の迫る頃宿小屋に入れて就寢させなければならない。翌朝曉け方荷を積む前に一時間位を費して食事を攝らせねばならない。

駱駝は隊商行進中、途中の草を摘んで食ふ習性を持つことを忘れてはならぬ。食物及飲物に關して駱駝程無欲な動物はない。見るから貧弱な、枯れ上つた、曠野の草は馬になど到底與へられるものではないが、駱駝に取りてはそれが營養になり如何にも好かれる飼料である。例へば艾類、蘆、萱、刺草、早鐘草などがそれである。尙ほ駱駝は馬の見向きもしない水を平氣で飲む、駱駝は水一滴飲まず三、四日は平氣である、多少疲れを見せるが荷物は一生懸命に牽いてゐる。夏は一晝夜に水を一回飲ませるのが普通で、秋と冬には適當水飲所を見出さない場合には、二晝夜又は三晝夜の間に一回水を飲ませればよい。

駱駝は缺食三日間位は平氣で耐える。若し食物又は飲料水缺乏のため駱駝が疲勞を見せるが如き場合には、直ちに其積荷を輕減しなければならぬ、而して之を最初の重量に復すのは、駱駝の健康が完全に快復した後でなければならない。

夏近く駱駝は脫毛して殆ど完全な裸躰となる、只老齡駱駝の頭部、首の下部、腹部の一、二ヶ所に僅か宛の毛の塊が殘つてゐる。冬には躰毛は再び發生する、併し駱駝の躰を暖めるには足りない。之がために遊牧民は駱駝に薄織の褥を被せる、此褥は夏でも、虻其他小虫の多い河邊地區に於て遊牧する場合に使用する。駱駝に荷物を負はしむるため鞍と小梯子とが必要である。卽ち荷物は此小梯子に毛繩を以て括るのである。若し此鞍と小梯子とを缺かんか、實に駱駝其ものを失ふ危險がある、何となれば荷繩のために駱駝の横腹を擦り剝き、ために步行不可能となるからである。隊商通行の場合や、遊牧地變更の場合には細綱を以て何頭かを繫ぎ合せる。卽ち縞栗鼠の毛の繩を以て前の駱駝の鞍に繫ぐのであるが、其繫ぎ方は至つて輕易にし、不意に停止したり又は駱駝が倒れたりする場合、繩が直ちに自解するやうにして置く、然らざる場合には栗鼠繩のために駱駝が鼻孔の軟骨を破るからである。鼻梁を破つた駱駝の姿は例へやうのない不愉快な感じを與へるものである。一繩の駱駝は通常七頭乃至一〇頭から成つてゐる。此一繩の駱駝に對して一人の使丁を附け、其隊商進行情況を監視せしめ駱駝を繫いでゐる綱の切れた場合には直ちに之を繫がしめる。我が露國の軍隊駱駝輸送の場合には六頭乃至七頭に對して一人宛の使丁を附けてゐる。駱駝は直ぐには疲れないが、一度荷物過重のために疲れたが最後、之を再起せしむることは殆ど絕對に不可能と云はれてゐる、斯かる場合には一頭だけ放棄し行くより外に途はない。

駱駝は西伯利疫病にも、ペストにも、其他他の畜類の冒される病氣には一切罹ることがない。駱駝は野原が氷に閉さされて草の摘めない季節に斃れるのが最も多い。併しそれにしても他の畜類に比ぶれば遙かに勝つてゐる。駱駝は蘆や灌木の上部を噛み取れるからである。其代り冬の食物缺乏期に瘦せた駱駝は、其快復が他の畜類よりも遲く、秋の初めに至らざれば肥らない。玆に卽ち遊牧民が春は駱駝に一二「プード」しか荷を負はしめないし、又之を定量まで增すのにも徐々にでなければ增さない理由がある。駱駝は其食料や取扱ひの點に於て非常に簡易ではあるが、濕度に對して頗る敏感であるから、遊牧民は常に、停滯する水の多いために空中に濕氣の多くなる地方を避けてゐる。冬は殊に注意を周到にして遣るが肝要で、駱駝を雪の上に立たしむることは絕對に不可である、必ず雪は之を排除してやらねばならない、然らざれば獸の躰から發する發散物のために感冒に罹り易い。既に荷物の運搬に堪えない老衰又は病氣の駱駝を遊牧民は殺して食用とする。駱駝の肉は非常に珍重される。併し食用として小駱駝を屠るのは富者に限られたこ

とであり、それも常にではなく祭事に限られてゐる。駱駝の乳は遊牧民が好んで飲み、其の毛は外套、袋、幕舎用紐、繩などの材料となり、其皮も遊牧民のためには無益ではなく、食器を造り、皮帶を作つてゐる。

第三章　有用鑛物と鑛物鑛床

上部イリ地方及エビ・ノル湖畔の地質狀況研究。有用鑛物所在地と鑛物鑛床。石炭。黑鉛。沈澱鹽。石膏。天燃硫黃。硇砂。硫酸鐵。鐵鑛。軟滿俺鑛。方鉛鑛及銅鑛。金鑛床。

露國が伊寧地方を領有してゐた當時、伊寧地方はタルキ山脈以北地區のエビノル湖畔などゝ同樣、地形學的狀況は勿論、地質學的狀況まで硏究調査が遂げられた。前記各地の有用鑛物及鑛物鑛床に關してはムシケトフ博士が可なり精密な調査を遂げ、貴重な記錄を殘してゐる。（註）

註　タリツチ地方地圖及各種統計表附き、一八七五年トルケスタン・地質學的旅行概要、サンクト・ペテルブルグ、一八七六年。

ムシケトフ氏以外にも伊寧地方を旅行して、各種鑛物の所在地に關する調査を遂げた露國の硏究家がある（ラリオノフ、ダウイドフ、フアビアン、ギレフの諸氏）。是等硏究家の調査ありたればこそ、上部イリ地方やエビノル湖附近の山間や溪谷に存する資源に關して、可なり決定的な斷定を下し得るのである。此地方は、早くより支那人に知られ、支那人によりて露國人入國の遙か以前より採掘されてゐた各種鑛坑の數多い點から押して、確かに富源の多い地方と云へる。事實、此地方の實際的富源は有力な石炭埋藏である。其他の鑛物殊に金鑛及銀鑛に關しては、其所在地は可なり多い、併し其含有量が少いので、露國事業家の利用を見るに至らない。以下簡短に前記各地に於ける有用鑛物所在地點の知れてゐるものに就いて述べよう。

石炭鑛床。　上部イリ地方の最も豐富にして見込のある石炭鑛床は、イリ河右岸の伊寧の北西方にある。此鑛床は伊寧より一〇、一五、二〇露里を夫々隔てゝゐるベリチ、モグイツイ、ゴイツリの三ケ所に於て採掘されてゐる。五「アルシン」の上部炭層を採掘してゐるのは、ベリチ炭坑の四坑、ゴイツリ炭の八坑で、一アルシン半の下部炭層を採掘してゐるのはモグイツイ炭の二坑である。上部炭層の石炭は主として家庭用炭として、下炭層のものは鍛治工場及冶金工場の燃料に向けられる。

伊寧附近に於ける年產額の概略數は、ギレフ氏の言によれば三〇〇、〇〇〇「プード」である。又ムシケトフ氏の調査によれば、此地方に於ける石炭の總埋藏量は莫大なもので、每年二千萬「プード」宛採炭するとして、祐に三百年以上を支ふるに足り、若し每年の採炭量を百萬「プード」とすれば向後尙ほ三千年は續く。伊寧地方石炭埋藏量の算定に當り現に注意すべきは、過去及現在の火災である。火災は過去及現在は勿論、恐らく將來も尙ほ少なからず此貴重なる富源を烏有に歸せしめるに相違ない、此富源は現在未だ何等實益を收めてはゐない。

採炭實施のため前記各石炭埋藏地には支那人八名、又は資本主たる東干族或はタランチ族の雇入れるカルムイク人十二名から成る會社制度の協同組合を組織し、或る最も熟練せる工夫の考量に從つて、業務施行に適する地點を撰定する。業務施行地點撰定の後は此に垂直の竪坑を穿つ、それと同時に勾配ある坑道の開鑿に著手する。竪坑は採炭引揚げに、又傾斜坑道は將來地上と地下、兩部間の交通路たらしめんとするものである。竪坑の深さは時に四五サージエンに及ぶことがある。（註）

註　コステンコ、トルケスタン地方、第三卷、一七五―一七七頁。

伊寧地方を支那に讓渡して後、上部イリ地方に於ける採炭は年と共に減少し、石炭の價格はために二倍となり、以前伊寧綏定各地の石炭は「プード」七乃至八「コペク」であつたが、今は一五「コペク」となつた。（註）

註　ウスペンスキイ、手記。

前述の如き伊寧地方炭坑の外に尙ほカシ河畔にも炭鑛がある、同地の炭鑛は延長約一〇露里に及んでゐる。此炭鑛はカシ

河上流右岸の一支流、チエルゲンタイ河畔に露頭を現はしてゐる。白い砂岩の重疊してゐる炭層は全部で八層あり、何れも其厚さ一尺以上である。東西約一〇露里、南北約五露里の分布を有するカシ炭田の面積は最小五〇平方露里である。併し此にも火災がある、故に石炭の相等量は既に失はれたものと見ねばならない。（註）

註　ムシケトフ、略報、六九頁。

ウズンタウ山脈の南斜面、テケス河流域には、其左岸の支流イルガイラ、第二カラガンダ、ムイスス、南チヤブチヤル、南シヤルバグチなどの各河流域に石炭鑛床がある。只此等の炭鑛は別々の小塊で、埋藏量の點からも、粗惡な炭質からしても、未だ實際的重要性はない、之と同一理由によつてボロトラ河上流域にある二炭鑛も何等重要性を持たない。（註）

註　イビド、六九—七〇頁。

黑鉛鑛床。黑鉛鑛床の最も著名なものは、サイラム湖の北方約一〇露里、一方にビリチ、チエルガランの二河流、他方にキズイムチリ河の間の分水嶺であるクユクタ連山の中にある。此鑛床は前記連山の北斜面、キズイムチク河の上流一支流の溪谷中にあつて、長さ（東西）約三露里、幅（南北）約一露里の盆地を占めてゐる。黑鉛を有する鑛層に附隨して、硬質の、薄い層狀の、雲母を含んだ砂岩がある、此砂岩と重り合つて綠色を帶でた粘土質の板岩がある、此板岩が所々、純粹の黑鉛を有する黑鉛板岩に變じてゐる。黑鉛と之を含む板岩とは其形態が非常に薄い層狀をなしてゐて、厚さ約一吋のものを採鑛出來る。黑鉛の質は純粹で混入物がないのであるが、稀には白色石英の脈が混入してゐる。黑鉛は細かく碎け易い性質なので、其用途は自然、細かい黑鉛で用が足りるとか、黑鉛の大きさに關係がないやうな方面に向けられる。當黑鉛鑛床の埋藏量は、ムシケトフ氏の調査した所によると、全鑛區を併せて七千萬「プード」以內である。（註）

註　イビド、七二—七四頁。

沈澱鹽層。エビノル湖の北方にありて、恰も其子潟の如き觀を呈してゐる小湖水の中にある鹽層を斯く云ふのである。ヤンホ、ソリヤノエなど何れもそれである。此意味に於てエビノル湖は我が南部露國の各鹽湖を想はしめるものである。エビノル湖附近の採鹽は何れも支那人によりて營まれてゐる、其所藏量は祐に數百年に足りる。（註）

註　イビド、七七頁。

石膏層。石膏層はカシ河（マザル村附近）沿岸及ボロトラ河谷のカラトルク河沿岸とにある。其埋藏は莫大で、厚さの如き數十「サージエン」ある。（註）

註　イビド、七七頁。

天然硫黃、硇砂、硫酸鐵の各鑛床。此等各鑛物は各所に別れて而かも僅か宛集積し、多くは他の鑛物に混入又は賦存してゐる。硫黃及硇砂は、現在石炭の燃燒してゐる地點、例へば伊寧より約二〇露里離れてゐるスチエン河附近にある鑛物の凝華で、天然硫黃の鑛脈は厚さ一吋はある。チヤブチヤル河に於ては硫黃は凝華たけである。伊寧地方に於て明かにされてゐる硫黃及硇砂の鑛脈は何れも極めて貧弱で、到底貿易品たることは出來ない。硫酸鐵は黃鐵鑛の分解物で、ボロトラ河左岸の支流アルチヤトイ、カラトルクなどの各河畔に產する、併し其量は極めて小量である。（註）

註　イビド、七八—七九頁。

鐵鑛々床。當地方に於て磁鐵鑛の發見されたのは、（イ）綏定の北方約三〇露里にあるザルイブラク河の上河、（ロ）アルチヤツイ河の狹谷を離れてより四露里にある同河の一支流河畔、（ハ）アルチヤツイ河と共にボロトラ河左岸の支流カラトルク河の上流である。第一鑛床は埋藏頗る豐かで、七、〇〇〇呎の高地にあり、加之サルイブラク河水面より一、〇〇〇呎聳えてゐる、而かも頗る嶮岨な山の斜面にある、從つて之に達することは非常な困難とされてゐる。尙ほ此磁鐵鑛には多量の銅鑛が含まれてゐて、鐵質を低下せしめてゐる。以上の如き二大不便あるを以て、サルイブラク河磁鐵鑛は近き將來に採鑛開始の望はないと見るのが至當である。第二鑛床は鑛區遙かに廣大にして、六、〇〇〇呎の高地にある。鑛質は前記のものと

同樣であるが、採鑛は遙かに容易である。第三鑛床（カラトルク河畔の）は目下の所只だ土民の提供した鑛物見本によつて認定されてゐるに過ぎない。此見本により、我がムシケトフ氏は、カラトルク河鑛床はアルチャツイ河の鑛床と全然同一であることを看取した。（註）

註　イビド、八五―八七頁。

ボロトラ河谷に於てはユコク河々畔及バシタウ天然境（カプタガイの近く）に廣大な鐵鑛層が夫々發見されてはゐるが未だ何れも其研究不十分である。（註）

註　イビド、九一―九二頁。

伊寧附近の炭鑛地區に褐鐵鑛があつて、含鐵砂岩中の中間層が楕圓形蓄積をなしてゐる。最もよく發達してゐるものはゴングウル河、チンヂャン河の各河谷及之に隣接してゐる地區にあるものである。只遺憾なことには之等鑛層は何れも大鑛床と云ひ難い、ために有利にも石炭鑛床と隣接してゐるにも拘らず、未だ十分利用されるに至らない。（註）

註　イビド、九二頁。

滿俺鑛々床。伊寧地方に於てはスアシユ河と、カプタガイ河との二ヶ所に此鑛床がある。前者は非常に小さく、後者は厚さ二「アルシン」の鑛脈を持つてゐる。此鑛脈は露出が少いので全區の調査は未だ遂げられてゐない。（註）

註　イビド、一二三頁。

方鉛鑛及銅鑛々床。此兩鑛床は殆ど常に相混じてゐる。時には銅鑛が鉛鑛を交へてゐないことがある、併し銅鑛の混入を見ない鉛鑛は決してない。銅鑛はテケス河谷の、ウズンタウ山脈の南側より流出して、テケス河に向つて流れ（同河に達せずとも）る小流、チエイス、ムイススなどの流域にある。此等鑛床は其鑛質に於ても亦鑛脈の延長に於ても極めて優秀である。或る地點に於ては鑛脈が露出してゐる。此に支那人は古くより製銅所を設けて、多量の銅を製出してゐた。銅鑛々床はボロトラ河河谷にも、其左岸の支流ボルロ河沿岸にある。此鑛床は前支那哨所カプタガイ哨所の西方約二〇露里の地點、四、五〇〇呎の高所にある。鑛床は相當有力のものであるが其調査は未だ十分ではない。

シャルボグチ村の南方約一〇露里の地點にある同名の狹谷には輝銀、輝鉛鑛床があり、古くより方那人によりて採掘されてゐた。併し之が果して能く歐洲人の利用品たり得るや否頗る疑はしい。何となれば鑛質が硬く鑛脈は大部分微細であり、其上鑛床は接近し地點に在るからである。

サルイブラク河の上流（綏定の北方）、同山の斜面磁鐵鑛々坑のある地點には輝銀鉛鑛脈があるが、屢々黃鐵鑛が混じてゐる。之も亦支那人によりて採掘はされてゐるが、鑛脈豐富でなく其位置も接近し難い點とで、決して有利と稱し得ない。大（帝國）路より二露里程離れたタルキ狹谷の小都市ルウッグンの北方約一五露里の地點にある銀、鉛、銅各鑛混合鑛床も亦同樣である。

サイラムノル湖の北岸、キズイルブラク河谷にある鑛床は遙かに多くの實際的價値を持つてゐる。此鑛床は七、三〇〇呎の高所にあるが、位置が極めて接近し易く、而かも其集結せる鑛脈が軟層中にあるので、採鑛が遙かに容易である。（註）

註　イビド、九七―一〇四頁。

金鑛床。本地方の採金は、一般中央アジヤ各地に於けると同樣、二流三流の溪流によりて砂金を採集するのである。砂金所にありては各、早くより幾多の勞働者を集めて、原鑛洗鑛によりて生存の資を獲させてゐた。本地方砂金產地はテケス河、イリ河流域にありては同河右岸方流中特にホルゴス河及ウリヨク河の各上流。（註）

註　イリ河上流の各支流及ウズンタウ北面より發出する同左岸の各支流には何處にも砂金はない。

ボロトラ河谷に於ては其支流カラツルク河及クヂユルト河、最後にバルルイクタウの南斜面である。

註　ムシケトフ、簡略報告其他、一〇七―一〇八頁。

露領トルケスタン各地と同樣に當地に於ても砂金は、花崗岩と板岩の多い山又は花崗岩の山にある。中央アジヤは古くより砂金產地が多い所から大金穴でもあるかの如く傳へられてゐた。これ即ち露國人の第一回中央アジヤ移動に際して、夥しい多數の採金業者が採金の目的を以て同地に入込んだ所以なのである。然るに彼等の企圖は何れも徒勞に歸し、破滅以外何ものも獲なかつた。此原因は言ひ囃されてゐた中央アジヤ砂金鑛の金含有量が何れも豫想以上に少なかつたことにある。事實土民は各砂金產地より相當利益を收めてゐる。されはこそ土民ば今も尙ほ採金を繼續してゐるのである。併し土民と歐羅巴人との間には其採金法に於て格段の相違がある。土民にして採金を營む者は極端に貧困者で、税金など一厘も納めてゐない。勞働者にして同時に主人である。スコップ一挺と洗體一つを以て最も舊式な洗鑛法を用ひてゐるので、出費は一錢も要らない。勞力など素より問題ではない、勞働者にして見れば一粒五〇錢にも賣れる金粒が一週間の間に數粒採れるとすれば是れ以上の幸福はない。時には洗鑛のために小組を組織して、收穫物を近間の市場に於て捌いた。此に若し勞力を幾何になり見積つたならば、金の價格は定めし莫大なものとなつたであらう。然るに金屬は協定價格（時に上下することがあるが或一定範圍に限られてゐる）があるので、當地に於て金の取引は市價によるか、又はそれ以下である、何故なれば買手は其取引より少しも多くの利得を出さんとするからで、從つて勞働者―それは多くの場合自ら金坑經營者である―は其勞力に比例した利益を得てゐない。支那の資產家は貧困者と契約するに當り次の如き條件を附ける、即ち資本主は勞働者より夏の間に洗ひ上げた金粒を亨ける。其代り勞働者に一年中衣食を供給する。併し斯る方式が露國實業家に取つては有利でないことは明かである、何となれば露國實業家は先づ人夫を傭入れねばならぬ、之がために資本を下さねばならぬ、資本は回收した上に金利を得なければならないからである。（註）

註　コステンコ、トルケスタン地方、第三卷、一八〇―一八三頁。

第四篇　交　通

第一章　ヂュンガリヤ交通路の一般的特徴と輸送機關

郵便路と隊商路との區分。曠野の通路。曠野通路の簡易通行法。山間通路と其簡易通行法。輸送機關。各種輜重。タランチ族の荷馬車。支那人荷馬車。常備隊に對する輸送機關逡達策。

ヂュンガリヤ地方には水上交通路は全然なく、悉く陸上交通路のみで、之は郵便路と隊商路とに分れてゐる。郵便路は啥所に通じてゐる北路で、支那內地とイリ地方とを連絡してゐる。此路は非常に古く開かれたもので、「北方帝國路」と稱されてゐる。此路はイリ省の行政上の中心（現在の綏定市）に發し、タルキ山路を越え、サイラムノル湖畔を過ぎて、タキアンザ、精河、烏蘇、綏來、廸化、奇臺、鎭西、哈密の各都市に通じ、哈密に於て北路は別の郵便路―「南方帝國路」と稱され、カシガル市より發するもの―に合してゐる。哈密よりは南路と合した儘支那本領土內に通じてゐる。烏蘇市附近から、元タルバガタイ地方の行政上の中心であつた塔城市に至る道路が北路から分れてゐる。近年に至り此タルバガタイ地方行政の中心は新興都市ドウルブルヂンに移つてゐる。

以上の二大交通路以外に車輛を通し得る交通路のあるのは、伊寧沃地の定住民を有する地方で、之には比較的狹い地區內に多くの里道があつて、車輛による交通が出來る。以上のもの以外は全部所謂隊商路で、駱駝、馬、稀には驢馬(騾馬)など駄獸によりて荷物を運搬する隊商の通行するものである。此外に遊牧民が其家財と家畜とを纒めて他に宿換へをする場合の小徑がある。ヂュンガリヤの交通路は其土地の性質により、曠野の通路と山間の通路とに分たれる。前述の二大郵便路、綏定―鎭西間、烏蘇―塔城間の通路の如きは曠野の通路に屬する。曠野の通路の最も著しい特徴は水の缺乏である。各地の宿泊

所では井戸水を用ふるものが多いが、人間や動物の多い場合には忽ち水に窮する。其上に井水は腐敗して鹽辛く全く飲用出來ないことがよくある。軍隊の曠野移動に當り水の節約を目的として、部隊を梯隊に區分することがよくある、併し之も亦不便を伴ふ方法である。第一軍事的政治的狀況の如何によりては部隊を小分し得ない場合がある、第二、先行部隊が燃料を焚き盡して後續部隊に殘さないことがある。中央アジヤの各曠野に於て燃料となるものはサクサウルか然らざれば其他曠野の灌木類である、併しこれ等灌木のない地方に於ては陽光に乾した獸糞（牛糞、羊糞）である。

部隊の曠野移動の場合、給水保證のため、各部隊に於ては豫備飲料水運搬用として、或は木製容器（樽、小桶、細口容器）、或は山羊の一枚皮で作られたツウルスク（皮袋の意）と稱されてゐる革袋が使用される。我が露國軍隊がアジヤの曠野を行軍した永い間の經驗によれば、軍隊の飲料水供給は木製の容器よりも、革袋に入れて運搬するのが最も有利である。其理由は、革袋なれば何時でも可なりの數を土著民の許に求め得らるゝ上に、其修理も便利であり且つ時間を要しない。空革袋を軍隊で保管するのにも木製容器よりは容易である。

部隊が曠野を移動する場合には、燃料豫備品も携行する必要があることがある、何となれば曠野の所により獸糞さへ手に入らない場合がある。例令豐富に發見し得たにしても、それが雨に逢つて濕れ上り燃燒しないこともある。

途中の井戸、湖、泉、小川等の水は惡質であるから酢を混入して毒消しをしなければならない。露國軍隊は曠野を移動して水に窮したる場合、酢の持合せなき時には乾パンを惡水中に投入して使用する。

要するに軍隊の曠野路通過は極めて難事であり重大事件である。若年の又經驗の少い部隊が曠野の行軍に出る場合には、所屬上司が如何なる處置を講じても患者が出る。斯かる部隊に起る病氣は重病中チフスで、傳染して漸次擴大し、前記部隊の通過地點にも出現する。部隊の感染豫防のため、曠野通過の際は各部隊に厚羅紗製敷物を配給する必要がある。實際の經驗によれば、之がために各下級官に對し、一人宛一アルシンよりも少なからざる容積の厚羅紗を支給する必要がある。晝間から夜間への氣溫の變化が激しく、土壤の冷却も極めて早いので、宿泊の場合は適切な敷物によつて十分身體を保護しない限り、之が人體に及ぼす影響は極めて惡い。荒天を防ぎ太陽の燒付けるやうな光線を防ぐため、軍隊に對して麻布の携行用天幕（tents-abris）を配給する必要がある。此天幕は今日に於ては既に、軍隊の曠野路通過の場合必須的供給品中に入れられてゐる。

曠野路土質に就いて言へば、曠野路が硬く粘土の多い地盤か、粘土を含む砂地にある場合最も良好で、飛砂及濕氣を含む鹽澤地は非常に通過困難である。路盤が粘土を含む鹽沼地であると天候不良時には正に異常な泥濘を出現する。冬は一般に曠野行軍には不便と云はれてゐる。夏は、酷暑のため矢張り困難はあるが、必要あれば夜間又は早朝行進出來る。曠野の行軍に最も適してゐるのは春の四・五月（此月には草が未だ陽光に燒盡されてゐない）、秋の八・九月である。曠野を通過するに當りては、通路の特質は勿論、各宿泊地に於て調達し得べき飼料、燃料水などの狀況を明記した、出來る丈け詳細な旅程を用意することが肝要である。移動部隊に對しては道に通じてゐる土民の案内人を附けねばならない。

チュンガリヤ地方にありては部隊を山間の小徑によりて移動せしめることが出來る。

當地方の移動は所謂山間路によりて行はれる。山間路とは云ふても、一級二級時に三等級の河川の河谷にあるものは、其通過決して困難なものはなく、何れも大部分車輛輜重を通じ得る。困難なのは三等級及四等級河川の峽谷に通じてゐる道路である。此種の道路は辛く馬匹を通す程度の小徑で峽谷の岸緣を逼つてゐる。峽谷の底には敷き詰まつてゐる大石の上を渓流が狂奔してゐる。小徑は或は峻嶮を上りて、高く斷崖の上に出で、或は底く河床にまで下つて、幾度となく河流を横斷し、又或る時は岩の背に凭せた長い丸太の、バルコニと稱される橋を過ぎる。此橋を通過するには獸の荷を卸して、荷物は手に拘へて渡らねばならない。然らざれば獸は石に跪いて谷底に轉落する恐れがある。此種の橋は何れも其幅二尺足らずが普通である。併し此種山間の小徑に於ては危險個所は極めて少く、寧ろ大部分は相當に便利で、事情によりては車輛をさへ通じ

得る所もある。

山間の小徑で困難の多いのは、分水嶺を越え幾多の峽谷を横斷するものである。此種の小徑は峻坂、絶壁は上り或は下りしつゝ、溪流、小流、さては五等級六等級の河流によつて形成されてゐる溪谷に沿ふて進んでゐる。此等の小徑には屢々尖つた山石があつて、ために動物の脚は強く損められ、蹄鐵が蹄の附いた儘剝き取れることが屢々ある。又時には小徑は全く杜絶えて、途上一面滑り易い氷堆石を撒散されてゐることがある。斯かる個所は一日僅か六―一〇露里しか進めない。此等の通路は冬期は全然接近し得ない、溪谷は全く雪に埋もれて交通は一切杜絶するからである。

此外に尙ほ、困難と危險のある山路の一種がある、それは雪の峠越えと氷河氷海(mer de glace)の通過である。駄馬(斯かる道は駱駝には通れない)を失ふまいとするには、其荷を卸して、極度に人力を疲らすことではあるが、人手によりて荷物を運搬せねばならない。又時には上り坂、下り坂が嶮し過ぎるため、荷物のみならず馬其ものをまで綱で上げ下しせねばならない。又氷河や氷海を通過する場合には、氷中に出來てゐる割れ目や陷穿に馬の陷落することがある。又徒歩者が氷の穴に墜落する豫防として、躰に棒を横に結び附け、轉落の際此棒が物に掛りて、後から續いて來る者に惹き上げられるまで、其まゝ身を支へてゐるやう工夫することもある。

山路通過の場合最も厄介なのは晝夜の氣溫の變動の激しいことである。山間地方の氣溫は晝間は高く、夜間は零度又はそれ以下にまで低下する。晝間と雖も氣溫の激しい變化を見ることがある、其の變化は四方閉された暑い溪谷から氷雪の高原に出た時の樣な變化である。斯かる氣溫の人躰に及ぼす影響は非常に危險であることは疑ひない。高山の通路が通行のために開かれるのは六・七・八月の三ヶ月である。九月又は十月には高山の通路や、山間の峽谷は雪に埋もれるので、交通は翌年の五月又は六月まで杜絶するのである。

曠野路の通過に於ても、山路の通過に於ても、部隊に對する輸送材料の供給が最大重要問題である。チユンガリヤの道路は、アジヤの各曠野地帶に於けると同樣、住民の僅少な地方にある、從つて軍隊の必需品は之を購入することも徵發することも出來ない。故に軍隊の糧食は勿論軍用品一切、而かも相當長期間分を各部隊自ら携行しなければならない、之がために尨大な輜重隊が必要となる。之れがため、曠野の行軍に於ては輜重隊が移動部隊の大部分を占め、實際の軍部隊は恰も輸送隊即ち輜重隊の警護隊の如き奇觀を呈してゐる。

中央アジヤ各地に於ける戰時行軍の場合、輜重隊の編成如何の問題に關しては、旣に各方面の意見が公表されてゐる。我が露軍は一八六三年以來中央アジヤに於ける數次の實戰に於て、軍隊に對する各種の物資供給法を實際に經驗してゐる。其外平時に於ても軍用物資最良供給法の試驗は屢々實施されてゐる。トルケスタン及其他、中央アジヤ曠野地帶に境を接してゐる地方に試驗されたものは、(一)駱駝駄載輜重、(二)駱駝車輛輜重、(三)駄馬輜重、(四)荷馬車輜重、(五)騾馬駄載輜重、である。最後の騾馬輜重は全然非實際的なものと判明し、其他は夫々利害兩方面を伴つてゐる。(註)

註、中央アジヤに於ける各種物資輸送法に關する詳細は「トルケスタン地方」中に述べてある。トルケスタン軍管區軍事統計錄、第二卷、一六一―二七頁。

我が露軍がチユンガリヤ方面より軍事行動を起す場合、主として我が軍の運動を豫想される地方は、伊寧地方と(イ)イリ省より、天山々脈北山麓に沿ひ、鎭西に達する街道、(ロ)バフトフより塔城及烏蘇に至る街道、(ハ)ザイサンより鎭西に出づる街道である。之等何れの場合にも最も有效なのは、馬又は牛に駕した車輛輜重(四輪車又は二輪車)である。車輛輜重の不便なのは、四輪車二輪車何れにしても其一が破損すれば、後續輜重全隊の行動を停止せしめる點にある、然るに駄載駱駝又は駄馬は倒れたにしても後續者によりて容易に處理することが出來る。併し此種缺陷は道路が狹く、耕作地の間、都市農村などの街路、山林や耕地の間などに隘路となつてゐる場合に限り感じられることである。イリ省の軍事作戰地區は廣大である。何となれば綏定(地方政治の中心)は露國々境を去る四五露里にあり。行軍の最大眼目は天山北山麓に沿ひて鎭西

に進出するにある。故にセミレチエンスク洲内に集結せる部隊は、セシバラチンスク洲部隊と同樣、曠野通路を前進せねばならない。此道路は大都市（綏來、廸化、奇臺、鎭西）の附近丈けが耕作された土地で、從つて隘路となつてゐる。併し輸送材料の調達には不便はない。何故なればセミレチエンスク洲國境附近の居住民ある地點と云へば、カザック部落、農民部落、タランチ族や東干族の各部落である、これ等各部落に於ては輸送材料は十分にある。尙ほ少し附言すれば、カザクは常に馬に牽かせる四輪車のみを使用し、小ロシヤ移民は牛に牽かせる四輪車に馴れ、タランチ族や東干族は大部分二輪車を牛に牽かせてゐる。タランチ族やドンガン族の二輪車はコカ族やブハル族の車より小型である。車臺は板敷に椽を附けてあるので恰も箱の形を呈してゐる。車輪は普通の大さであるが、車軸の孔は突拔けてゐるので、只車軸に被せてあり、車軸は車輪と共に車體の下に作り附けてある座孔の中で回轉する。車輪は板を圓く切拔いたものであることがあるが、槪して平らでなく、荷車共ものも堅牢性に乏しく又不細である。此種荷車一臺の荷物は二〇「プード」以内、普通は一二乃至一五「プード」とされてゐる。

以上の如き荷車を使用してゐるのはイリ地方在住のタランチ族及ドンガン族であるが、チユンガリヤ在住のものも使用する。チユンガリヤ及イリ各地方在住の支那人が使用する荷車も二輪車ではあるが、コク族やブルハ族のものに比較すれば遙かに形がよい。支那人の荷車はタランチ族やドンガン族のものに比して大きく、コク族やブハル族のものよりは小型である。車臺の上には小舍があり、多くは布又は敷物で貼つてある。小舍には一ケ所又は二ケ所の出入口が開けてある。支那式馬車はタランチ族やドンガン族のものより堅牢且廣い。此車は支那軍隊用輜重隊にも採用される。支那車は一頭乃至三頭の馬又は騾馬を駕す。三頭の馬（又は騾）を駕する場合、最も多く行はれてゐる動物の駕し方は、一頭を梶棒に其他を前馬として附ける。

イリ省又はチユンガリヤ方面より軍事行動を起す場合、軍用輜重本隊の編成には馬（要すれば騾馬）を駕した四輪車又は二輪車の徵發に止まらず、尙ほ駄載駱駝を用意する必要がある。駱駝は輸送材料豫備として軍隊に必要である。輸送材料豫備として駱駝は兎に角馬又は騾の荷車より確に有種である（註）シチエテイニン將軍の言によれば、

註　アジヤ資料集、第二四卷、七一頁。

綏定の支那軍は現在三千頭の常備駱駝輜重を備へてゐる、併し我が露軍の實戰の經驗に徵すれば、平時常備輜重（駄載又は車輛）を有することは有利でない。何となれば戰爭の場合には何れにしても民間より多大の輸送材料を徵集せねばならないからである。併して此輸送材料の數量不足に苦しんだことは今日まで未だ一度もない。輸送材料の種類に關係なく、此に一の重大問題がある、それは軍事行動開始の場合、各部隊に對する輸送材料逓達法如何と云ふ問題である。中央アジヤ曠野行軍中の軍隊に對し輸送材料を逓達するには、地方行政官指示の下に民間より借受けるか、自由借入れによるかの何かである、何れにしても夫々支障がある。一八七三年ヒワ出兵の際オレンブルグ部隊に於ては請負人をして輸送材料供給を請負はしめた。其結果は良好で前記二方法に比して遙かに勝つてゐることを立證した。一八八〇―八一年アルハ・テキ行軍の際にも請負人をして多數の行軍用駱駝を納入せしめたのであるが。輸送材料の此供給法が最も目的に適するものであることを益々確實にした。

以上はチユンガリヤ地方の道路及輸送機關一般狀況に就いて述べたのであるが、次に曠野通路と山間通路との何れを問はず最も實際的な通路に就いて述べることにする。

第二章 旅行徑路

タキアンザ市より綏定市に至る徑路。一八八五年シチエテイニン將軍の實地踏破せるもの。（註）

註 アジヤ資料、第二四卷、一一〇—一一七頁。徑路圖は一「デュイム」五露里の縮尺を以て作製す。

タキアンザ市。道は西方に進む。タキアンザを去る二露里にして、水の涸れたシャムベ河を橫斷する。一一露里の地點、道の左方、水源に、ウタイと稱する。綏定市より數へて第五番目の支那哨所がある。哨所は五棟の泥壁造りの兵舍からなり、其周圍には土塀が繞らしてある。これより道の土質は硬くなるが植物は殆どない。二一露里の地點に於て道は、ボロホロ、ストントイ兩山脈間の盆地に入る、盆地の幅は約五露里ある。三六露里の地點にはサイタイ兵營卽第四哨所がある。此兵營はボロホロ山脈より發出するクスタイ河に接近してある。これを宿營地とせねばならぬのであるが、兵營附近は牧草がないから、クスタイ河を上流に溯り、同河が峽谷と離れる附近に宿營する。此と兵營との距離は四露里ある。此には水は豐富にあるが、牧草は少い。此には植物燃料が少いが、之より六露里を離れた山中には木材が十分ある。

スイタイ哨所近くのクスタイ河。四〇露里。クスタイ河峽谷の入口附近に設けた宿營地より帝室國道までの間に一條の小徑がある、此小徑はボロホロ大山脈の前山を縫つてゐるので、嶮しい上り下りの阪路が間斷なく見える。

此小徑を車輛路に改築することは左程困難とも思へない。此小徑を六露里程進むと郵便（ボグドハンスカヤ）道路に出る。此郵便路は土が硬く砂利が多いので天然の舖裝道路の觀がある。

スイタイ兵營を離るゝこと一一露里の地點に於て道はボロホロ、コンヂガル兩山脈の前山の間にある狹い盆地に出る。一四露里の地點に於て道は緩勾配の峠を越え、盆地の幅は稍廣くなる。センタイ兵營卽ち第五哨所（コチエガンタシの天然境界附近）を越ゆれば、道はサイラムノル湖岸に近づき、石の多い隘路に出る。此隘路はセンタイ兵營のある高地を南西方から扼してゐる岩に堀開けられたもので、此高地は卽ちコチエガンタシの天然境である。隘路の入口には石垣が築かれてゐるが、掠奪者の侵入に備へると同時に、タルキ盆地方面から來る敵の防ぎである。コチエガンタシの阪路を上ること二露里にして、道は南西に折れて、湖水南方の境堺をなしてゐる廣大な盆地に出る。道は粘泥質の土で、ハヤガネ草が生ひ茂つてゐる。盆地を五露里程進むと、美事な草に包まれた草原に出る。宿營地として好適である。只燃料には牛糞を拾はねばならない。

サイラムノル湖。二五露里。宿營地から道は湖水の南岸を進み、行くこと三露里にして、緩かな勾配を山脈の前山に上つてゆく、此前山は其裾を湖の水面に垂れてゐる。

七露里の地點では道の右方にスウンシエツウ兵營卽ち郵便哨所があり、其反對側に旅宿舍がある。郵便哨所を過ぎて後、道は山の、三〇度の嶮しい阪を上つてゐるが、これがタルキ峠の初で、半露里も上ると峠の頂上に達する、同所からは南西に曲りて下り道となり、灣曲の多い、山林のある峽谷に出る。此下り坂最初の三露里は可なり嶮しい。夫れより半露里にして道は深い谷に臨んだ山腹を進んでゐる、これが此道の最難所である。四露里以後は道は勾配が稍緩くなり、六露里以後は道の傾斜は一〇度を越えてゐない。これより約四露里を進んだ、峽谷の狹い個所にウイルタイ兵營卽ち第二哨所がある。峠を去る一二露里の地點に於ては道の左方に兵營があり、之が哨所となつてゐる。此兵營より半露里下方のタルキ河右岸は絕好の宿營地である。牧草燃料共に豐富である。峠を越えて後道はタルキ河に沿つて兩岸を交互に縫つて進んでゐる。斯くてタルキ河には多くの橋梁が架せられ、宿營地までに二一を數へてゐる。併し何れも重い荷を載せた車には堪えさうにない。殊に一一露里及一二露里にあるもの々如きは、道の嶮しい曲り角及び下り阪にあるので危險此上もない。

タルキ河の水勢は特に早くはなく、又深くもない。宿營地附近の水勢は秒速四尺である。河底は著しく石が多い。歐羅巴式車輛は峽谷通過のため僅少の改造を施す必要がある。峽谷の兩側には山林が多い。

タルキ峽谷の宿營地。二八露里。宿營地を出でゝ三露里の地點よりは、峽谷が著しく其幅を增してゐる。七露里の地點に

於ては道の右方にイタイ兵營卽ち第一哨所がある。一五露里の地點に於て峽谷が盡きて、道は盆地に出る。此に程なく、ルウッグン市住民の所有に係る耕地が見える。道の土質は軟かい。宿營地より三二露里、峽谷を離れて一七露里。（註）

註　シチエテイニン將軍は二二露里と認めてゐるが、これは明かに誤りである。

の地點にルウッグン市がある。道は此都會に達しない中に左方に折れ、都會の墓地を過ぎると二道に分れ、右方は市の南側を過ぎてチンチヤホヂ市に、又左方は綏定市に夫々通じてゐる。市の東部に接してゐる小さな市場を過ぎて後綏定街道は、山林の多い小山脈の阪路に入る。ルウッグン市を去る四露里の地點に於て道は或る高地に出る、此高臺左側の境界をなしてゐる低地には、北より南にかけてルウッグン河が貫流してゐる。此高臺から坂を下りて低地に出ると、其處には休憩所として絕好のものがある（水や牧草は豐富であるが、植物の燃料がない）。此附近に次第に見初まる官有耕地はルウッグン河の盆地を全部埋めてゐる。此盆地は別にスングイン盆地とも稱されてゐる。綏定の前方八露里に於て、道は電信線のある大街道に合する。此大街道はヂヤルケントに發して、チンチヤホヂを經て、綏定及更に伊寧に達してゐる。これより支那哨所のある小兵營を過ぎて、スイドン市に屬する一面の耕地に出る。綏定市はルウッグン市を去る二〇露里にある。

綏定市。五二露里。以上の如くタルキ峽谷の宿營地よりルウッグン市までは三二露里、ルウッグン市より綏定市までは二〇露里、綏定市よりタルキ峽谷まで三七露里ある。故にタキアンザより綏定までは合計一四五露里である。

綏定より伊寧に至る徑路。シチエテイニン將軍による。（註）

註　五露里梯尺の路上測圖及記錄か作製さる。アジヤ資料。第二四卷、一一七―一一八頁。

綏定―伊寧間には上下二筋の通路がある。前者は前山を、後者は盆地を夫々通過し、何れも車輛通路ではあるが後者の方が便利で、不安のない點に於て、大穴や、傾斜面や溝などのない點に於て勝つてゐる。

上部街道に於ては附近の峽谷に潛伏してゐる東干族及脫走兵等の追剝及掠奪が行はれる。上街道による綏定―伊寧間の里程は三二露里であるが、下街道によれば三八露里である。上街道は綏定を去六露里に於てボロホロ大山脈の前山に入り、其少し先き（綏定より八露里）にて、所謂新綏定を過ぐれば、道は二筋となり、上街道は直線的に進み、下街道は右方に進みて盆地に下る。上街道の綏定より一〇露里及一五露里の二ヶ所に小兵營あり、之に哨所を置きて通路の掠奪取締に當つてゐる。伊寧の前方六露里の地點に昔時の大都市バヤンダイの跡がある。之に次いで支那部落マザル、チンバンヂの二村が並んでゐる。

下街道は伊寧方面より進めばチンバンヂ、マザル、バヤンダイを過ぎ、次いで何回となく涸渇せる灌漑用渠溝を橫斷する、此等渠溝は往時當地に農耕作の榮えてゐたことを物語るものである。

伊寧より一八露里に東干族部落がある。これより綏定に至る間の中央に嘗て露國の郵便驛たりし建物がある、今は一滿洲人の有に歸してゐる。此に廣大な米田があるが、之が第一播種所で、綏定住民に所屬してゐる。

綏定より國境の露國郵便驛ホルゴスに至る徑路。シチエテイニン將軍による。（註）

註　アジア資料集、第二四卷、一一八―一一九頁。

綏定より國境の露國郵便驛ホルゴスまでの間には上下二條の通路がある。

上街道はチンチヤホヂ、アリムタ等の各地に向つてはゐるが、途中に橋梁のない灌漑用大用水があり、泥濘の沼澤多い地點が澤山あるので現在では此道は殆ど全く捨てられてゐる。（註）

註　露國が伊寧地方を占領してゐた時代には伊寧行き郵便道路は此道であつた。

現今の交通は全く下街道によつて行はれ、郵便も亦之を利用してゐる。

綏定を發して後現在使用されてゐる郵便道路（下街道）は、四露里を過ぎてタルチ沼に達する。此に四水道があるが、之に渡してある橋は何れも共保善法方惡く、之が通過は非常に不便である。

沼地を過ぎて、緩い勾配の阪を上ると高地に出る、此高地には道の右方に兵舍がある。ホルゴス河の前方一〇露里足らずの點に、チンパンヂ兵營の殘骸がある。兵營は既に半は破壞し、現在では塔城より移動して來たシボ・ソロン族が五〇戸之に住居してゐる。國境より約四露里を隔てた、ホルゴス河の近くに支那の國境哨所、ニカンカラ兵營があり、之にシボソロン族の民兵が據つてゐる。ホルゴス河左岸にある露國宿驛附近には、ホルゴス河の分流數流の渡河點がある。渡河の能否は季節に支配される。春、ボロホロ山脈の雪が融ける頃は、ホルゴス河の水嵩は非常な增加し、渡河は自然非常な困難を見、時には全然不能とさへなる。夏は淺瀨僅か二呎半の深さとなる、併し水勢は非常に早い。綏定―ホルゴス間の總里程は四五露里である。

アチャルに於ける元露軍陣地より烏蘇に至る徑路。 一八八〇年踏破せるチフメネフ氏による。（註）

註　測圖はコンパスを使用。オムスク軍管區司令部報告、第五五號、一八八〇年。

アチャル（露軍陣地）。ボルグタイ河を渡りて、道はボロホロ山脈北側前山の緩い阪を上り、一四露里の地點に於てエビノル平野に下つてゐる。三〇露里の地點に於て大（ボグドハン）街道に合してゐる。同所にはユンチチを稱される部落若干がある。部落附近には牧草、燃料、泉などある。

精河の前方二露里の點に、分流してゐる精河の渡河點がある。淺瀨の水深は（九月末）二呎半程あり、水速は中位である。

道は到る處通過容易である。軍隊のためには此行程は二日行程とし、ユンチホ（三〇露里）部落までを第一日行程、精河（一五露里）までを第二日行程とするのが至當である。精河附近は露營地として最も便利である。

精河市。四五露里。精河市までの道路は便利此上もない。輜重に取りて難關は最終の一一露里で、其中五露里は飛砂で埋まつてゐる。クムブラク水源は水が豐富で步兵二ケ中隊、騎兵二ケ中隊、砲二ケ中隊に給するに足りる。水源附近廢虛より左方半露里には露營地がある。

水源クムブラク。二一露里。クムブラク水源より道路は初め鹽澤地を（四露里）、次いで砂礫の多い道（五露里）を進み、宿營地より一一露里半にして深い砂地に入り、之を七露里進むのである。鹽澤は雨期非常に行動を苦しむるが、乾燥時には砂のために苦しめられる。

水源クリウルテン。二六露里半、クルウルテンよりは道路は或は珍らしい山林の間、或は蘆の間を過ぎる。一八露里の地點には兵營があり、之にシボ族の騎兵二ケ中隊（チ）駐屯してゐる。兵營を過ぐれば道路はダチャザ河を横斷してゐるが。此河の橋梁は誠に粗惡である。河幅は約一〇步であるが、雨期之が通過は至難である。タルルイク（クルトヘ）河畔の露營地點は誠に好都合である、水、畔料、牧草何れも豐富である。

タルルイク（クルトヘ）河。二五露里半。タルルイク河畔の宿營地より道路は石多き河床を進み、其支流四流を渡る。二露里半の地點に於ては本流を横斷してゐる。本流の河幅は一五步、其水深（十月初め）は二呎である。此に同河の右岸に冬の村クルトがあり、其附近に兵營がある。道路の兩側は或は山林、或は蘆に包まれてゐる。露營地點は宿泊地の前方二露里半程の地點にある。

シカシャウ（三森）―二五露里。シガシャウより道路は餘り濃密ではない山林の間を進んでゐる。一〇露里の地點ブルタジ村附近に達して山林が盡き、ハヤガネ草の叢が現はれる。ブルタジ村には灌漑用水道に橋が架けてある。此村を去る九露里の地點に於て道路は二筋に分れ、東に向ふものはクルカラウスを經て綏來に通じ、北東に進むものは烏蘇に出てゐる。烏蘇街道は全長八露里半を有し、ヨモギの密生してゐる間を通つてゐる。露營地としては烏蘇市の南、クルカラウス河の水源が適當である。馬糧は良品を得るが、燃料は露營地附近にない。

シヤ市―四〇露里。アチャルより總里程一八三露里。

此間の道路は全部三兵料及輜重何れの通過も容易である。途中の障害物中ヂン河のみは其増水時（六月十五日以後八月末日まで）には正に最大障害である。露營（宿泊）宿舍は比較的低地に設定する。精河を出でゝ第一宿營地には水が少く且つ飼料がない、第二宿營地に於ては井戸を掘らねばならない。道路沿道には移住民部落は全然ない、從つて途中住民の物資を當にすることは不可能である。晝夜の氣溫の激しい變化、比較的低地に設くる宿營、沼の水源を利用すること等は、若し軍隊にして適當な豫防處置を講じない場合には、或は熱病或は下痢症を惹起す原因となるものであり、又道路上に積もつてゐる鹽澤地の塵は眼を損ひ易い。若し露國軍隊にして伊寧盆地より進出する必要ある場合には、伊寧―烏蘇間の徑路は次の如きものに據るべきをチフメネフ氏は提唱してゐる。

伊寧市。

（一）ビリチ峽谷の入口―二三露里。（二）トウラス天然境界（トウラスウ河渡河點）―三二露里。（三）ボルグスタイ河上流―二〇露里。（四）アチャル天然境界―二〇露里。（五）アチャル前哨舊陣地―二七露里。（六）ユンヂホ―三〇露里。（七）ヂンホ市（ヂン河渡河點）―一五露里。（八）クネブラク水源―二二露里。（九）クリアルタン水源―二六露里半。（十）タルルイク河（淺瀨渡渉）―二五露里半。（十一）シガシヤウ（淺瀨渡渉）―二五露里。（十二）ブルタヂ村―一二露里。（十三）クルカラウス堡壘（註）

註　此行路はチフメネフ氏の提唱に係るものであるが、其論據は、烏蘇附近の支那の防備施設ある兵營を攻擊するには、西方よりするよりは南方よりする方が容易であると云ふにある。

―二四露里。（十四）烏蘇市―八露里。合計三〇九露里。

伊寧より道路は全部便利な車輛道である。ベリチ以後の道路は一八八〇年支那との戰爭準備の際、露國軍隊の手によりて完成された車輛道である。

本街道の一部、精河市―烏蘇市間は一八七九年レゲリ氏が通過してゐる。ロシャ帝室地學協會々報（一八八一年、一七卷、一九九―二一五頁）に揭載された、レゲリ氏提供の旅程は次の如きものである。

精河村。ヂンホ村以後の道路は全部平坦である。

クネブラク水源―二五―三〇露里。クネブラクよりは貧弱なサクサウルに包まれた丘陵に始まり、次いで純鹽澤地に育つて地ろ曠野性白楊である。

タツウ哨所―四〇―五〇露。里タツウよりは沿道の土地が改まつて、或は草原或は山林が現はれてゐる。

エビテ哨所―三〇露里。エビテ哨所はタルヅイブラク河畔に設けられてゐる。これよりシガシウまでは開潤地である。

シガシウ村―三〇露里。シガシウ村は地圖にはヂルギリツイと示された水の涸れ上つた河に臨んでゐる。シガシウ村よりブルタヂまでの沿道の土地は美事なニレ林に包まれてゐる。

ブルタヂ村―一〇露里。ブルタヂよりは附近の土地は平坦な開濶地である。

烏蘇市―二五露里。烏蘇市はカラス河畔にあり、人口約一萬戸、守備兵二千、合計一六〇―一七五露里。

タキアンザ市より精河市までの徑路。

タキアンザ市。タキアンザ市よりは平坦な曠野である。

ユンヂホ部落―三〇露里。ユンヂホより道はアチャル街道（チフメネフ氏のアチャル―シホ間旅程參照）と合する。ヂンホの前方二露里にヂン河淺瀨渡渉點がある。

精河市―一五露里。合計四五露里。

烏蘇より廸化に至る徑路。チフメネフ氏の試問せるもの。

烏蘇市。烏蘇より二〇支里（支里は露里の二分の一少々）の地點に溪流（キイツイン）の渡渉點がある。道路の土質は硬く、

小粒小石交りである。二水源附近に宿營點がある、其附近には牧草も燃料もある。

クイトン村—四〇支里。クイトンよりは途中水がない、アンチホイ萬所附近には河がある。道路の土質は軟かく、鹽澤地質である。道路の兩側には各所にサクサウルが繁茂してゐる。アンチホイ哨所は樹の少いニレ林の中にある。宿營地點には牧草がある。

アンチホイ哨所—九〇支里。アンチホイより道の土質は軟い。道の兩側にはニレ林が、而かも所々密生してゐる。途中には飲料水はない。サンタホチ哨所附近に溪流があるが、之は渡渉が出來る、併し春増水の際には渡渉は困難である。宿營地には燃料飼料何れもある。

サンタホチ哨所—七〇支里。サンタホチよりの道路の土質は軟い。兩側には樹の少いニレ林がある。宿營地の水は水源から汲む、燃料飼料共に豐富である。

アラドスン哨所—三〇支里。アラドスンよりの道路の土は軟く、兩側には樹の少いニレ林がある。途中數流の溪流がある。ブチユンヅイ哨所　　の近くに小麥及　　の畑がある。

ブチユンヅイ哨所—二〇支里。ブチユンヅイを發して後の途上に溪流があり、之が渡渉は六月には不可能である。

綏來市—二〇支里。マナス市に於ては馬料及燃料は容易に手に入る。

タクルイ—九〇支里。灌漑用大水道二流。

フツウビ村—七〇支里。灌漑大水道一流。

サンヂ村—九〇支里。灌漑大水道一流。

廸化市—九〇支里。有力な溪流がある。合計六一〇支里。

結局烏蘇—廸化間は約三〇〇露里である。此間の道は砲兵輜重何れの通過にも全く支障はない。

烏蘇—廸化間徑路。一八七九年之年之を踏破したるレゲリ氏による。（註）

註　ロシヤ帝室地學協會々報、一八八一年、第四卷二〇九—二一〇頁。レゲリ氏の示す里程は何れも概略數字である。

烏蘇より一二露里の地點に於て道はキイツイン河と交叉してゐる。

クイツン村—二五露里。クイツンには三兵營があり、之に滿洲騎兵及カルムイク騎兵約五〇〇が居る。

ヤンチハイ村—三〇露里。ウランウス哨所—五〇露里。綏來市—三五—四〇露里、フトー四五露里。フツビ村—三〇—三五露里。道はサンヂ村まで續いてゐるニレ林の間に通じてゐる。

サンヂ村—五〇露里。サンヂ村には東干族が、住居してゐるが、其數は約一千である。

廸化市—三五—四〇露里。合計は三〇〇乃至三一五露里である。

哈密よりピチヤン及ツウルフアンを經て廸化に至る徑路。支那郵便案內書より抜萃。（註）

註　ソスノフスキイ、支那に於ける露國學術通商探險隊。軍事資料集、一八七六年、第一一號、二四四—二四六頁。

哈密市。

ボウブ村—九〇支里。

村は廢虛の中にあり。此名の村は計三あり、何れも回教徒のトルケスタン出身者のみ居住す。第一村は哈密を去る三〇支里に、第二は六〇支里、第三は九〇支里にあり、植物は豐富である。

ヤツイツユアン宿驛、七〇支里。

宿營地を發して間も始まる不毛地旅程ある。

リヤオドン宿驛。八〇支里。

良好地區にして、良好植物を有し流水を持つてゐる。リヤオドニよりグウチエンに通ずる村道が分れてゐる。

ウツンチ宿驛。九〇支里。

以前は旅人宿所であつた。これより數日行程の間道は曠野を通つてゐる。

サンツヤニフアン。九〇支里。

此道は上下の阪多く難路である。丘の頂上には石（砥石）が多い。

シサンチヤニフアン宿驛。一四〇支里。

曠野にありて極端に貧窮な宿驛である。明朝の歴史によれば此行程が最も危險とされてゐる。當地に於て旅行者が間斷なく吹く風のために遭難すること屢々であつた。途中に古代から有名になつてゐる『フエイフインチユアニ』と稱する風穴がある。此風穴から時々恐ろしい强力の風が吹き出し、砂や石片の雲を吹上げ、人や馬車までも吹飛ばして行衛不明にして了ふ。此行程は砂と小石の大山をなしてゐると云つて差支ない。

クシユイ宿驛。八〇支里。

チケリエンム宿驛。六〇支里。

前述せるものと同樣曠野の貧乏宿驛である。併し之を償ふ地方的特質がある、植物があり流れ水があり、其他各種の便宜がある。

スルツウ宿驛。四〇支里。

道路は平野を進んで行く。

ピチヤニ市。五〇方里。ピチヤニ市までの里程合計は七九〇支里である。

曠野に有ゆる苦難に惱んだ揚句、ピチヤニオアジスで受ける歡喜は正に印象深いものがある。さればこそ支那人は『此處の天地は格別である』と云ふてゐる。古往此ピチヤニはリユヂヤンと稱へられてゐた。

リヤニムチニ村。六〇支里。

シエニチニコウ村。六〇支里。

第二日行程の部は山間峽谷を進んでゐる。シエニチニコウの近くに古代のハラホチエウの跡が殘つてゐる。

ツウルハン市。九〇支里。ツウルハンまでの合計里程一、〇〇〇支里。

ケンケン村。七〇支里。

ツウルハンを出でゝ後は地方情況次第に貧弱となり、ケンケン村は全く貧しい驛である。

トウダオヘ村。七〇支里。

道は丘と小山の間、砂と小石の上を進む。

バイヤンヘ村。八〇支里。

度々渡る溪流の岸は何れも柳や老松の密林に掩はれてゐる。

ダバンテエニ。八〇支里。

此行程にボグドバニと稱する天山越えの峠がある。飛砂が多く、馬や車輛の脚が深く潛つて少なからず惱まされる。其近くにボグドオルの雪を戴いた四尖頭が雲を突いて聳えてゐる。

チヤイチフ村。九〇支里。

嶮岨な山を通過しなければならない、此山の麓に一大鹽湖が廣がつてゐる。ダバニチエン後の地區には立派な植物が茂つてゐる、道の兩側に密生してゐる草類は人間の身丈を凌ぎ、各種獸類の屈强な隱家となつてゐる。

廸化。一〇〇支里。新疆統治の中心。廸化に至る里程合計は一四九〇支里である。之を露國里程に換算すれば七〇〇露里以内である。

以上の如く廸化又ツウルハン經由の、綏定—哈密間の徑路は次の通である。

綏定。

タキアンザ市―一四五露里。シチエテイニン將軍の旅程參照。

精河―四五露里。此里程は我が露國の地形測量者の實測による。

烏蘇―一三八露里。廸化市―三〇〇露里。チフメネフ、レゲリ兩氏旅程參照。

哈密―七〇〇露里。支那郵便旅行案内による。合計一三二八露里である。

併し綏定よりアチャル、烏蘇、廸化經由哈密までは左の通りである。

綏定。

伊寧―三八露里。シテエテイニン將軍の旅程。

烏蘇(アチャル及チンホ經由)―三〇九露里。チフメネフ氏旅程。

廸化―三〇〇露里。チフメネフ氏及レゲリ氏旅程。

哈密―七〇〇露里。支那郵便旅行案内。合計一三四七露里。

廸化―奇臺間經路。(註)

註　廸化―ヂエミッサ(ウエニユコフ氏によれば―チムサ)間は今日に至るまで歐羅巴人の旅行者一人もない。此里程はウエニユコフ氏の著『アジヤに於ける露國々境軍事視察の經驗』第一卷、五〇―五二頁より、又ヂエミッサよりの程はベフツオフ氏の著『ヂユンガリヤ梗概』五二―五三頁より夫々拔萃。

廸化。廸化より道はよく灌漑されてゐる平野を進んで行く。

ヘイゴウ哨所―二六露里。ヘイゴウよりは僅かな波狀の土地が連續してゐる。

フカン―二四露里。デイツユアニ―二〇露里。チントイ―二七露里。フロン―サニタイ間の道路は山麓を進んでゐる。

サニタイ―三三露里。サニタイより土地は、山間より流出する諸川によりて十分灌漑されてゐる。

チエミッサ村―三四露里。チエミッサは一八七六年ベフッオフ氏の訪問した所である。ヂエミッサ―奇臺間の道路は立派な工事の施されたもので、各所に楡林のある美しい平野を進み、多くの小流を横斷してゐるが、何れも堅牢な橋が架けてある。道路の兩側には今日も尙ほ各所に古い標識がある、高い、ピラミッド型の石碑で、各々三支里宛を隔てゝゐる。奇臺―四〇露里。合計二〇四露里。

鎭西―奇臺間の徑路。

一八七五年之を通過したソスノフスキイ氏による。(註)

註　軍事資料集、一八七五年、第一一號、一二五頁。

全區間を通じて良好な道路で、全く立派な工事を施された大國道である。

鎭西。

グケイチユアニツア―二九露里四分ノ三、七〇支里。

ロベイチユアニツア―三一露里二分ノ一、九〇支里。

硬い道が、バルクリ湖のある高臺の盆地を貫いてゐる。左方に天山、右方には別に名もない東より西に走つてゐる餘り高くない、石の多い小丘がある。

註　此小丘はポタニン氏のメチンオラと名づけてゐるものである。

ウツシユイ―二一露里、六〇支里。

チチタイツア―二八露里二分ノ一、八〇支里。

ダシトウ―四六露里四分ノ一、一一〇支里。

チヤンガチユアニツア―四二露里二分ノ一、八〇支里。

次間の道路は、平野の縁邊をなしてゐる石の多い高地の間の峽谷を貫いてゐるが、車輛の通過に些の支障もない。最終の一宿驛附近は小盜賊團の襲撃に注意しなければならぬ。

ムライヘ村—三四露里二分ノ一、九〇支里。

大村落跡。

チタイシャニ市—三三露里四分ノ一、九〇方里。郡廳所在の都市なりしも、現在では役所は奇臺に移されてゐる。奇臺、三五露里、九〇支里。

合計三〇二露里二分ノ一、七六〇支里。

哈密—鎭西間の徑路。

ソスノフスキイ氏による。（註）

註 軍事資料集、第一一號、二二四—二三五頁

哈密。

ナニシャニコウ宿驛、四三露里、一二〇支里。

何一つ生えてゐない不毛の土地が、天山越えの峠に通じてゐる峽谷の入口、數軒の旅宿舍のある所まで續いてゐる。

シウリシャニヅァ宿驛、三二露里、七〇支里。

天山の上り路は前記峽谷の間に通じてゐる。路上の石が取除けてないので荷車の通過は困難である。

峠の絶對高度八、九八〇尺に達してゐる頂上には休息所と新築の堂祠とがある。此より道は比較的緩かな傾斜の下り阪を下り始める。下り坂は天山々脈の嶮しい絶壁の北斜面に、ジザク型に著いてゐる。宿驛は峠の絶頂の一〇露里前方にある。

奇臺、五五露里、一三〇支里。

大行程ではあるが道路が償秀なので前進は容易である、時には之を二日間に通過することもあるが、其場合には鎭西の前方二〇露里程の一部落に宿泊する。鎭西までの總計は一三〇露里、三二〇支里である。

結局タキアンザ、烏蘇、廸化、奇臺經由の綏定—哈密間の徑路は左の通りである。

綏定。

タキアンザ	一四五露里
精河	四五露里
烏蘇	一三八露里
廸化	三〇〇露里
奇臺	二〇四露里
鎭西	三〇二、二分ノ一露里
哈密	一三〇露里
總計	一、二六四、二分一露里

アニ・シニ・ジエウ市—哈密間の徑路。一八七六年之を實測したるソスノフスキイ氏による。（註）

註 軍事資料集、第一一號、二三二—二三三頁。

シャヂニザ（ベイドザ）移住地、三〇露里四分ノ三、七〇支里。

二露里を離るればブドニチル河の淺瀨を渡渉するのであるが、此渡河は左程困難ではない、其後は不毛の、砂利や小石の多い曠野の路となる。シャヂニツァ移住地は水が苦辛く、ハヤガネ草や蘆の生茂つてゐる砂地にある。

シャオチエン、二一露里四分ノ一、九〇支里。？

此道は最初幾分砂を交へた砂利地あるが、其後一部は粘土を含み、一部は石の多い、粘土性片岩や石英の破片などから成

つてゐる丘狀高地に出る。一三露里の地點には移住地ドンファがあるが、同地の水は腐敗してゐる。シャオチエンは水量豐かな井戸は少いが、其水質は良い。又其附近には牧草や小灌木類がある。

ベイチチ移住地、四七露里四分一、一二〇支里。

行程の大部分開濶地を過ぎ、土質は硬い粘土質である。二三露里を過ぎて、フンムシャ移住地に達する、水の豐富な所であり、又其牧草は他所に勝りて良質である。ベイチチの井戸は不潔で且つ久しく使用せざりしものである、水は惡臭があるが、飲用出來る。

チチタイツァ移住地、四一露里、一二〇支里。

道は硬い良道である。全く眼を遮切るもののない平野を進んでゐる。平野の周圍には僅かな高地がある。チチタイツァにある水は腐敗した鷄卵の如き臭氣を放つてゐる。牧草は少い。之より平露里足らどの地點には石中に井戸がある。

シュアニチュアニツァ(フニレウシャ)移住地、二五露里四分ノ三、六〇支里。

此行程の全區は、次の行程の半ばまでと同樣、道の通じてゐるのは石の多い高地であるが、此高地は大部分裸で、崩壞個所や溪谷には良質の牧草が茂り。其上には野生驢馬、驛、鹿などの大群が戯れてゐる。シュアニツァと火山系小丘の出口にあるルチャニチュアニツァとは、共に優良且つ健康に適する水の水源地である。

バツアチュアニ驛、三六露里、一一〇支里。

永久宿場があり、水量豐かな水源があり。豐富な水源、曠野羊、早鐘草、有り。天山の雪も見える。

ウドニツイ宿驛、三三露里二分ノ一、九〇支里。

畜舍附き住宅が小峽谷の許にある、此峽谷の底には溪流が流れてゐる。木材燃料は不足勝であるが、家畜糞が多いので之を補ふに十分である。牧草は十分にある。

マオエルコウ河、五〇露里二分ノ一、一四〇支里。

宿營地より一〇露里を隔てゝ堂祠と獨立建物若干とが、白楊と柳との濃い蔭の間にある。次の宿營地の一〇露里前方にスイシリチンツァ小部落跡がある。

哈密市、三八露里四分ノ三、七〇支里。

廣大な草原地帶が流水に灌漑されてゐる。哈密街道の中央にファニルチャンと稱する大部落がある。

シンシニヂオウより哈密に至る總里程三八〇露里、一、〇一〇支里である。

アニシニヂエウよりゴビ經由哈密に至る別路。支那測量による。(註)

註　軍事資料集、第二一號、二四三―二四四頁。

アニシニヂエウ。

バイドウニ移住地、九〇支里。

砂漠中に苦辛い水の水源がある、それより若干西方に方リシンシンツァの井戸があり、其水は優良である。

フニモユアニ移住地、七〇支里。

別名をフンリユチャと云ひ、石の高地と砂丘とを以て形成されてゐる盆地にある。

ダツユアニ(大水源)移住地、八〇支里。

途中宿營地より五〇支里を離れて尙ほソチユアニ(小水源)と稱する井戸がある。併し此井戸は水の涸渇してゐることがよくある。

マリヤニチン移住地、七〇支里。

前述の驛より四〇支里を隔てゝ井戸リチブがある。マリヤニチニのある山は、之を訪れた獵師の證する所によれば、金屬